鑑定備考

日本陶器全書

大正二年歲在癸丑立杯

小大路大觀題

卷四

鑑定備考

日本陶器全書卷之四目次

肥前……一
唐津燒……三
一 米量……四
二 根拔……四
三 奥高麗……五
四 瀨戸唐津……五
五 繪唐津……六
六 朝鮮唐津……六
七 掘出唐津……七
八 献上唐津……七
九 近代の唐津燒……八
十 唐津に混入せる外國陶……八
伊萬里燒……九

一　有田窯……一〇
有田窯の起原……一〇
掘出手時代……一二
伊萬里金襴手……一三
献上伊萬里……一三
三保磁……一四
明治後の有田窯……一五
有田窯土石に關する制度……一七
有田窯上好品と落款……一八
二　有田の分窯……一九
三　大河內窯……二二
四　嬉野燒……二三
五　松ヶ谷窯……二五
六　白石窯……二五
七　三河內窯……二五
八　甕山窯……二七
九　含珠燒……二八

其他の肥前磁器……二九
肥後……三〇
八代燒……三〇
一　八代燒の起原……三〇
二　八代燒の傳統……三一
小代燒……三二
網田燒……三三
其他の肥後燒……三三
日向……三五
大隅……三六
帖佐燒……三六
龍門司燒……三六
其後の大隅陶器……三七
薩摩……三九
一　古薩摩燒……三九

二　御判手……四一
三　錦樣　白薩摩……四二
四　平佐燒……四三
五　薩摩燒の特徵……四三
六　其他の名工と銘印……四四
七　近代の薩摩燒……四六
沈壽官……四六
國分八郎……四八
慶田政太郎　限元金六　東鄉壽勝……四九
對馬……五一
對州燒……五一
志賀燒……五二
補遺……五三
朝鮮……五五
伊羅保……五六
一　古伊羅保……五六

二 本伊羅保……五六
三 伊奈伊羅保……五七
四 黄伊羅保……五七
五 其他の伊羅保……五七
三 島……五八
一 古三島……五八
二 花三島……五九
三 彫三島……五九
四 骨三島……六〇
五 伊奈三島……六〇
六 其他の三島……六〇
判事……六〇
一 遊撃判事……六一
二 紅葉判事……六二
三 眞判事……六二
四 其他の判事……六二

五　器……六三
一　紅葉五器……六三
二　大德寺五器……六三
三　尼五器……六四
四　錐五器……六四
五　楯形五器……六四
六　其他の五器……六五
雲鶴……六六
一　狂言袴……六六
二　古雲鶴……六六
刷毛目……六七
一　古刷毛目……六七
二　筋刷毛目……六七
粉引……六八
井戶……六八
一　井戶脇……六九

二　蕎麥井戸……六九
金海……七〇
熊川……七〇
御本手……七一
一　御所丸……七一
二　玄悅御本手……七一
三　茂三御本手……七二
四　其他の御本手……七二
繪高麗……七二
割高臺……七三
日本陶磁年表……七四
附錄
日本の窯工と支那及泰西の窯工との比較及其の大觀……九二
索引

鑑定備考日本陶器全書卷之四目次終

鑑定備考 日本陶器全書

巻之四　大西林五郎編纂

唐津焼の圖

肥前

肥前の陶器は其起原甚だ古く、今を距る千二百五十年前、孝徳天皇の朝、既に陶器の一種瓦器ありしことは、史に載する所なり。當時の瓦器は極めて堅硬のものなれども、未だ釉を施すに至らざりき。其の後年序を經て、其の業漸く盛んに、齋明天皇の朝、唐津港頭の山麓に高麗製陶の法を見聞して、大形の茶碗を造りたるものあり。之を唐津焼の元祖となす。

唐津焼は之より愈盛んに、産出の國も多く、漸く全國に洽ねく普及し、名古屋以東の人が、陶器を目して瀬戸物といふが如く、大阪以西の關西人は、陶器を稱して唐津といふに至り、唐津は即ち陶器の代名詞たるに至れり。故に本邦

伊萬里燒の由來

に於て、之を東にしては尾張の瀨戸、之を西にしては肥前の唐津は、陶業界に於ける兩大關の觀ありしなり。

唐津の陶業漸く盛んとなるに伴れて、工人各發明する所ありて、窯を國内の各所に開き、肥前國中殆ど陶器を産せざる所なきに至れり。就中有田、大河内志田、小田志、松ヶ谷、白石、三河内、甕山の諸窯最も聞え、有田窯は更に分れて、一の瀨、南河原、鷹房、外尾、黒牟田、廣瀨の六窯となれり。此の十五窯を總稱して、世に伊萬里燒といふ。蓋し、伊萬里は固と商人輻輳の地にして陶場にあらずと雖、此等諸窯より出る諸陶器は、多く伊萬里に集中して、後各地に輸出せらるゝより、世人稱して伊萬里燒とは稱するなり。されば、肥前の陶器は之を大別して、唐津、伊萬里の兩燒となすべく、伊萬里は分れて十五窯となれるを知るべし。今之を表示せんか

- 肥前燒
  - 唐津燒
  - 伊萬里燒
    - 有田窯
      - 一の瀨窯
      - 南河原窯
      - 鷹房燒
      - 外尾燒
      - 黒牟田燒
      - 廣瀨燒
    - 大河内燒
    - 志田燒
    - 小田志燒
    - 吉田燒
    - 松ヶ谷燒
    - 白石燒
    - 三河内燒
    - 甕山燒

伊萬里焼の總名の下には、此の外和泉山、大樽、上幸平、白川、中樽、稗古場、赤繪町、岩屋、長原、中野原、三つの股などの窯山あり。互に盛衰變遷一ならずと雖、要するに、肥前國外の人の目よりは、一は唐津焼、一は伊萬里焼の兩名稱の下に一括視せられたるなり。而して今日肥前に於ける陶器の主産地は、

西松浦郡……有田町　有田村
藤津郡……西嬉野村　久間村　鹽田村
杵島郡……橫　村　四川登村
三養基郡……北茂安村
東彼杵郡……上波佐見村　下波佐見村　折尾瀬村

の數個所に分れ、製造戸數三百五十戸、職工三千五百人、約七十五萬圓の産額に達せり。

唐津焼

唐津焼の起原の詳ならざること、幷に孝徳天皇の朝、唐津港頭に瓦器の産出ありしこと、爾來引續きて今日に陶器の産出あること等は、前既に述ぶる所の如し。然れども今日世人の唱ふる所の陶器は、五百八十餘年前の昔、元享以後

唐津焼の起原

の作に係るものをいふ。蓋しこれより以後、釉藥の見るべきものあり。製法形式の完備ありて、陶器の體を具へたればなり。而して、元享以後の陶器は其の發達變遷の年序によりて、米量、根拔、奥高麗、瀨戸唐津、繪唐津、朝鮮唐津の六種に分ち、米量、根拔、奥高麗を總稱して古唐津といひ、外に掘出唐津の目あり。瀨戸唐津、繪唐津、朝鮮唐津、掘出唐津の四種を唐津の名物といふ。

一　米量

米量は五百八十餘年前、元享年間に製せし陶器にして古唐津の一なり。陶膚に薄釉を施したるものなれども、未だ潤澤なし。米量といへば當時之を以て斗量に用ひしに因る、との說あれども信じ難し、何となれば、形狀種々に分れ、大小一ならざればなり。唯米を掛するを以て名けしのみ。

二　根

根拔は五百七十年前の陶器、即ち建武より文明年間に亘りて製せる陶器にして古唐津の一種なり。陶質は白土あり、赤土あり、釉色は鉛色にて臺輪の內縐紗の縐の如く、縞狀に土質を露はして、釉を施さいるものなり。古雅愛すべく

世人の賞讃措かざる所のものなり。

奥高麗

三　奥高麗

奥唐津

これも亦古唐津の一種にて、文明以後、天正年間の作に係り、凡そ三百年乃至四百年前のものなり。陶質稍密にして、釉色は枇杷實の如く、又青黄のものもあり、臺輪の内に根抜に見る如き皺紋あるを殊に良しとして、世の珍賞を受く。此の時代は點茶の盛んに行はれたる時代にして、高麗の茶碗を珍愛したりしも、舶來のもの少く、容易に得難かりしを以て、唐津にて模造せしめて、需用に投合せしものなり。依て後世此の時代のものを奥唐津といふ。奥は往古の義にて、古き高麗といふが如し。

奥高麗は唐津の奥窯にて、高麗の陶工來りて焼きしより、其の名ありとの説あれど、附會の説に近し。總じて、奥高麗の土は細かく、綱紋の皺あり、香臺は一體に低く平目に着き、貫乳は龜甲形にて、萩焼の唐松様なると識別す。茶碗は平目にて、つぼみあるを良しといふ。

四　瀬戸唐津

瀬戸唐津
トヽヤ　泉州堺の市兵衛なるもの、唐より持ち歸りし茶碗にて渡唐屋と書くよし、茶人の間に珍愛さるゝ品なり

繪唐津

朝鮮唐津

瀬戸唐津は應仁より天正年間に亘りて製出せるものにて、黃瀬戸の釉水を用ひ　より此の名あり。白土にして、白色釉を濃く施せるを以て、龜甲の劈痕多し。此の時代の黃瀬戸は、黃色の域を脫して、寧ろ白色のものなりき。貫乳は至て大きく、形は唐物トヽヤに似たるもの多く、瀬戸唐津の最も上作とせられたるは、土白鼠ざんぐりと、綱紋皺あり、白鼠の藥まくりたるにあり、其の外の品は値段安し。

五　繪唐津

繪唐津は慶長以後のものにて、茶碗、盞、盆などの雜器多く、質赤土にして青、黃、黑を兼ねたる釉を施し、潤澤に富み、繪は草書なり。作は一體に薄作りにて、土は少しあら目に、香臺は半月形、又は常態に分れ、尤も意を用ひたる痕あり。

六　朝鮮唐津

天正より寬永年間に至て製する所のものなり。土及び釉を朝鮮より輸入し、唐津の窯にて燒きしものにて、質は赤黑く、青白を雜へたる釉を流布せり。俗

にいふナマコ薬にて、水壺、盞、盆に多く、茶碗に稀なり。いづれも世の珍賞を受くるものなるが、就中流れ釉のあるは、上好のものなり。

掘出唐津

七　掘出唐津

寛永年間より享保年間に掛けて作りしものをいふ。掘出唐津といふは、當時火候度に過ぎて、或は縮み、或は缺損する所ありて、工人之を不用とし、土中に投棄せしものを、後世之を掘出し得て、珍賞するに至りしより名けしものなり。此の掘出しものゝ、殊に良きものありしより、埋まざりし全備の品も、同時代の作は掘出唐津といふに至れり。質は一體に堅く、青黒を帶びたる釉色にして、臺輪の土質を露はせるもの、露はさゝるものありて、一ならずと雖、その内に皺紋あるを上好とす。形は多く正圓ならず、高臺は半月形のもの多し。

献上唐津
雲鶴
高麗の焼物にて地紋に雲鶴の絵

八　献上唐津

献上唐津とは、光格天皇の御宇、安政年間唐津の城主小笠原氏、工人に命じて肥後八代の製に似たる白紋にて、雲鶴等を模様し、之を幕府に献上したるものなり。白紋とは地を彫り凹めて、其の上に白釉を施したるものなり。幕府へ

を書き、上に釉をかけたるものなり

近代の唐津燒

献上のことは、安政以後例年絶えず、以て明治維新前まで行はれたりしが、幕府の廢さるゝと共に、此の制絶えたり。

九　近代の唐津燒

唐津燒は古唐津時代に於て、其の業最も盛んに、降て元祿、享保の頃に至りては、陶家益多きを加へ、其の後良工亦少からず。太郎右衛門、彌次兵衛、喜平次等の良工も輩出したれど、多くは舊制を墨守し、點茶器を製するに止まり更に他の發明に注意せざりしを以て、漸次衰頽に赴き、今日に於ては良工のあるを聞かず、其の窯も亦微々としは振はず、殆んど廢滅に近きは、此の歷史ある陶場として、誠に遺憾の次第なり。

十　唐津に混入せる外國陶

世上唐津ものといひ傳ふる中に、外國ものゝ入り交れるが多し、能く注意すべきなり。その混入物として『陶器考』に列擧せるもの左の如し。

唐　トヽヤ　福州舟山の諸燒物下手の分

安南（白藥黑繪）のもの　粉吹手下手物　繊部の香合、茶碗、鉢、皿、水指其

外　玉子手下手物　堅手、繪堅手　澁藥、澁紙藥、黃藥のもの等

呂宋　フユカン窯青藥、黑藥、澁藥、金氣藥、紫藥、淺黃藥の茶入、香合、茶盌、鉢、皿、猪口等

同窯　青磁水指、茶碗、香合、その外

眞壺窯　右同斷

クギボリ窯　右同斷

ハンネラ窯　右同斷

朝鮮　與高麗、朝鮮陶、金海堅手下手物

印度　青藥茶碗、香合、鉢、皿、片口、猪口、茶入、其の他

アマカワ　茶入、茶碗、鉢、皿、香合、その外

伊萬里燒　俗に今利燒に作る

肥前西松浦郡伊萬里町は、伊萬里灣頭に位し、商業的都邑にして、陶場にあらず。附近に產する陶器、こゝに集中し、伊萬里商人の手を經て、諸國に輸出販賣せらるゝこと、前既に述べたるが如し。而して、伊萬里燒なる名稱の下に有田窯以下十數ヶ所の陶器を包括し、各窯みな多少特異の點を有するを以て、

之を各節に分ちて說明するは却て其の要を得るに近し。

一　有田燒

有田窯の起原

有田は西松浦郡泉山の前面、小溪中に位し、滿山悉く磁器に適する良土、釉料石を產する日本第一の地にして、本邦磁器發達の基礎を起し、同業最大の進步を呈したる所なり。而して有田窯の組織立ちて、今日の基礎を作りしは、鍋島侯の朝鮮征伐に朝鮮陶工を伴ひ歸れるに起因することは、明かなる事實なるも、其の以前に於て、祥瑞の青華磁器製法を支那より齎らし來れることを記せざる可らず。

祥瑞

祥瑞は伊勢松坂の人、通稱を五郎太輔といふ。支那に航して、瓷窯の製、瓷製の法を學びて歸朝し、肥前に至りて、窯を各所に築き、土を各所に發見して青華磁器を創製したり。この祥瑞傳に就きては異說あり。祥瑞は支那明代の人五郎太輔はその祥瑞に就て、磁製の法を學べるにて、兩者全く別人なり、との說あることは、第一卷日本陶器の由來と題する章下に述べたるが如し。然れども、五郎太輔の祥瑞なることは、明の正德八年(我が永正十年)、五郎太輔業を卒

へて歸るとき、明の李春亭送別の詩あり。其の書伊勢山田の神宮寺に現存せるものに徵するも、隣交徵書に同詩の載錄しあるに見るも、其の然るを知らるゝなり。

送二居士五郎太輔一歸二日本一　李春亭

敬持二玉帛一覲二天顏一　回春扶桑杳渺間

船泊二古鄣三佛地　抔傳二新酒一四明山

梅黃細雨江頭別　帆引二清風海上還

明到賢王應レ有問　八方職貢溢二朝班一

惟ふに、祥瑞の肥前に青華磁器を傳へたる、或は唐津に於てし、或は有田に於てし、或は其の他に於てしたりしと雖、有田皿山の地、最も染付に適せしを以て、最も多くこゝに燒物を作りしならんか。而して、此の地にて燒きしものは、白藥藍繪に貫乳あり、呉須に似て土和らかなりしを以て、故らに銘を付せず、年所を經る間に、古びて質惡しくなることを憂ひしものならん。そは兎に角、青華磁器は斯の人によりて、有田に本邦磁器の發端を立てしものなり。

慶長三年鍋島直茂、朝鮮征伐より凱旋に際し、朝鮮人李參平なるもの、直茂の臣多久長門守政順に從ひてこゝに歸化し、朝鮮の磁法を以て、磁器を作るこ

とを計畫し、多久氏の邑多久村に開窯す。李參平は朝鮮金江の人なるを以て、歸化後金江氏を稱し、子孫今に至りて、其の業を傳ふ。固と良工なれども、多久の土は磁器に適せず、成績甚だ擧らざるを以て、田中村に轉じて、所々に陶磁を試む。而かも未だ良土を得ず。最後に白堊を泉山に檢出し、始めて精潤潔白の磁器を製することを得たり。これより遠近の陶工相率ゐて來集し、尋で一部落を爲すに至れり。今の有田即ち是れなり。

掘出手時代

掘出し手

掘出手時代

而して、田中村にありし當時、出來の惡しかりしものは、之を土中に埋沒しありしが、後之を發掘したるに、粗造の白磁なれども、古朴却て愛すべきものあり、之を掘出し手と稱し、點茶家殊に之を珍愛せり。此の時代のものは、一に古窯といひ、李參平以外に、高麗陶工の金氏、宗氏も亦當時磁器の製作に努めたり。金氏は李氏の改姓したるもの、といふ説あれども、全く別人なり。宗氏は後に深海新太郎と改めたり。共に鍋島侯凱陣の際に歸化せる高麗人にて、金氏は金立山字熊山に居を卜したりしも、良土を得ざりしを以て、山形村字藤川内に移り、宗氏は杵島郡武田に居し、後ち有田の稗古場に移れりといふ。

此の時代は慶長より元和、寛永の間にして、年所四十年に亘れる間なり。此

陶業の制限法を布く

金襴手

獻上伊萬里

の間に於て、前記多久氏の領内には陶工多く集り來り、人員の多きに過ぎ、制規の紊れん恐れありしを以て、寛水十四年領内陶工に布告して、當時の陶工百五十五戸を定員と定め、一戸に一臺の磁器製造器械を置き、他は之を制限すと定められたり。而して、此の時は既に内地人の磁器を製するもの多く、高麗人に超え、百五十五戸中八百人の内地陶工ありしといふ。以て其の盛んなりしを知るべし。

伊萬里金襴手

次で、天保四年伊萬里の東島徳左衛門なるもの、長崎に赴き、支那來舶の總官に學びて、彩畫裝色の全法を得、屢試驗を經たる後、南河原の柿右衛門と謀り、遂に發明する所あり、始めて五彩及び金銀泥を磁器に附着することを得。極めて支那の金襴樣、錦樣の如きものあり。徳左衛門之を長崎に齎し、清商八觀に售る。蓋し之を以て我が陶器を外國に輸出するの嚆矢とす。尋で清商蘭人に貿易し、人々相傳へて描金彩畫を事とするに至れり。世に之を伊萬里金襴樣といふ。

獻上伊萬里

寛文中、仙臺侯伊達氏、江戸の商今利屋五郎兵衛を有田に遣し、磁器を求め

しむ。五郎兵衛乃ち辻喜右衛門の手に成れる器を齎し歸る。精巧他品を壓するものあり、之を朝廷に獻ず。朝廷深く之を愛で、爾後毎年內廷に朝進せしむることゝなれり。その器は、青華淡明にして清潔、品位極めて高尚なり。之に菊花の章及び舞鶴の紋を附して御器となし、其の他皇族諸家の御用に係るものをも併せ製せり。之を獻上伊萬里といふ。

喜右衛門の子嘉平次亦良工なり、孫喜平次常陸大掾に拜し、亦頗る技巧に富む。曾て窯戸を開く、磁器臺上より墜ちて、他器に抱合するを見、試みに之を懷かしむれば、一個の磁器其の中にありて、罌潤味ふべきものあり。茲に於て大に發明する所あり、外包の砂器中に、精巧の器を安定し、釉藥を之に縫合する道を立つ、之を極眞といふ。これ今日香蘭社（後に詳なり）獨特の長技たる透彫の偏を作るもの。喜平次の時代は、化文政の頃にして、有田に名工の輩出したる時代なり、即ち泉山には深海乙吉あり、大樽には田代半次郎あり、白河に南鄕嘉平あり、何れも世に聞えたる良工なり。

三保磁

天保年間、有田の豪商に久富與次兵衛なるものあり。風流を好み、畵を能くし、點茶に巧なり。親ら磁器の形狀、畵樣を發明して陶工に授け、大に其の進

歩を助けたり。曾て泉山の石を以て調和したる釉藥の乾くに遲きを慨き、窃に平戸の土石を求め、之を試みしに、質乾き易く、人工を省く最も多きを見、更に五島の土石を混用するの利あることをも試驗して、其の製品は之を長崎に送り、盛んに外國人に鬻げり。毎品必ず三保の二字を銘す。三保は與次兵衛の號なり。大小の花瓶、盞、茶碗等を作つて、外國人に賣ること此の人に始まる。而して、其の販路は多く和蘭に求めたりき。久富の子孫、今猶は其の業を繼續す。

明治後の有田燒

明治維新となりて、廢藩置縣と共に、從來の如き藩の保護は廢れ、一時有田の諸窯は衰運に傾けり。前記喜右衛門の子孫、辻勝藏深く慨する所あり、深海墨之助、磁商手塚龜之助、深川榮左衛門等と結社し、合名會社香蘭社を組織せり。該社は深川榮左衛門を社長とし、其の基礎も堅く、其の組織も整頓し、今日有田窯業界の牛耳を執れるものなり。

明治九年米國獨立百年祭萬國博覽會を費府に開くや、香蘭社中深海墨之助等渡米して、彼の地の製陶業を巡視し、大に得る所ありき。當時香蘭社より出品せしものゝ精巧なりしことは、慥かに佛國セーブル社製を凌駕し、花瓶一個の

辻勝藏
深川榮左衞門
精磁社

價一千弗にて賣れ行きしに徵しても明かなり。是より先き、有田の磁器は、多く淸國に輸出せしが、米國博覽會出品後は、年々巨額の製品を米國に輸出するこゝなれり。

辻勝藏は祖先の業を紹ぎ、細密の透彫に妙を得、朝廷調進の例今に絶えず、聲名四近に鳴る。明治の初年前記の同志と謀り、香蘭社を組織し、益々業に精し。社長深川榮左衞門、亦二百五十年來の陶家に生れ、安政三年を以て家業を繼ぎ、拮据精勵、內は業務の改良に苦心し、外は其の販路の擴張に努め、明治九年米國費府の大博覽會には、香蘭社員を派遣して、親しく外人の嗜好を視察せしめ、明治十一年には親ら佛國に航して、巴里博覽會に出陳し、歐米各國の磁業を研究し、大に發明する所あり。爾來支店の設置、製品の改良等に見るべきの成績を擧げたり。殊に此の社は、明治五年電機用碍子を創製してより以來其の需要日に高まり、其の名大に世に著はる。

然るに、其の後香蘭社中、議論一致せず、十三年に至りて、深海墨之助、辻勝藏の兩人は分離して、別に精磁社を設け、專ら西洋の日用品を製造せり。間もなく深海墨之助、深川榮左衞門の二人病死してより、社運更に振はず、十三四年頃に七十餘萬圓の輸出ありしものが、二十四年頃には二十五萬圓に減額し

たり。茲に於て、有田人士の覺醒を促し、二十八年には町費を以て、有田徒弟學校を設けて、職工の養成に力を竭し、工人亦改良發展の意に孜々として怠らず、今日は亦大に見るべきものあるに至れり。

有田窯土石に關する制度

有田窯土石に關する制度

有田の泉山は、滿山磁器に適應せる各種の良土及び釉料の土石より成るを以て、有田窯の職工は、此の天惠の材料を尊重することを忘れ、習性となりて、自ら之を粗略にするの傾あり、且つ各自其の難きに就くを欲せざるを以て、先を爭ふて我が窯の近きにあるものを採取し、大塊の運搬に便なるものに就き、粉碎の良土は更に顧みず、雨浸し、日乾かして終に製磁の用に供すべからざるもの、堆積山を爲すに至り、之が運搬の妨を爲すに至らば、溝壑に擲棄し、或は移て他所に之を求むる有樣なりき。鍋島侯之を憂ひ、かくては折角の國產遂に廢頽を來すに至らんと、曾て關門を設けて檢吏を置き、采土の制限を立てたり。之が爲に、一時陶工の不便は免れざりしも、據て以て此の良土を保有することを得て、以て明治維新に及べり。然るに維新廢藩後、此の制度全く廢せられ、彼れ取り、我れ穿つの自由行動は忽ちに現出し、廢土の多き、更に前年より甚しきに及べり。豈遺憾の業ならずや。

有田窯の上好品

五艘船深鉢

ヒガキ井

有田窯上好品と落款

有田窯の大成は、前記東島德左衞門、酒井田柿右衞門等の二手に成れる錦樣、金襴樣にあり。隨て有田窯の上好品は金銀五彩畫にあるなり。彼の五艘船深鉢の如き、ヒガキ井の如き、皆此の種に屬するものなり。而して有田窯の製品には、刻印は無く、皆支那の記號に倣ひて、萬曆年製、嘉靖年製、成化年製、奇玉寶鼎之珍富貴長春等、藍釉を以て落款せるを常とし、中には無銘のものもあり、就中萬曆銘のものに上品多し。

五艘船深鉢は約八寸の平形井にて、幕府への獻上品なり。享保の頃、和蘭軍艦の始めて長崎に碇泊せし際、其の奇形異狀世人の注目を惹き、遠近來觀者多かりしを以て、此の地の陶工之を寫し、鉢の內方に二艘、見込に一艘、外面に二艘の軍艦を描き、更に內方雙間には蘭人軍裝の體を、外面には唐模樣を加へて、金彩美麗を極めたるものなり。

ヒガキ井は諸侯の好みによりて畫きたるものにて、內外同模樣にて、三方に九の內人物、大模樣あり、その餘は角つなぎ金入彩畫なり。見込は藍にして龍又は鳳凰の金畫なり。

此の外直立一尺以上の平鉢にて、內外及び香臺の內まで、總體に枝菊を浮

出模様とし、精巧潔白、金入五彩釉を施し、美麗を極むるものあり、或は公卿へ献上のものなりといふ。また、外面鮮麗なる萌黄窯にして、細密金唐草の書結め、見込藍地に金模様あるものも上品なり。

二　有田の分窯

有田の附近にある一の瀬窯、廣瀬窯、南河原窯、鷹房窯、外尾窯、黒牟田窯の六窯は、皆有田の分窯にして、土を泉山に採り、陶製は本窯に同じ。

此の六窯の中、最も著はれたるものを南河原窯とし、此の窯の酒井田柿右衛門の金襴様、夙に世に聞ゆ。南河原は西松浦郡曲川村にありて、窯の起原は、邈として明かならずと雖、酒井田の設立に係る呉須焼の窯は、鍋島侯朝鮮凱旋の時以前に於て、既に南河原にありしことは事實なり。鍋島侯の携へ歸れる高麗陶工百五十人は、半數を名護屋の地に置き、半數を領内多久に置きしも、多久の地窯業に適せざるものあり、工人の多くは、酒井田の窯に來り投せり。酒井田之を容れて業務を擴張し、孜々業に勵めり。

降て元和元年、酒井田柿右衛門の代に於て、筑前承天寺住職某の南河原に來遊するに會し、其の紹介によりて、豊公の臣高原五郎七を聘し、南京焼の傳を

南河原窯

酒井田柿右衛門

白手燒

柿右衛門錦樣を發明す

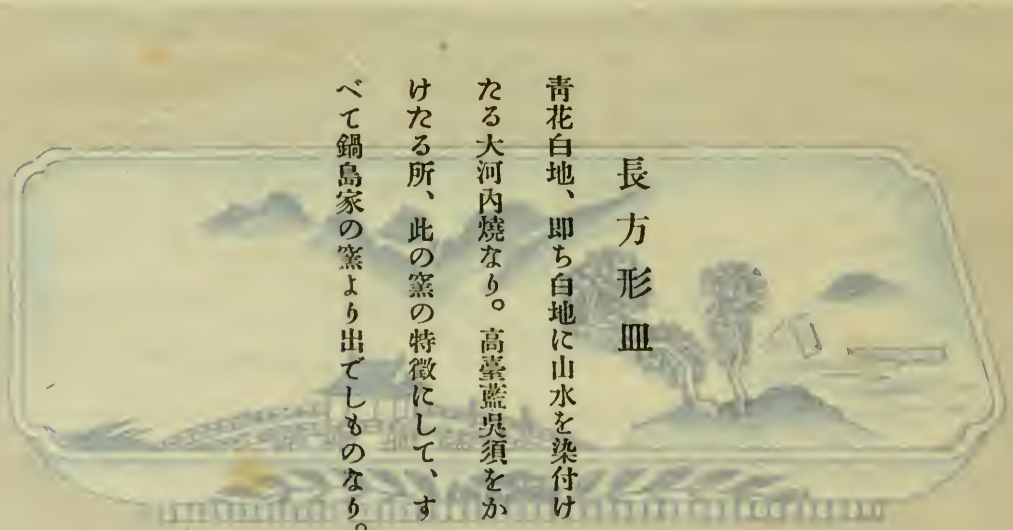
第二世柿右衛門

受け明礬を含める磁器の堅牢なるものを製出す。所謂白手燒の權輿なり。柿右衛門の在來陶器が、質脆弱、破損し易きを見て、堅牢の磁器に改めんと志すや久し、今之を己が手によりて製出す、其の得意想ふべきなり。

正保三年支那人某長崎にあり、柿右衛門就て其の陶技を學ぶ、某赤繪付の術を教ふるも、金銀燒付即ち錦樣の秘法を傳ふるを欲せず、柿右衛門大に怒つて曰く、咄汝の拙技を習ふを須ひんや、と即ち去て苦心慘憺、遂に錦樣の製法を發明す、古伊萬里と稱するもの、即ち是れなり。此の頃、有田の東島德左衛門金襴樣の製法を試みて成らず、柿右衛門其の稟議に與りて、遂に其の大成を告げたること、前既に述べたるが如し。

斯の如く、酒井田柿右衛門は、肥前諸窯中にありて、一異彩を放ち、所謂伊萬里燒をして、天下に重きを爲さしむるに至りたる、大に與りて力ありしなり爾來柿右衛門の子孫、其の名を襲用すること十二世、今工澁之助は、其の第十三世として柿右衛門の名を稱せり。

第二世柿右衛門、亦其の業に精しく、其の作品は遠く支那人、蘭人に珍愛せられ、幕府、諸侯の需用亦枚擧に遑あらず。貞享二年には、佐賀藩主の御用窯となるに至れり。而して、柿右衛門家の作品は、多く柿右衛門製の印を押用し



長方形皿

青花白地、即ち白地に山水を染付けたる大河内焼なり。高臺藍鬼須をかけたる所、此の窯の特徴にして、すべて鍋島家の窯より出でしものなり。

白手焼

柿右衛門赤繪を發明す

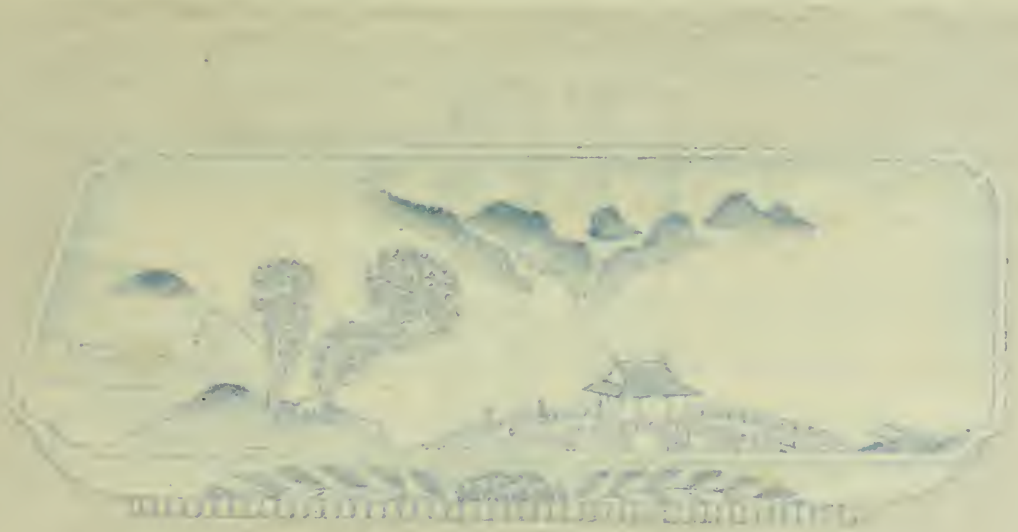
第二世柿右衛門

受け明礬を含める磁器の堅牢なるものを製出す。所謂白手焼の種類なるもの。柿右衛門の在來陶器が、質脆弱、破損し易きを見て、堅牢の磁器に改めんと志すや久し、今之を己か手によりて製出す、其の得意想ふべきなり。

正保三年支那人某長崎にあり、柿右衛門就て其の陶技を學ぶ、某赤繪付の法を教ふるも、金襴焼法即ち赤繪を傳ふるを欲せず、柿右衛門大に怒って曰く、唯汝の鄙技を習ふを須ゐん、即ち去て苦心惨憺、遂に錦窯の製法を發明す、古伊萬里と稱するもの即ち是れなり。此の頃、有田の東島徳右衛門金襴種の製法を試みて成らず、柿右衛門其の原理に與りて、遂に其の大成を告げたること、前既に述べたるが如し。

斯の如く、酒井田柿右衛門は斯界中にありて、一異彩を放ち、所謂伊萬里焼をして、天下に重きをなさしむるに至りたる。大に與りて功ありしなり。爾來柿右衛門の子孫、其の名を襲踏すること十二世、今工藝之助は、其の第十三世として柿右衛門の名を襲せり。

第二世柿右衛門、亦其の業に精しく、其の作品は遠く支那人、蘭人に珍愛せられ、幕府、諸侯の需用亦枚擧に遑あらず。貞享二年には、鍋島藩主の御用焼となるに至れり。而して、柿右衛門窯の作品は、多く、鍋島藩門窯の名を押用し

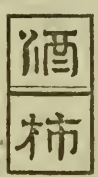


初代二代柿右衛門製品

三世柿右衛門

世の賞讃を受くること、古今を通じて渝らざるなり。宜なる哉、明治十八年東京上野共進會に於て、農商務卿第一世柿右衛門の功を追賞して、金盃一合圓を賜はりしことや、酒井田家此の金を以て、其の紀念碑を窯場の傍に建つ。

柿右衛門の初代は、明暦より天和の間に奮勵して、其の基礎を作り、二世は天和以後、元祿に亘りて盛に精製し、正徳年間に及びしものなるべく、此の初代、二代の磁質は、大河内燒に似て、有田窯の燒締の如く、緻密にして特色あり、殊に最上呉須色の濃淡判明、金銀彩釉の美麗、圖案精巧にして絶妙なる所金入彩釉銀入の名器類、唐花密畫、龍竹花梅櫻金獸雲波水等の畫、品位善き香爐、花器、皿、鉢の諸器などは、幕府への献上、又は諸侯よりの需めに依て作られたるものにして、孰れも世に貴重せらるゝもの。又金銀を加へざる彩釉器稀に藍呉須にて柿右衛門の銘を加へたるものは、最も世の珍愛を受く、三世は正徳以來、一種純白なる磁器を製し、多く綠紅釉を施し、品位高尚なり。三世以後七世までは、品位劣りて、世に貴ばれず。八世の品は、甕山燒の如き磁質にして、藍呉須畫



花草花模様なり。磁質堅硬なれども巧は劣れり。今工澁之助は專ら錦付のみを營業とせり、之を要するに、有田燒をして重きを多く、器底に酒柿と記し、多くは唐

陶業界に爲さしめたるは、柿右衞門一族の功なり。

鍋島侯の官窯

色鍋島

櫛手

三　大河內窯

大河內は有田の北三里、伊萬里の南方に位せる一邑にして、此の地の窯は、舊有田に隣れる岩屋川の地にありしが、享保年間藩主鍋島侯、その地旅客來往の衝に當り、技巧の秘し難きを憂ひ、命じて大河內に移さしめ、之を官窯に改め、藩主日用の器具、及び幕府進貢の陶器以外には、之を製造することを禁じ之に從事する陶工は、總て之を其の藩籍に屬せしめて、精良の器を作るに、意を注がしめたり。されば、此の窯に於ては、皿、鉢、井等五彩の鮮麗絶妙にして、香臺脇藍吳須を以て二重七寶繋ぎ、外面唐草七寶密畫のものなど、上好の品多く產出し、また總赤地にて、金襴唐草畫結めのもの、白にて除模樣及び透し付異形彩釉の香爐など、所謂色鍋島に屬する珍貴品多く出でたり。此等の上好品は、幕府に獻上するか、鍋島家の愛用に供するか、その一に居りて、決して他に販賣せられざりしも、時として、幕府又は他藩主よりの需めにより、費用を厭はず製せしことあり。此等の場合には、其の香臺に櫛紋を付して、官窯の製なることを證せり。世に之を櫛手といふ。所謂鍋島磁器は即ち是れなり。

大河內窯より出せるものは、總て斯の如く官製に係り、他に販路を禁じたる品なれば、民間の之を珍愛すること甚しく、偶々之を得んか、離すべからざる逸品として貴重せられ、後世に至りても、其の價頗る高し。

此の窯にては、又支那の七官青磁に擬したる青磁をも造り。碎紋ある釉潤のところ、大に世に愛玩せられたり。維新後藩窯の制廢せらるゝと共に、業甚だ振はず、良工に乏しく、復當年の精品を出すに至らざるは、誠に遺憾とする所なり。

四　嬉野燒

肥前藤津郡嬉野温泉の附近には、志田窯、吉田窯、小田志窯の三窯あり。小田志は隣郡杵島郡西川登村に屬す。此等三窯の創始は、之を詳にする能はざれども、承應より萬治に至る間に、三五年を隔てゝ、相前後して開かれしものなるべく、當時陶器を出せしことは、古老の傳ふる所、古製器の土中より採出せらるゝこと、また、嬉野燒の銘印ある茶器、酒器など存するによりて知らるゝなり。其後享保年間に至るまで、凡そ二百年の間、盛衰ありしとはいへ、製陶の業連綿として絶えざりしが、此の間に又小田志の弓野山、その他に磁土を發

南京燒

見し、磁器を出せり。此の磁器は支那人の傳へたるものにて、世に南京燒の名あり。此の時代、淵孫左衛門、其の子七右衛門は陶工として名高く、陶質諸器及び屋瓦を製せり。次で溝口市兵衛、高町藤兵衛等磁器を製せんとするに方り燒窯は從來の陶窯を襲用したるも、製法に熟練を缺く所ありて、精巧のものを得るに至らざりき。然るに、文化元年鍋島侯の保護を得て、小田志に磁器窯を築き、陶器と併せ製出し、較々成績を擧げたりしも、久しからずして衰微し、後藤津郡下宿村の西田市兵衛、巨財を投じて、製造を奬勵し、一時旺んとなれり。後西田の家衰ふるに及んで、又々磁業衰頽し、幾變遷の後、文政の末年樋口親治、盛んに復興の議を唱へ、新窯を增築して、鋭意改良の道を講ずるに及んで、小田志磁器の面目大に新まる。親治は鍋島家御用燒の命を蒙り、聲價亦高まり、販路擴張したり。次で維新變革の後も、焚燒の簡便、需用の關係、販路の研究等に意を加へ、勉めて價格の低廉に意を注げるを以て、質は下等たるを免れずと雖、產額は依然として減ずるに至らざるなり。

此等諸窯に用ふる磁土は、其の近傍及び天草諸島に之を仰ぎて、調和を加へ志田は專ら盞を作り、小田志、吉田は食碗を造るなり。

五　松ケ谷窯

松ケ谷窯は、鍋島侯分家の所領なりし時、享保年間命じて開かしめたるものにて、有田等より陶工を招き、其の藩士と倶に其の業を興せしものなり。造る所の磁器は、殊に精良高尚なりしが、惜い哉、僅々五十年を經過せずして廢絕したり。故に製品の今日現存するもの極めて稀に、偶ま之を見るに過ぎず。その質大河内磁器に類し、白磁無彩の茶器なり。また青磁も少しは出せしといふ

六　白石窯

白石窯も亦その原始を詳にせず。安政年間、京都の陶工走波なるもの、こゝに來りてより、大に勢力を加へ、終に輸出品を出すに至れり。製品は京都の永樂の如く、釉面裂紋の白磁にして、彩畫描金の見ごとなるものなり。而して、其の裂紋青磁は、大河内のそれに比して、黒色を帶ぶるに似たり。近傍及び天草の土を調和して之を作り、工人業を傳へて今日に至る。

七　三河内窯

巨關

平戸窯

平戸燒

唐子
支那の小兒なり

三河内窯は、肥前東彼杵郡折尾瀬村三河内に在る窯にして、今は長崎縣の管内なり。此の窯の起原は、慶長中朝鮮陶工巨關なるもの、肥前平戸城下に來り藩主松浦侯の藩籍に歸化し、今村姓を許され、陶窯を開きたるに始まる。當時平戸窯と稱し、黑燒の陶器を製造したりしが、巨關の孫、今村如猿に至りて、東彼杵郡江上村三ッ岳に上等の土を發見してより、白燒陶器を作り、三河内村に窯を移し、三河内燒と稱へらるゝに至れり。如猿の作は、龜甲紋の劈紋ありて、青華あり、白地のものあり、白地に少しく黃色を帶びたるもありて、五郎七燒（後に詳なり）に似たる所あり、今日鑑別に苦しむ。

明曆年間、此の地の工人有田の巧を傳へて、青華磁器に彩畫を附着し、支那萬曆製の如き畫樣に倣へるものを出し、世の賞讃を受け、業を傳ふるもの漸く多し。次で、寶曆年間平戸の城主、松浦侯更に命じて窯を築き、幕府に獻進する所の器を製せしむ。世に之を平戸燒と稱す。然れども、これ平戸城下にて製する所のものにあらず、平戸侯の特別窯なるに因るなり。此の製品中に、青華を以て松樹下に唐子嬉遊の狀を畫けるものは、特に貴重して、私に販賣することを禁じ、之を幕府の獻進、及び松浦侯贈答用にのみ供したり。就中唐兒七人を描けるものを最上等とし、五人或は三人を描けるものを、其の次位となす。

其の他磁面を透彫にして、筆を以て彩を施し、透彫の際を塞ぎ、其の上に細紋理を畫けるものあり、また奇品となす。此等の諸品は、固と賣品にあらざりしだけ、世人の珍愛すること甚しく、且つ今日此の種のものを出さゝるを以て、價極めて貴し。

寶暦以後、文化、文政の頃に至りて、三河内焼は更に一段の進歩を告げ、瑩潤透明、薄紙の如き潔白なる小磁器を製するに至れり。之を造るに、近時の新器械石膏型の當時在りたるにもあらず、双手と蹴車とにのみ依頼して、能く之を製したるを思はゝ、真の技巧の優れたる驚くべきものあり。近時之に金彩を施し、盛に海外に輸出せらる。

三河内窯の原土は、天草、五島等に之を取れるが、泉山の土質に比すれば、柔軟なるを覺ゆ。

八　甕山窯

甕山窯は、長崎市の背後、垣根山といふ所にありし窯にて、文化元年同市八幡町の大神甚五郎の創立に係ると稱せらるれども、たしかならず、始めは專ら水瓶を製造せしが、文化十一年、有田の磁法を倣ひ、天草の土を用ひて、支那

南京風の華美精巧なる青磁を模造せり。天保年間に至りて、支那蘇州の土を用ひて、酒器、小茶注の類を作る。土質粗にして鼠色、吳須の磁器に似て、黯色の青華書を着す。一時は文士墨客の間に持囃されたりしが、漸く衰微に傾き、今は全く廢絶せり。

九　含珠燒

杵島郡西川登村小田志窯の樋口治實が、明治二十年專賣特許を得て、世に發賣せしものにて、明治十八九年頃の創製に係るものなり。樋口は父祖の代より製磁器の業に從事するものなるが、治實に至り、明治十二三年の頃、陶磁器の碎片中に、偶々透明色のものあるを發見し、之が爲め陶磁器中には、必ず燦然たる透明の紋章を顯はす方法あるべきことを發明し、爾來苦心慘憺、一時は家産を蕩盡して、沈淪の極に陷りしが、明治十九年之を實地に施し、好果を奏することを得たり。二十年專賣特許を得、翌年憲法發布の紀念と共に、菊桐御紋章を透明に顯はしたる湯呑を製し、之を宮內省に獻上したるに、同省の御用品を命せられしと同時に、大に世の稱讃を博せり。茲に於て漸く目的を達し、含珠燒と命名せり。其の後、內國博覽會は固より、米國シカゴ大博覽會等にも出

品し、到る所特別名譽の金牌を受けたり。

含珠燒は薄地の陶磁器に、花鳥風月の模樣を透明に顯出したるものにて、品質は堅牢純白、優美高尚なり。されば、貴重なる美術品として歡迎せられ、東京、京阪、長崎地方を重もなる販路とし、遠く英、米、支那の諸國に輸出し、頗る好評あり。

其他の肥前磁器

前段述ぶる所の唐津燒、伊萬里燒以外に、肥前國内陶磁を産する所多し。藤津郡の鹽田町、久間村、杵島郡の橘村、三養基郡の北茂安村などの窯場最も著はる。何れも有田窯に倣ひて、金襴樣の磁器を製するものなるが、近年は火鉢水指、電話器、電機碍子、便器の實用品を産出することに力を注ぎ、朝鮮、歐米に輸出する品亦寡からず。日露戰爭後は、需用一層增加し、業務活氣を帶べり。

八代燒の起原
尊楷
上野喜藏

肥後

八代燒

一　八代燒の起原

八代燒は、今を距る三百年前、寛永九年八代町の近傍高田の鄉にて製する所のものなり。初め慶長三年加藤清正、朝鮮より凱旋の時、釜山浦の城主尊益の子、尊楷を伴ひ歸る。尊楷日本に歸化し、唐津に滯在中、一たび本國に歸り、高麗の陶法を傳へ來て、製陶に從事す。當事唯點茶の茶壺、及び茶碗を作りしが、質緻密にして、釉色青、黃、黑の流れ藥ありて、薩摩の帖佐燒の如く、又古高取燒の如し。

關ヶ原役後、加藤氏滅びて、慶長七年細川忠興、豐前入國に際し、尊楷を召して俸祿を與へ、上野鄉にて陶器を造らしむ。即ち鄉名を取て家名とし、上野喜藏と稱す。當時小堀遠州亦喜藏に命じて茶器を作らしむ。寛永九年忠興の子忠利肥後遷封の時、喜藏其の長男及び三男を伴ひて八代に來住せること、豐前上野燒の條に述ぶる所の如し。八代に來りてよりは、高田鄉の下豐原に於て、

八代焼の特徴
肥後薩摩

上野喜蔵
忠兵衛

才兵衛

一種の磁器を造り、二子は兩家に分れ、正徳の頃よりは又三家となり、各俸祿を受けて、家業に勵む。當時の磁器は、肉薄く上品に、其の色淡灰にして、白土の細孔ありて、紋理を爲し、薩摩陶に傚ひ、精巧妍美なり。世に肥後薩摩とて、數寄者の間に珍愛せらるゝものは、多く喜蔵八代に歸りて後、二代、三代の間に作られたるものにして、釉色に潤澤薄く、蛇裂の白釉あるものをいふ。蓋し、肥後にて薩摩燒を寫したりとの意なり。

二　八代燒の傳統

上野の喜蔵を初代とし、喜蔵の後、二代は長男忠兵衛にして、父と共に大白の陶質を發明し、又藩主に隨行して江戸に出で、和漢の陶器目利、樂燒の手練を營み、八代にては精勵陶磁の業に親しみ、名品を出せる事尠からず、晩年實蓋と改む。製品には忠兵衛の銘を記したるもの多し。三代忠兵衛、亦和漢陶器目利、樂燒手練に任じたること二代に異らず、後一風と改む。四代忠兵衛、五代忠蔵、六代忠兵衛を經て、七代才兵衛に至る。才兵衛後に洲三と改

め、名器を出せり。

今工二分造は其の八代にして、技を七代洲三に學び、内外の博覽會又は共進會に出品して、進歩賞牌を受け、名聲更に衰へずといふ。

印は楕圓二重丸に才の一字を記せるものを用ふ

小代燒

肥後玉名郡南關町の附近、南賀、手永、宮尾の諸邑にある陶窯をいふ。此の地小代山の麓なればなり。其の創始は詳かならず、或は曰ふ、加藤清正朝鮮歸陣の時携へ歸れる高麗の工人二名を小代山麓に置きしものと、續いて、細川氏豐前より移封して、肥後に入りし時、北小路又左衛門、葛城安左衛門の兩人、其跡を慕ひて、肥後に來住したるより、南賀、手永の内、各一町五段歩宛の地所を給し、名字帶刀を許して、陶業に從はしめ、薪材は官林の立木を給し、作品は細川家の茶室に納めしめたりといふ。後業を紹ぐもの多く、現今南關町の野田又七盛んに其の業を營めり。

小代山は元小代某の城址にして、北小路等の住せし所は、龍の原なるが故に一に龍の原燒ともいひ、野田の代に至て、南關町の堀池園に移してより、ま

た松風燒の名あり。

網田燒

肥後宇土郡網田村に出づる陶器をいふ。寛政三年細川侯有田の陶師を聘し網田の地に陶窯を開き、傳習の業を卒へたるものには扶持米を給し、奬勵保護を加ふ。漸くにして技に熟するもの多く、細川家の用度を充すのみならず、幕府献上の品をも製造し得るに至れり。元來網田燒は彩畫の鮮麗よりも、耐久方の點に力を注ぎたるを以て、聲名世に洽からざりしと雖、實用向としては好個のものなりし。廢藩後藩の保護廢れ、各工自費の下に經營し、一時頓挫を呈したりしも、此の實用向といふ點に於て、大に世の賞讃を受け、產額は年々增加の傾向を有せり。

其他の肥後燒

其の他肥後には陶器を產する所多し。葦北郡日奈久村に村田英晤等の窯あり。玖磨郡一勝地には右田忠吾、同大村には青田久米藏等の窯あり。天草島木戶馬場には岡部彌四郎の窯あり。就中一勝地の窯は最も古く、明和九年の創業に係

り、茶碗、雜器を出せり。粗製なれども、朴質にして臭氣に感染せざるを愛するもの多し。

大村の青田久米藏は、十五六歳の頃、陶工末平なるものに業を學び、師の死去と共に、一時中止したりが、初志を遂げざるの遺憾なるを思ひ、文久三年より、幼時學びし手續を追考し、漸次研究を重ねて、漸く精巧のものを得。其の白砂を用ひたる所、最も世に賞美せらる。

木戸馬場の岡部彌四郎は、四代の祖彌四郎の傳を承け、世々陶業に從事し、品質優雅のものを出せり。

日向

日向には瓦器は一二之を製する所あるも、陶器は曾て産出することなかりき明治以後に至て、延岡、都濃等に磁器を出せることありしも、遂に盛なるに至らずして已めり。延岡産のものには、皿、鉢などの雑器あり、一見八代の如く土堅く、青鼠の釉に鐵砂等の花草を描き、延岡の銘を付したるものあれど、誰の作たるやを明にせず。

延岡燒

都濃の窯

兒湯郡都濃町の鹽月米治は、明治九年東京麹町區内山下町なる博物館内陶窯試驗場に入り、製陶の業を學びたりしが、同場の閉鎖さるゝに及んで、牛込區新小川町鹽田眞の陶場に入り、其の工人となり、明治十六年六月まで、製陶の業に從ひ、翌七月鄉里に歸り、陶場を開きたるも、良好の成績を擧ぐるに至らざりき。

帖佐燒

大隅

大隅には薩摩燒の分派たる帖佐燒あり、一時は頗る盛なるものなりし。帖佐の窯は中途鹿兒島に移されたりしも、今日猶姶良郡加治木村には、陶磁を業とするものあり。

帖佐燒

慶長年間、島津侯の朝鮮より携へ歸れる陶工の中、良工を選びて、大隅姶良郡帖佐に移し、茲に窯を開きて、專ら茶器を造らしめたるに始まる。世に之を帖佐燒と稱し、茶家の間に賞讃せられたり。質極めて緻密にして、青黃黑を兼ねたる釉を施し、其の中に蛇褐と唱ふる白色の凝釉の斑々たるものあり。最も良品とせらる。

龍門司燒

寬永年間帖佐の窯は鹿兒島に移され、一時大に衰微したりしが、工人の業を

龍門司　大隅姶良郡加治木村にあり、帖佐と相隣る

鮫肌焼

川原源助

傳ふるもの、相尋で生じ、芳仲その他の名工によりて、龍門司坂の麓に窯を築き、帖佐風の焼物及び流釉の陶器を造る。世に之を龍門司焼といふ。芳中は薩摩焼古今を通じて、巧手と稱せらるゝもの、肥前の石焼を皆傳して、こゝに窯を築き、又京都その他の陶場を視察して、鮫肌焼を發明し、幾多の名品を出し、一旦寂れたりし帖佐の地をして、更に陶名隆々たらしめたる名工なり。作品にはこゝに載せたる如き、各種の銘を記せり。

其後の大隅陶器

大隅姶良郡加治木村は、今日猶陶工を産するの地、昔の帖佐焼、龍門司焼は、皆この地より出でたるものなり。龍門司焼は芳中を祖とし、其の五代目までは業大に繁榮したりしが、後漸く衰へ、廢藩後自費を以て、損益の衝に立つに及んで、一層沈衰に傾けり。今日加治木の陶業者たる川原源助は芳中九世の孫として、祖先の業を繼げるものなるが、此の悲運に遭遇し、慨歎久しきの餘、奮然として之が挽回の念を起し、外國人の趣向を研究し、外國輸出品を造るの急

務なるを感じ、明治十四年同業者に謀る所あり、然るに同業者之を賛せず。會ま京都清水の陶工青木宗兵衛此の地に遊び、川原に會して、薩摩燒の衰微せる粗製濫造の結果なり、之が改良を爲す、先づ生地を精選し、外人の趣向を究めて、輸出品を作るの急にあるを說く。川原大に之を喜び、青木と力を併せて、外國輸出向製品に全力を注ぎ、更に人を神戸、大阪に派して販路の擴張に努め漸く世の注意を惹き、同業者亦顧みる所あるに至れり。同地の川原林太郎、同十左衛門は同じく芳中の子孫にして、各分家に屬するもの、皆祖先の業を繼ぎ精勵今に至る。又青木宗兵衛は、曾て大島に渡航して、窯を開き、陶磁を造りて、島民に廉賣し、大に好評を博したり。

薩摩

大隅、薩摩の兩國は、島津侯の所領にして、薩摩燒は島津侯の保護奬勵の下に創始し、發達したるもの、而して其の窯を或は薩摩より大隅に移し、大隅より薩摩に復する等、交互錯綜せること多く、世俗此の兩州の陶窯を概括して、薩摩燒と稱せり。本書兩國に章を分ちて、說明を加ふれども、亦互に複雜せる所なきにあらず、讀者之を諒とせよ。

薩摩燒

薩摩燒は鹿兒島市及び日置郡下伊集院村苗代川に產するものを主とし、其の他にも之を產し、苗代川口の窯を以て最大とす。

一　古薩摩燒

薩摩燒の起原は、九州各國の諸窯と一般、慶長中豐臣秀吉の朝鮮征伐後にあり。即ち藩主島津義弘彼の地より凱旋に際して、高麗の陶工十七人を携へ歸り

て、之を鹿兒島の高麗町に居らしめ、茲に窯を築きて、茶器類を製せしめたるに始まる。十七人皆單姓にして、仲氏、李氏、朴氏、卞氏、姜氏、陳氏、鄭氏車氏、林氏、白氏、朱氏、崔氏、沈氏、盧氏、金氏、何氏、丁氏といふ。始め日置郡の苗代川口に上陸し、こゝに移されたるものにて、爾後容姿、服制、頭髮の如き舊俗を存し、各家互に相嫁娶し、我が國語を習ふと雖、尚ほ韓音を傳へ、苗代川口に一部落をなして、人口一千五百の多きに達すれども、習俗自ら他と趣を異にし、專ら陶磁の業に從ふ。明治四年後は、日本國民と同一の權利を享有し、義務を負擔することとなれり。

苗代川の習俗

二重墨

此の創始の時に於て、右十七姓の中より良工を選び、大隅帖佐に移し、其所に窯を設けて、茶器を作らしめたること、大隅の章に述ぶる所の如し。而して此の時代に造られたる薩摩燒は、質緻密にして、火中に於て細密なる劈痕顯出し、その最上品に至ては、二度窯入を行ひたるものにて、墨の下に又微墨あり之を二重墨といふ。頗る世の珍愛する所の品なり。時としては、香爐、香合等に青黃赤釉及び銀を以て、靈雲龍鳳室桐唐の如き模樣あるものあり。品位高尚にして、雅致に富む。又水注、花瓶等には、金青黃綠赤釉を以て、唐草書結たる華麗のものあり。此等は公家、幕府等への獻上品にて、古薩摩中最も珍重せ

蓮葉式茶碗

薩摩の帖佐窯より出でし白釉蓮葉式茶碗にして、世に御判手と稱する二百五十年前のものなり。

藩主島津侯の携え歸れる朝鮮陶工十七姓中の一人、朴興用苗代川の白土を得て、製出せるものは、品格優等、貫乳細密、頗る上乘のものなり。

苗代川の窯場

二番窯

て、之を鹿兒島の高麗町に居らしめ、茲に窯を築きて、茶器類を製せしめたるに始まる。十七人皆韓姓にして、伸氏、李氏、朴氏、卞氏、姜氏、陳氏、鄭氏、車氏、林氏、白氏、朱氏、崔氏、沈氏、盧氏、金氏、何氏、丁氏といふ。始め日置郡の苗代川口に上陸し、こゝに移されたるものにて、爾後容姿、服制、頭髮の如き舊俗を存し、各家互に相嫁娶し、我が國語を習ふと雖、尚は韓音を傳へ、苗代川口に一部落をなして、人口一千五百の多きに達すれども、舊俗自ら他と趣を異にし、專ら窯業の業に従ふ。明治四年後は、日本國民と同一の權利を享有し、義務を負擔することとなれり。

此の創始の時に於て、右十七姓の中より良工を選び大隅帖佐に移し、其所に窯を設けて、茶器を作らしめたること、大隅の竪野に遊ぶる所の如し。而して此の時代に造られたるものは、質密にして、細密なる罅疵現出し、その最上品に至ては、二度窯入を行ひたるものにて、罅の下に又微罅あり之を二重罅といふ。頗る世の珍愛する所の品なり。時としては、香爐、香合等に青黄赤綠及び銀を以て、靈雲龍鳳室桐唐の如き模様あるものあり。品位高尚にして、雅致に富む。又水注、花瓶等には、金青黄綠赤釉を以て、唐草書結たる華麗のものあり。此等は公家、幕府等への獻上品にて、古薩摩中最も珍重せ

らるゝものなり。

二　御判手

寛永年間、窯を帖佐より再び薩摩の苗野に移し、更に田野浦に移せり。是れ操業上の便利に基けるなり。當時十七姓の一人、朴與用なるものあり、最も妙手として、同族の間に重んぜらる。白土を所々に檢出し、苗代川のものを最も適したりとなし、こゝに窯を開きて、白色の良器を製す。後工人多くこゝに移り、良工と稱するもの、是れより漸次輩出す。當時白磁に類する純白透明の器朝鮮模造の刷毛目、三島手、及び寸古祿を製出し、爾來其の巧益進歩す。刷毛目、三島手のことは、前既に述ぶる所のもの、寸古祿は外邦の名、其の地より出す陶器なり。

御判手

朴與用

寸古祿

朴與用白土探檢の苦心

朴與用の白土探檢に就ては、非常の苦心を經たるものにて、島津侯の命を蒙り、案内者に導かれて、領内谷地を巡察し、川邊郡加世田鄉小湊村の白砂、同鄉貫津村京の峰の上藥石、揖宿郡十二町村内山の白土、同郡成川村の白土、内鄉高野のばら白土などを携へ歸りて、義弘公の上覽に供し、苗代川口の白土を以て、最も秀逸、他も亦多く單純なる旨を報告す。公之を稱美し、苗代川に陶

御手窯
星山加入
錦様

Hashirogawa

窯を建築し、陶器を製せしむ。果して名器を得たり。之を公の上覽に供したるに、稱讃措かず、朝鮮熊川に髣髴せるものなり、と屢々陶場に臨み、意に適したる製品には、親ら印を捺されたり。故に當時の作品は、世に御判手の稱あり而して、當時の土質は極めて、單純にして、穴より掘出したるまゝ、槌を以て擲碎して製造したるものなれども、品格優等、貫乳細密、今日は到底かゝる土質を得る能はずといふ。されば、薩摩燒は全く朴與用の傳播に基すといふも誣言にあらざるべく、之れと同時に堅野窯も亦、藩主の意を用ひて、發達に力を與へたるものにて、同じく御手窯の稱あり。朴は苗代川の山を總管し、朴の分家星山加入は、堅野を支配し、兩々相對して、明治維新前までは、その盛大を維持し、維新後急に趣を異にせり。星山の二代目を中二といふ、是亦良工なり。

三　錦様　白薩摩

寛政年間、藩主島津齋宣工人に命じて、白磁に金襴の絲紋を着せしむ。名けて錦様といひ、世人の賞翫すること、諸國の磁器に超えたり。此の時に當り、大隅帖佐の陶窯は既に廢絶したれども、同國龍門司に於て、帖佐風の磁器を再

興せること、大隅の章下に述ぶる所の如し。而して、此の錦様は全く島津家の用品となすに止まり、民間に賣買することを禁せられたるを以て、世人は益々之を珍愛し、會ま轉々して市場に出づる事あらんか、法外の呼價を有す。斯る有様なるを以て、朴の分家星山白磁の器を民間に賣り下げられんことを願ふに至りしも、遂に許されず、たゞ染付のみを許され、染付及び黄青畫の物、或は眞白の器に窯印の如き染付あるものを、世に出すに至れり。之を白薩摩といふ

四　平佐燒

鹿兒島鹽屋の地に、川田平佐なるものあり、同地の本田源之助と共に窯を開き、磁器を製す。甚だ妙手なりしを以て、國主より竪野に召し還されたるも、間もなく廢絶す。其の作品は、乾山の京窯に於ける白磁の如し。

五　薩摩燒の特徴

薩摩の陶工は、朝鮮より歸化せる人々によりて、其の基礎を作り、前にも述べたる如く、明治四年までは、異人種の如き境遇にあり、習慣、風俗亦故國のそれを墨守せるを以て、陶窯の如きも韓傳のまゝを襲用したり。而して前諸項

作品の特徴

に擧げたる陶磁を造るには、前低く、末高き長窯を用ひ、長さ百五十尺より二百尺、高さ五尺許、左右所々に丸穴を穿ち、器物を窯内に列ね、前口より火を點じ、又各所の丸穴より薪を投ずるを以て、或は中途にして破損するものあり或は灰を附著し、或は窯中火力の過不足ありて、殆ど一律の下に其の成績を擧ぐる能はず。而して、今日猶は其の製を現存する、亦薩摩燒の一特徴とすべし

次に其の作品に於ける特徴を擧れば、緻密の碎裂紋を釉上に現出するは、薩摩燒の凡てに通有する特徴なり。金青黃綠赤の五彩を釉藥に施したる、即ち所謂錦樣なるものは、古薩摩以後の薩摩燒に於ける特徴なり、蛇褐と稱する白色の凝釉は、亦薩摩燒に通有する特徴にて、釉の中にて白く泡立ちて、光るやうに見ゆ。蓋し少しにても必ず蛇褐のかゝるは、薩摩燒の揑なり。尤も甫十の如き名品に、蛇褐藥のなきものもあれども、個は例外とすべし。また、錦樣に金筋箔押しにて燒けるものあり。此等は地藥白く、少し閙みありて藥の底に砂ある如く見え、手障りさら〳〵とするもあれど、通有の特徴にはあらず。

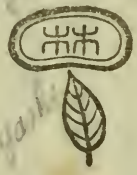
六　其他の名工と銘印

以上各所に擧げたる陶工は、何れも薩摩燒の名工なるが、此の以外、世に知

姜早丹　芳壽　芳光　玉峯　林氏

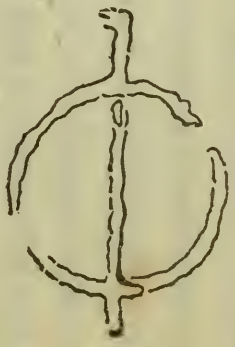
られたる陶工多し。今其の重もなるものを列舉すれば

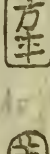
姜早丹は弘仁年間の名工にして、極めて近代のものなれども、作品に賞すべきもの多く、芳壽は天明、寛政頃の良工として聞え、文政の頃には芳平あり、萬延年間には芳光あり。白薩摩の名工には玉峯あり。

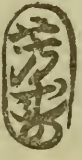


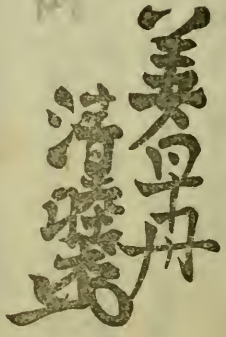
玉峯製

林氏あり。林氏の銘は藍呉須に木葉を認むるを常とせり。上作にはあらざれども、其の數の多きを以て知られたるものにて、下に載せたる印を附せるものあり、北方の薩摩にて出せるものにて、元祿の末年より寶永に掛けて、作られたる品なり。多くは茶入にして、長崎を經て諸方に賣り出されたるものなり。









七　近代の薩摩燒

維新後藩の保護は廢せられ、各窯自己の經濟の下に經營せざる可らざるに至りて、薩摩燒は頓に沈衰し、一時は殆ど廢絶に傾きしが、外國輸出の道開けて漸く回復し、今は鹿兒島市を始め、薩摩郡平佐村の白和、日置郡伊集院村の苗代川、其の他に幾多の陶場を見るに至れり。然れども規模の大なる工場とてはなく、鹿兒島市慶田政太郎の男女工十九人を使役するを首位とし、十人以上の職工を使用するもの三戶、轆轤器械を用ふるもの、苗代川の沈壽官一人あるのみ。他は皆規模極めて小なる家內工業の舊套を墨守するに過ぎず。今少しく近代の薩摩燒の盛衰に就て記する所あらんとす。

沈壽官

十七姓の一族なり。廢藩置縣に際し、薩摩燒一山の規律弛廢し、人心隨つて瓦解せるを見て、これ島津家累代の祿を食めるものゝ座視すべき秋にあらず亦侯の創業の趣旨にも反するを以て、飽くまで之を再興し、之を昔日の盛時に回へさゝる可らずとなし、日夜苦心を重ね、同族と協議を凝らし、明治六年苗代川村の藤屋に窯場を建設し、獨力經營の業を創む。其の製法は白土數

味を調和し、粉末となして水干を遂げ、上薬は加世田郷の白土を粉末とし、之に灰を和して掛け、茶器類、花瓶などは旋盤に頼り、置物の類は手つくねに頼り、各種の作品を出せり。當時外國貿易の道漸く開け、東京、横濱の商人薩摩焼の生地を購入し、之に繪付を行ひて、外人の嗜好に投せんことを競ひたりしが、幾もなく外人の厭悪を招き、薩摩焼の聲價日を逐ふて墜落したり。沈壽官之を見て慨いて曰く、陶業に三難事あり、曰く土の調合、曰く釉薬の厚薄、曰く火度是れなり。而して火度最も難し。古來の薩摩陶器は、生地金色共に品位を具へ、今日のそれとは雲泥の差あり、彼の横濱、東京方面に於て行ふ錦様の、書風巧妙なるにも拘らず、品位之に副はざる所以のものは、往古の陶器は土質單純に、品位高尚、貫乳密緻、隨て金色年を經て益々燦爛たるに反し、今日の陶土には單純なる純白土なく、品位甚だ下れるを以て、彩書金箔を施す場合の火度に、最も熟練を要し、注意の周到を要するに拘らず、單に繪具を以て下繪を着け、金箔を薄く之に塗るに止まり、極めて器械的に流るゝが故に、一見美麗の如くなるも、年を經るに從て、金色褪散し、品位劣惡となればなり。若し此の儘に放任せんか、古來光輝あり、歴史に富める薩摩焼をして、全く廢滅に歸せしむるに至るや必せり。壽官自ら之

が挽回の衝に當らんと、先づ單純なる土質を求めて、生地の良品を出すを以て急なりとし、百方苦心を重ね、古老に向ひ、舊記を捜りて、漸く純白土を得て、數回の試驗を行ひ、稍古器に髣髴たる生地を産出することを得。是より薩摩燒の聲價日に恢復し、以て能く今日の盛況を見るに至らしめたり。

國分八郎

國分八郎

父友雪に書を學び、明治の初年田の浦陶器會社に入りて、陶書の業に從ひ、同會社の倒るゝに及んで、長崎に出で、英人サートンと結び、薩摩燒販賣の業を開きたりしが、會ま西南の亂あり、各地に流轉の身となり、十四年父の急病を耳にして歸縣し、十五年東京汐留電信局御用陶器製造方を命ぜられ、幾多の失敗を重ね、苦心慘憺の末、外國舶來品に劣らざる電機碍子、電機用具を製することを得て、陸軍電信隊、印刷局等へも納むることゝなりたり。然れども、同人の志す所は薩摩燒の完成にあり、白薩摩の如き、外人の賞讃措かざる所、朝鮮傳來の古陶、亦聲價隆々たるに拘らず、西南役後粗製濫造に流れ、東京、横濱方面に於ける繪付によりて、一層其の聲價を失したるを慨し、薩摩燒の本色は、繪畫にあらず、畫を少くして生地の光澤、貫乳を第一とし、品格を第二とし、繪畫を第三とするにあり、古來の薩摩燒は、最も

西南の亂

此の點に力を注ぎ、作品には費用を吝まず、意に滿たざるものは、之を破壞し、若くは海中に投じて、作物の百中僅々七八個を選取したる程なり。然るに、今日の陶器は、其の良惡を論せず、悉く之を市場に出し、而かも根本の生地に意を注がず、第三の繪畫にのみ力を注ぎ、且つ器の全面に繪を施して人をして薩摩の本色は繪畫にあり、と思はしむるに至る、其の本末を顚倒ㇱるまた甚しといふべし。此の見地の下に、同人鹿兒島市長田町に陶場を設け銳意薩摩燒頽勢の挽回と、其の聲價を揚ぐるに力を致し、見るべきの作品亦尠からず。

慶田政太郎　隈元金六　東鄉壽勝

此の三人は亦現今薩摩燒製造者の主もなるものなり。而して慶田、隈元の兩人は鹿兒島市、東鄉は伊集院村にありて、各其の重きを爲し、慶田最も大仕掛に經營せること、前既に述ぶる所の如し。慶田は父茂平の時、明治二十五年を以て田野浦に一工場を設け、專ら錦樣の外國貿易品を製造せしが、一時粗雜に流れしを以て、今工政太郎大に意を加へ、改良を施し、其の作品には、多く下記の銘を附せり。

然れども今日の薩摩燒は、製造戸數僅に十七戸、職工百六十餘人、年產額五

六萬圓に止まり、半は內地の需用に供し、外國向のものは、花瓶を主とし、多く橫濱仲買商の手を經て、外商に賣り込まるゝもの、每年二萬圓內外なり此の如く、薩摩燒の今日振はざる所以のものは、內地用品としては、土質脆弱なるの故を以て、普通の飮食器に適せず、外國向としては、曾て聲價を墜したる痕跡、未だ全く除去さるゝに至らざるのみならず、價格の低廉なるの點よりすれば、京都の粟田燒に壓倒さるゝ所あり、古來の特色たりし薩摩燒の長技は多く作品に見ること能はず、偶々これなきにあらざるも、價の極めて不廉なる所あるなど、幾多の故障之に伴へるが爲めなり。近年外人の嗜好に投ずべき畫模樣の意匠を研究して、販路を擴めんとするの議起り、美術學校に畫樣標本の蒐集方を依囑し、製品の改良に力を盡しつゝあれば、或は大に面目を一新して、舊時の盛に復することあらんか。

對馬

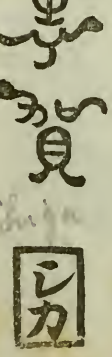
對馬は朝鮮の地と、一葦帶水の所、從て高麗燒の輸入も多く、之に模したる陶器も、早くより開け、遠州時代には、有名なる陶工もありき。されど、記錄に遺れるもの少し。

對州燒

對州燒は元龜年間より始まる。朝鮮燒の井戸堅手御本、刷毛目などに似たる名品多く、點茶家にて用ひし茶碗、水指を始めとし、酒德利、井、鉢、皿などの雜器を出せり、遠州時代には茂三、玄悅、小道二、小道三、彌平太、太平、德本といふ七名工を出し、茂三は主として朝鮮を模し、玄悅は朝鮮と呂宋とを寫し、小道三、小道二は安南、舟山を主とし、彌平太は熊川、咸鏡道の風を模し、太平、德本は何れを主としやを詳にせず。而して、上藥は何れも朝鮮に能く似て、土少しく粗く、藥の光澤薄し。對州燒の一派に志賀燒あり。

志賀燒

文化年間、對馬下縣郡嚴原町の志賀の里にて燒き始めしものにて、同地の吉田又市の創業に係る。土と釉とは同地より取り主として點茶器を製したり。其の陶膚は朝鮮の瓷器に似て、刷毛目、三島手などあり。又磁器は白土白釉の上に青華を施せるもの多く、青、黃、黑の釉は少し。何れも志賀の二字を印す。或は青華にて志賀の二字を記せるものもあり。一種の雅致に富み、茶人の間に賞翫せらる。その地の工人業を傳へて今に至る。



補遺

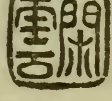
以上を以て、本邦各州の陶磁に關する概略の記事を了へたるが、此の外、何れの窯場より産したるやを明にせざるもの甚だ多し。今一々之を列擧するは、其の煩に堪えざるを以て、其の三四を例示するに止めん

一　肥後燒と思はるゝ香爐に、源の一字を印せるものあり。古雅頗る愛すべし。

源印

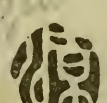
二　閑雲の二字を印せる急須に、筑前ものらしきがあり。

閑雲



三　善の一字を刻せる小皿は、銘印としては、出雲燒に似たれども、陶質の更に異れるものあり。

善印



四　純然たる瀬戸燒なれども、其の陶工を明にせざるものあり。茶入にもあれど、多くは雜器に之を見る。陽貴、義、清、樂イ、範古などの印あり。

瀬戸類似品

五　京燒と思はるゝ節あれど、果して何人の作なるやを明にせざるものに、素燒皿に「うに」の印あるもの、急須に閑〇（一字不明）、德利に「寶」の一字を刻せるもの

京燒類似品

などあり。

六　龜形の香合に、瓢簞印を刻し、その中に「九峯」と銘せるもの、九谷燒ならんと思はるゝ節あれど、果して然るや否やを明にせず。

七　丹波燒と稱せらるゝ酒壜に、山古と銘せるもの、また急須に「萬歲」と印せるものに、却て京燒と思はるゝものあり。

八　その他獅子の置物に「衣川」の印あるもの、茶碗に「沽春堂」、「靜壽」の銘あるもの茶入に「南海」の印あるもの、茶碗に「三函燒」と印せるもの等數へ來らば、殆ど際限なし。

朝鮮

朝鮮は今は我が帝國の一版圖に屬し、文化極めて幼稚にして、產業振はず、陶磁の業亦廢頽して、見る影もなけれども、四五百年の昔にありては、陶磁の業尤も盛んにして、我が國の陶業は、範を彼の地に取りたるもの多く、豊太閤の朝鮮征伐は、政治上の見地よりすれば、寧ろ失敗に歸し、何等得る所なかりしと雖、我が陶磁の業に顧みれば、直接間接に、此の戰役によりて收めたる效果は、頗る甚大なりしなり。薩摩燒の起りたるも、肥前諸陶場の發達したるも一に此の役の賜なり。肥後の八代燒、豊前の上野燒、筑前の高取燒、長門の萩燒等の萠芽を露はしたる亦然りとなす。其の他算へ來らば、全國陶磁の業は、朝鮮のそれに負ふ所、決して尠からざるなり。

朝鮮征伐の効果

されば、我が陶磁業の跡を調べんとするには、決して朝鮮の陶磁を逸する能はざるなり。然るに、朝鮮の陶磁に關しては、古器物の我れに舶來して現存せるものに就き、僅に其の名稱的區別を便るの外、何等據るべきの史籍を存せざるは、誠に遺憾の次第なり。依て、こゝには其の名稱をたどりて、其の大略を

伊羅保の種類

元の手
頬冠手

内秃

述べんとす。

伊羅保

伊羅保は朝鮮の地名にて、赤伊羅保、黄伊羅保、渡伊羅保などの稱あり。渡伊羅保は朝鮮伊羅保ともいふ。また古伊羅保、本伊羅保、伊奈伊羅保、三島伊羅保などの目もあり。その他各種の名あり。

一　古伊羅保

古伊羅保は形大ふりにて、井戸に似たり。内部に刷毛目あり、薬茶色に底赤みあるを上作とす。高臺は入高臺もあれば、桶底なるもあり、何れも轆轤目多くして、刷毛目なく、地味ぬめらず。古伊羅保の中にて、高臺大きく、茶碗一面に刷毛目あるを元の手といふ。珍品なり。頬冠手といふは、茶薬にて、片身かはり多し。

二　本伊羅保

本伊羅保はサラメキ井戸の上作を基として焼けるものにて、底は上底にて内

内禿

ぺゝラ口
内切廻し

渡り伊羅保

禿もあり。外薬は黒色の無地にて、内部は刷毛目あるもあり。三島伊羅保は本伊羅保の一種にて、形種々あり、内に模様あるが多く、高臺いやしく、薬色赤きが多し。また絲目の如くなる三島もあり、いろ〳〵とあらきめなるものなり

三　伊奈伊羅保

焼は堅く、色は黒く、形は開きたるが多く、高臺の作り總じて下作なり。一種ぬけ形といふがあり、香臺は同類にて、薄手なれども、形賤しく値安し。

四　黄伊羅保

伊羅保の一種にて、黄薬のかゝれるものをいふ。形一定せず。ぺゝラ口とて口造りの所指にて外へ押したる様なるもあり、内切り廻しとて、内部より口造りの邊切り廻したるもあり、その他様々の形あり。土は至つて輕く、高臺は巴状を普通とすれども、大きなるは巴なし。

五　其他の伊羅保

其の他、渡り伊羅保は、朝鮮いらぼともいひ、刷毛目あるもあり。釘彫伊羅

保は、高臺内の巴へ釘にて彫りたる跡形あり。塚堀伊羅保は、古墳などより掘り取りたるものにて、極めて古きものなり。ぬめり伊羅保はぬめり藥内よりかゝり、又外にもかゝれる朝鮮堅手の藥にて、土は重く、内部刷毛目あるが多し。

三島

三島の種類

極めて古きものにて、茶碗を主とし、その表に三島暦を見る如くに、竪に細き繪あるより、一に暦手ともいふ。これにも亦古三島、花三島、彫三島、骨三島、伊奈三島、判事三島、黒三島、角三島などの別あり、何れも四百年前のものなり。

一　古三島

形狀種々あれども、概して淺く、時として深きもあれど、極めて稀なり。藥はぬかりなく、薄柿色にて、その上に白藥にて、三島暦の如く模樣色あり、底には菊がた又は文字もあり、上作は薄手にて、高臺の作り尋常なり。或は曰ふ器の内外、高臺までも暦の如く細かく模樣あるを上とすと、地藥は鼠淺黄のやうなるもありて、少し茶溜りあるは良し。高臺は竹の節の如く、外より切廻し

たるを常とす。

古三島には刷毛目のあるもあり、又花模樣ありて、花三島と稱するもあり。何れも至つて古きものなり。

かいらき所器の腰部、高臺付の取卷をいふ

文杉人の字の如き形を連れたる模樣をいふ。刀の中心などには多く此の模樣あり

二　花三島

花三島とは、松、竹、梅など花模樣を紋にあらはしたるをいふ。地藥は茶色がゝりたる鼠色にして、內部に目あるもあり、惡きもあり。かいらき所に篦目の如く少し指にて押したる跡見ゆ。土ホットリとしてぬりめ藥厚くかゝれり。亦世の珍賞する所なり。

三　彫三島

讀んで字の如く、器に模樣、繪などを彫り付けたるものにて、文杉などの彫を內外に施したるもあれば、內部のみの彫もあり。形は種々ありて一定せざれども、彫深くして、しつかりと荒く彫れるを上物とす。またかいらき所模樣なくして、白藥刷毛目の如くかゝれるも良し。高臺は總じて手強く、その彫はきり〳〵と細筋あり、腰留りの輪は至つて幽かに、かせの出來は至て赤し。彫三

島は一に檜垣三島ともいふ。

四　骨三島

淺黄薬にて、外部に白き三島刷毛目交りにあり、形ち異風にして、作り高臺いやしく、割高臺なるが多し。割高臺は朝鮮陶の特色なり。

五　伊奈三島

形狀種々あり。古三島の如く見ゆるものゝ外は、茶色、黒色の無地にて、自然に刷毛目あり。高臺は總じていやしく、土は赤色なるが多く、内刷毛目の如くなるを良しとす。

六　其他の三島

其の他判事三島といふは、判事茶碗のうち暦手のものをいひ、黒三島は黒暦のかゝりたる暦手なり。角三島は茶碗の紋にて知るなり。

判事

判事茶碗とは、高麗より判事官の齎し來れるより起れる名にて、一に判司に作る。此の判事官のことに就ては、少しく説明するの要あり。

判事は朝鮮の官名にて、豐太閤時代に使節として來朝したることあり。その時高麗時代の茶碗を土産物として進獻したりといふ。判事の來朝は其の後に於ても行はれ、明曆元年十月信使三員、上々官二員、讀説官一員、判事官三員、上官二十九員、次官十一員、中官百六十五員、下官二百七十四員、合四百八十八員、その他長老達、長老柏、長老通詞、諸役者共二百四十員、都合七百二十八人來朝して、江戸淺草なる大願寺に止宿したること史に見えたり。

惟ふに、最初判事の輸致したる品なるより、其の名稱起りたるにて、各種の品ありしなるべく、一定の分類にはあらざるなり。されば刷毛目もあり、三島もあり、端反り形もあり、こもかへ形もあるなり。

一　遊擊判事

作りは大方にて厚作りなり。高臺淺く、時代も若く見ゆ。藥種々あり、藥留りの所錐の如く藥かゝらせて、唐津のやうに見ゆ。遊擊判事は秀吉の朝鮮征伐の時朝鮮の遊擊將軍持渡りたるもの、との説もあれど如何にや。

ゾモ〳〵

二　紅葉判事

陶磁にゾモ〳〵といふ語あり。下圖に示す如き斑點をゾモといふ。ゾモ〳〵とはかゝる斑點の多くあるをいふ。判事には此ゾモ〳〵多きを良としたらる。紅葉判事は赤き火がはりあるより起れる名にして、また桃判事ともいふ。ゾモ〳〵多くあり、高臺は竹の節もなく常體なり。土は一體に細かく、かいらき藥かゝれり。

三　眞判事

一體に厚作りにて、土は細かく、端反はなく、刷毛目のやうに浮き上りたる筋あり。土色はボットリと見え、柿に赤みあるを良しとせらる。形は圓き方なれども、圓滿なるは無く、ひづみ有るは多し。藥は赤み青みあるを良しとす。高臺にも藥かゝれるが多し。

四　其他の判事

其の他御本手判事、杉形判事、茂三判事、常の朝鮮判事など種々あり。御本。

御本手判事
杉形判事
茂三判事
常の朝鮮判事

五器に關する諸說

手判事は、厚作りにて、いびつなるが多く、土は細かく、切高臺なるが多し。杉形判事は、青み薬を普通とし、薄作りにて品よき茶碗なり。茂三判事は、ぬめり堅く出來、内部は少し刷毛目筋あり、一體に下作なり。常の朝鮮判事は、厚作もあり、薄作もあれど、端反にはあらず。

五器

五器は本來五種ある故に名づくとの説あれど、如何にや。五器は又呉器、御器とも書く。古へ神前へチヤワン形の器に入れて供へたる故に、御器といふなりとの説もあり、呉器にも亦種々あり。

一　紅葉五器

判事に類するものなれども、質は別なり。薬は赤み多きより紅葉五器の名あり。高臺異風に出來て、恰好深く、自然篦目あり。薬ぬめらず、柿の火替り又は青かはりあり、總じて上作の方なり。

二　大徳寺五器

夕日山

一に夕日山ともいふ。形は圓きが多く、高臺は普通大きく、小さきは稀なり。藥は上出來にて、高臺の中にかゝれるもあり。唐人大德寺を旅館とせし時、持ち來りしものなるより、此の名ありといふ。

三　尼五器

切吳器

藥青みありて厚作なり。色は枇杷色もあれば、うす白藥もあり。タルキ出來にて、堅手の藥に同く見ゆ。火間あり。光澤も少からず。見込みには二ケ所に渦あり。御本に似て堅く出來たり。器の形は圓く、高臺は淺し。

四　錐五器

一に切吳器に作る。作り薄手にて、內底の一際窪く見ゆる所に小筋あり。一見素燒の如く見ゆるも、柿色藥薄くかゝれるなり。形は異風なるが多く、四角形のものもあり、恰好極めて惡し。或說には內底のめぐりに小筋あり、又內の底に巴狀の筋ありともあり。

五　楷形五器

椀形五器は、端反のあるもあり、なきもあれど、いづれも貫乳ありて、一際良きものなり。

六　其他の五器

其の他、五器には番匠五器、繪五器、常の五器、判事五器、堅手五器、高麗五器などいろ〳〵あり。

番匠五器は、厚作りにて、あめ薬の如き薬かゝり、高臺は賤しく、繪五器は繪あるが故に、其の名あり。常の五器は、薄作りにて、枇杷色薬かゝり、中には赤みある上好のものあり。背擢は八重になれゝ如く、折曲げたる取手あり。一種の風趣を帶ぶ。判事五器は、判事の五器形に出來たるものにて、少し赤みあり、ぬめらず堅出來なり。高臺は總じて小さく、自然に篦目あり、作りは薄手にて大ぶりなるが多く、此の種の中に餠子とて、茶碗の外に、茶薬にて丸き圖あるがあり。偶には青の薬かはりもあり。高麗五器は、朝鮮堅手の五器形に出來たるものにて、小筋とぬめりとあり。赤みのあるは良く、その他は凡て卑し。堅手五器は所謂堅手なり。

番匠五器
繪五器
常の五器
背擢　器の縁邊をいふ
判事五器
餠子
高麗五器
堅手五器

雲鶴

地紋に雲鶴の繪を描き、その上に藥をかけたるものにて、高麗燒物としては上好のものなり。之にも亦各種の名目あり。

一　狂言袴

狂言袴は盞し雲鶴の元祖なり。筒形又は碁笥形にて、藥は淺黃鼠色多く、その上に白藥にて菊の如き丸紋二つ三つあり。上下に横筋あり。作りは厚手にて高臺は小さく、狂言括袴の紋に似たり。括袴とは裾を紐にて貫き、くゝるやうにしたる袴をいふ。

二　古雲鶴

薄作りにて、藥の色は砧手青磁の如く、薄萌黃又は淺黃なり。紋は雲鶴、菊唐草など種々あり。形は淺く、高臺まで藥かゝれるが多し。又上紋のなきもあれば、蓮花の如く、シノギ彫の入りたるもあり。或は繪を描き、上に藥をかけたるもあり。地は青く白く、雲と鶴とあり、本は海鼠腹皿なりしが、後の雲鶴

は、薬淺黄茶色にて、紋は白しといふ。

この雲鶴は茶碗に限らず、水指、花生、鉢、陶裏、香爐、筆筒、猪口、猪口臺などの雜器もあり。

刷毛目

器の内外に、或は内のみに、又は外のみに刷毛にて掃きたるやうに筋あるより名づけたるものにて、古刷毛目、筋刷毛目の別あり。

一　古刷毛目

繪高麗の類作にて、粉引の如く、下薬あるが如く、上は白薬刷毛目の如くかゝり、地薬には赤みあるが多し。刷毛目内外に多きを上品とす。底内に赤みあり、薬留りの轆轤目あり、高臺の作り大方なるを特徴とすべし。焼きし後柔かにしみの出るは稀なり。

二　筋刷毛目

外は薬青く、コゲありて土現はれ、内は筋多きより此の名あり。形イビツな

るが如く、地薬茶色にて、内外共に薄く刷毛目あるを良しとすれど、概して下作なり。高臺は作り大方なり。

粉引（こなひき）

高麗ものゝ中にて、古刷毛目に類し、鼠色の薬に白き所交りて、古刷毛目の刷毛目なきものゝ如し。背擢切廻しなく、中形にて、胴より下は厚作りなり。高臺は總じて低く、内外共に轆轤目あり、徳利などに多く之を見る。

井戸

井戸は朝鮮の地名にて、渡り古き陶器なり。或説に筒井順慶の家來若狭なるもの、秘蔵の茶碗を陣中に携へ、荒木攝津守岩佐又平の父と合戦の折、君に望まれて、傍の井戸の中に入れ置きしを、後に取出したるより、此の名ありとの説あれど、眞にあらず。出來は五百餘年前にて、細かなる柿の貫乳あり。又貫乳のなきもあり。高臺は竹の節外より切廻したり。色は青みに少し黒みかゝれるを青井戸○○○といふ。多少しみはあれども、裏表へは通らず。形は朝顔形もあれば、編笠形もあり、その他鹽筒形、筒形など種々ありて一定せず。深きを大井

戸といひ、淺きを小井戸といふ。井戸には鹽桶といふがあり。元來蓋ありし壺を、蓋がゝりを能く去りて、茶碗としたるものにて、一種の味あり。井戸は總じて藥十分にかゝり、高臺内までも及べるを常とす。

井戸に類するものに井戸脇、蕎麥井戸、雜亂面井戸あり。就中雜亂面を上物とす。

一　井戸脇

井戸脇は本井戸よりは品若く、後渡りのものなり。唐津にて井戸に似せて寫しゝものをいふ、との説あれども如何にや。枇杷色に出來て、厚作りなり。かいらぎはなく、青みあるもあり、赤みあるもあり。

二　蕎麥井戸

一に蕎麥糟といふ。井戸の一種にて、手厚ものなり。土に白砂交りて、色は蕎麥色を爲せるより此の名あり。高臺は一體に低く、竹の節にて内にクル〳〵と筋多くあり。かいらぎの下に輪あり、その下に目ありて、赤みあるを上作とす。また高臺に土を見せぬを良しとし、水藥あるも亦佳なり。蕎麥糟はその糟

の多きは下作とし、少きを上品とす。

金海

朝鮮金海といふ所にて焼きしものなり。刷毛目もあり、形は四角を普通とし高臺には大小ありて、金海との二文字彫付けあり。大なるは割高臺にて槍垣あり。これ金海の特徴にして、目利の秘事なり、と鑑定便覧に載す。薬の色は淺黄に赤み交りにて、大方一色に堅きものなり。外方に篦目にて「いばらかき」の如き筋あり。土は總じて細かし。

熊川

熊川は朝鮮に近き所の産なりといふ。高麗焼の一に列せられ、古來茶人の間に珍愛せらる。形は種々あれども、上作は薄手にて高臺小さし。高臺は多く端反にて、内に薬溜りはあれど、一體に薬はかゝらぬなり。土色は大かた白く、薬は鼠薄淺黄にて、白き貫乳あり。薬の高くかゝりたるを咸鏡道といひ、作りいやしく、薬溜り多きを鬼熊川といひ、高臺の内に薬かゝりたるを後熊川といひ、薬ぬめりあるを滑熊川といふ。

槍垣　所々に薬の明間あるをいふ

咸鏡道
鬼熊川
後熊川
滑熊川

御本手

御本手は朝鮮判事窯にて、判事茶碗の次のものなり。利休、織部の兩人公方より御本を受け、物好を加へて高麗へ誂へ遣はされしを、本の如くにして本朝へ渡りたるものなり、と鑑定便覽にあり。種類は茶碗、鉢、皿、香爐、その他種々あり。兩人御本手以來、漸次各種の御本手出づ。

一　御所丸

御本手の一にて、織部形なり。横かすりありて、或は彫物もあり、形種々に分る。或説には、公儀の御船御所丸といふを、高麗へ遣はされたりし時持歸りし茶碗なり。その節手本を遣はされ、その通りに出來たるを御藏堅手といふ。作り篦目澤山ありて、異風多く、厚作なり、高臺は六角又は四角なるが多く、藥は淺黄にて、堅き燒なりと。

二　玄悦御本手

形は種々ありて、御室茶碗の如く、その内篦目あるが多し。藥の出來は判事

に同じく、遠州好みといふ。高臺轆轤引にて、御本燒と見ゆる節あり。

三　茂三御本手

近代の渡りにて、古三島、刷毛目、金海、態川、雲鶴、繪高麗、判事などの古き類を手本として、自然を添へて燒き成したるものなり。古風に珍らしき類多けれども、また不出來のものも少からず。總じて薄作にて、高臺小さし。或は曰ふ、黒船時代にて、出來は若く、少しいきみあり、高臺引きつけたるを圓座高臺といふと。

四　其他の御本手

その他、喜齋御本手とて、呑口の薄きもあり、道三御本手とて、藥内へ貫乳入りの多きあり。道二御本手とて燒しほぬめり多く、異風の丸形なるあり。白手御本、砂御本、御本の立鶴など種々あり。

繪高麗

繪高麗は一に繪小島ともいふ。古刷毛目、粉引の如き作にて、作り淺く、藥

は玉子色にて、二重藥の如し。地藥は一體に青く、いろ〳〵の紋あるより此の名あり。上藥は黒と柿とにて彩色し、内外にかゝはらず、刷毛目の中に、唐草模樣あり。燒はやはらかにて、刷毛目のうちににじみあり。

割高臺

井戸作りにて、時代五百餘年前のもの、堅手ものにて、釜師の高臺の如く見ゆる底の目多分にあり。藥の出來はいろ〳〵にて、その内薄淺黄底赤みあるは良しとす。寛永手鑑に曰ふ、もとは筆すゝぎにしたるものにて、代金五百枚なり。天下に七つ八つならではなし。筆すゝぎの故に、手を摺り落して茶碗としたる跡あり。口は一文字に切りたるものにて、飯櫃形なりと。

日本陶磁年表

第一卷「日本陶磁の由來」の章にて、本邦陶磁の沿革を略説したれば、こゝに年表を添ふるは、多少蛇足の感なしと雖、亦陶磁業の年代を一目の下に見るは、我が陶磁史を考究する上に於て、小補なしとせざるなり。

然れども、我が陶磁の業は、各窯互に秘して他に示さず、其の技を一家の秘傳としたると同時に、事業功程の記錄を世に遺さゞるを常としたれば、得て詳細を錄する能はず、曾ま史籍に載れるものも、往々にして正確に遠ざかれるものあり。且つ余の淺學なる、到底その完璧を期し得ざるを遺憾とす。されど、之によりてその大略を了得するに庶幾からんか。

紀元年數	天皇	陶磁重要事項	社會の狀態	西曆
紀元前		陶器の一種土器既に在り 出雲多藝志の小濱にて黑眞迦を造る 豐玉彦の女水を汲むに玉椀を用ふ		
七九	神武	東征の時平瓮八十、手抉八十、瓮若干を造らしめて神器を祭る伊豆間是れなり 和泉大鳥郡の地に陶器を作るものあり	神武天皇即位し帝國鴻業の基礎成る	自元年 至七九年

至八〇 至一一一	三三	綏靖			
自一一二 至一五〇	三九	安寧			
自一五一 至一八五	三五	懿德			
自一八六 至二六八	八三	孝昭			
自二六九 至三七〇	一〇二	孝安			
自三七一 至四四六	七六	孝靈			
自四四七 至五〇二	五六	孝元			
自五〇三 至五六三	六一	開化			
自五六四 至六三一	六八	崇神		人民を校べ調役を課す	
自六三二 至七三〇	九九	垂仁	天日槍歸化し其從者近江鏡谷に陶器を作る 野見宿禰埴輪を作る 土師職を置き野見宿禰其長官となる	天照大神を伊勢に遷す 殉死を禁す	自紀元前 至七〇
自七三一 至七九〇	六〇	景行		熊襲叛す 日本武尊東征す	自七一 至一三〇
自七九一 至八五一	六一	成務			自一三一 至一九一
自八五二 至九二九	七八	仲哀 神功	三韓の土器多く渡來す 陶業漸く進歩し土器の内面波紋あるものあり	三韓を征す	自一九二 至二六九
自九三〇 至九七二	四三	應神		百濟の王仁來朝す	自二七〇 至三一二
自九七三 至一〇五九	八七	仁德			自三一三 至三九九

紀元	年數	天皇	陶磁重要事項	社會の狀態	西暦
自一〇〇六〇至一〇〇六五	六	履仲			自四〇〇〇至四〇〇五
自一〇〇六六至一〇〇七一	六	反正			自四〇〇六至四一一
自一〇七二至一一一二	四一	允恭			自四一二至四五二
自一一一三至一一一五	三	安康			自四五三至四五五
自一一一六至一一三八	二三	雄略	百濟の陶工高貴を召す。百濟の陶法漸く我が國に傳播す 土師阿笥等に詔して供御の陶器を作らしむ 山城俯見の工人陶の清器を進貢す	朝鮮の騷亂交々激し 豐受大神を伊勢に遷す	自四五六至四七八
自一一三九至一一四四	六	清寧			自四七九至四八四
自一一四五至一一四七	三	顯宗	天皇一日宴を開き瓜を肴とし盛るに皿を以てす此時既に皿あり		自四八五至四八七
自一一四八至一一五七	一〇	仁賢		使を高麗に遣して工匠を求む	自四八八至四九七
自一一五八至一一六六	九	武烈		百濟入貢す	自四九八至五〇六
自一一六七至一一九〇	二四	繼體			自五〇七至五三〇
自一一九一至一一九四	四	安閑			自五三一至五三四
自一一九五至一一九八	四	宣化			自五三五至五三八
自一一九九至一二三一	三三	欽明		百濟佛像經典を献す	自五三九至五七一
自一二三二至一二四四	一三	敏達			自五七二至五八四

自一一四五 至一二四六	二	用明	百濟瓦博士を献す。本邦瓦を造り屋根を葺くこと始まる	
自一二四七 至一二五一	五	崇峻		
自一二五二 至一二八八	三七	推古	厩戸皇太子憲法十七條を立つ 支那隋との交通始まる 高麗朝貢す	
自一二八九 至一三〇一	一三	舒明	新に法を制し百官を置く	
自一三〇二 至一三〇四	三	孝極		
自一三〇五 至一三一四	大化元—五 白雉元—五	孝徳	窯陶司を置き大膳職に屬せしめて陶工を管せしむ	
自一三一五 至一三二〇	一六	齊明	肥前唐津に高麗製陶の法始まる	
自一三二一 至一三三〇	一〇	天智		新羅を伐つ 冠位二十六階を制す
自一三三一 至一三三二	一	弘文		
自一三三二 至一三四五	一四	天武		高麗新羅の歸化人を諸國に置く
自一三四六 至一三五六	朱鳥一—〇	持統		律令を頒ち度量を制す 使を南島に遣して國を覓めしむ
自一三五七 至一三六六	大寶元—三 慶雲元—四	文武	窯陶司の職制を定め製陶工人の戸を定む 僧行基行基燒を發明す	
自一三六七 至一三七四	和銅一—七	元明	國中陶業盛んに工人釉藥ある陶器を造る	古事記成る 都を平城に移す
自一三七五 至一三八三	靈龜一—二 養老一—七	元正		日本紀成る
自一三八四 至一四〇八	神龜一—五 天平一—一〇	聖武		佛教盛んなり

自五八五 至五八六		
自五八七 至五九一		
自五九二 至六二八		
自六二九 至六四一		
自六四二 至六四四		
自六四五 至六五四		
自六五五 至六六〇		
自六六一 至六七〇		
六七一		
自六七二 至六八五		
自六八六 至六九六		
自六九七 至七〇六		
自七〇七 至七一四		
自七一五 至七二三		
自七二四 至七四八		

紀元	年數	天皇	陶磁重要事項	社會の狀態	西曆
自一四〇九至一四一七	天平感寶 天平勝寶	孝謙		遣唐使を任す	自七四九至七五七
自一四一八至一四二三	天平寶字二—七	淳仁	伊賀丸柱燒の創起あり（天平寶字中）		至七五八至七六三
自一四二四至一四二九	天平神護 神護景雲	稱德		僧道鏡跋扈す	自七六四至七六九
自一四三〇至一四四〇	寶龜元—二	光仁		陸奥亂る	自七七〇至七八〇
自一四四一至一四六五	天應一 延曆元—四	桓武	佛具の陶器を支那の青瓷に仰ぐ 支那人陶器を鬻すこと多し 工人之に倣ふて釉藥ある陶業發達す 洛北鷹ケ峯に窯を築き碧瓦を作る	平安京に遷都す	自七八一至八〇五
自一四六六至一四六八	大同元—三	平城	筥陶司を大膳職に合併す		自八〇六至八〇八
自一四六九至一四八二	大同四 弘仁元—三	嵯峨	尾張陶工に瓷器を傳習せしむ（弘仁六年）	空海高野山を開く	自八〇九至八二二
自一四八三至一四九二	弘仁一四 天長元—九	淳和			自八二三至八三二
自一四九三至一五〇九	天長一〇 承和元—一四 嘉祥元—二	仁明		令義解を施行す 日本後紀成る	自八三三至八四九
自一五一〇至一五一七	嘉祥三 仁壽元—三 齊衡元—三 天安元	文德		飽淸流行す	自八五〇至八五七
自一五一八至一五三五	天安二 貞觀元—七	淸和			自八五八至八七五
自一五三六至一五四三	貞觀一八 元慶元—七	陽成			自八七六至八八三

自一五四四 至一五四六	元慶—八	光孝				自八八三 至八八六	
自一五四七 至一五五六	仁和二—四 寛平元—八	宇多			諸國陶器の産出多し陶器調貢の制を定め大和、河内、攝津、和泉、近江、美濃、播磨、備前、讃岐、筑前の十國を陶器調貢國と爲す	自八八七 至八八九六	巨勢金岡聖賢障子を描く
自一五五七 至一五八九	寛平—九 昌泰元—三 延喜元—三 延長元—七	醍醐				自八九七 至九二九	延喜格を頒つ
自一五九〇 至一六〇五	延長八 承平元—七 天慶元—八	朱雀			諸國の陶工多く業に就かず陶業衰ふ朝貢の陶器他物を以て代納するに至る	自九三〇 至九四五	平將門藤原純友反す東西交通の便を缺く
自一六〇六 至一六二六	天慶—九 天暦元—一〇 天徳元—四 應和元—三 康保元—三	村上				自九四六 至九六六	
自一六二七 至一六二八	康保四 安和元	冷泉				自九六七 至九六八	
自一六二九 至一六四三	安和二 天禄元—三 天延元—三 貞元元—二 天元元—五 永觀元	圓融				自九六九 至九八三	藤原氏全盛を極む
自一六四四 至一六四五	永觀二 寛和元	花山				自九八四 至九八五	藤原氏專横を極む
自一六四六 至一六七〇	寛和二 永延元—二 永祚元—五 正暦元—四 長徳元—五 長保元—七	一條				自九八六 至一〇一〇	國政紊る
自一六七一 至一六七五	寛和元—四	三條				自一〇一一 至一〇一五	

紀元年數	天皇	陶磁重要事項	社會の狀態	西暦
長和五—寛仁元—四 治安元—三 萬壽元—八 長元	後一條		平忠常反し源頼信之を討つ 武門漸く勢力を得	自一〇一六 至一〇三五
長元九—長曆元—四 長久元—四 寛德元	後朱雀			自一〇三六 至一〇四四
寛德二—永承元—七—五 天喜元—五 康平元—七 治曆元—三	後冷泉			自一〇四五 至一〇六七
治曆四— 延久元—三	後三條			自一〇六八 至一〇七一
延久四—五 承保元—三 承曆元—四 永保元—三 應德元—二	白河	陶業甚た振はず得て錄すべきものなし	院政の行はれし時代 僧徒相鬪ふ	自一〇七二 至一〇八五
應德三—寛治元—七—八 嘉保元—二 永長元—承德元—康和元—五 長治元—二 嘉承元	堀河	尾張に命じて猿頭の硯研を進めしむ（長治二年）	僧徒の闘益甚し	自一〇八六 至一一〇六
天仁元—二 天永元—三 永久元—五 元永元—二 保安元—三	鳥羽			自一一〇七 至一一二二

自一七八三 至一八〇〇	保安四 天治元—二 大治元—五 天承元 長承元—三 保延元—六	崇德		平忠盛海賊を討つ 平氏漸く頭を擡ぐ	自一一二三 至一一四〇
自一八〇一 至一八一四	永治元 康治元—二 天養元 久安元—六 仁平元—三 久壽元	近衞		僧兵相鬪ふこと愈激し	自一一四一 至一一五四
自一八一五 至一八一七	久壽二 保元元—二	後白河		崇德上皇兵を擧ぐ	自一一五五 至一一五七
自一八一八 至一八二四	保元三 平治元 永曆元 應保元—二 長寬元—二	二條		源賴朝伊豆に流さる	自一一五八 至一一六四
自一八二五 至一八二七	永萬元 仁安元—二	六條		平氏の勢盛んなり	自一一六五 至一一六七
自一八二八 至一八三九	仁安三 嘉應元—二 承安元—四 安元元—二 治承元—三	高倉		平清盛專横なり	自一一六八 至一一七九
自一八四〇 至一八四二	治承四 養和元 壽承元	安德		源賴政兵を擧ぐ	自一一八〇 至一一八二
自一八四三 至一八五七	壽永二—四 文治元—五 建久元—八 元曆及文治ノ二年號アリ	後鳥羽	京都の南深草の地に土器を作らしむ（元曆元年）	平氏亡び源賴朝覇府を開く	自一一八三 至一一九七

紀元年數	天皇	陶磁重要事項	社會の狀態	西暦
自一八五八至一八六九	土御門		源氏全盛時代	自一一九八至一二〇九
自一八七〇至一八八〇	順徳	加藤四郎左衛門（藤四郎）瀬戸に日乙手を焼く		自一二一〇至一二二〇
一八八一	仲恭	大膳職漸く徴に諸國陶器を焼くもの少し	承久の役あり	一二二一
自一八八一至一八九一	後堀河	藤四郎道元禪師に從て宋に行く（貞應二） 藤四郎歸朝古瀬戸瓶子窯を始む（安貞元）	北條氏漸く勢を得	自一二二一至一二三一
自一八九二至一九〇一	四條		北條氏執權時代	自一二三二至一二四一
自一九〇二至一九〇五	後嵯峨			自一二四二至一二四五
自一九〇六至一九一八	後深草		北條氏全盛時代	自一二四六至一二五八
自一九一九至一九三三	龜山	二世藤四郎眞中古窯を開く 黃瀬戸を發明す	蒙古の使來る	自一二五九至一二七三

自一九三四 至一九四六	自一九四七 至一九五七	自一九五八 至一九六〇	自一九六一 至一九六七	自一九六八 至一九七七	自一九七八 至一九九八	自一九九九 至二〇二七	自二〇二八 至二〇三二	自二〇三三 至二〇五二
文永一一 建治元—三 弘安元—九	弘安一〇 正應元—五 永仁元—五	永仁六 正安元—二	正安三 乾元元 嘉元元—三 德治元—二	延慶元—三 應長元 正和元—五 文保元	文保二 元應元 元亨元—三 正中元—二 嘉曆元—三 建武元—三 延元元—三	延元四 興國元—六 正平二—三	正平三—四 建德元—二 文中元	文中二—三 天授元—六 弘和元—三 元中元—九
後宇多	伏見	後伏見	後二條	花園	後醍醐	後村上	長慶	後龜山
近江信樂燒起る（弘安年間）	三世藤四郎金花山窯を創む	南禪寺の僧經正深草の瓦工に製陶法を授く（正安年間）			唐津米量の製作起る 伊賀燒（丸柱）起る（嘉武年間） 四世藤四郎破風窯を創む（建武四）			
蒙古襲來す				北條氏專橫を極む	北條氏に次で足利氏あり 南北朝分立す 南北兩朝戰亂絕えず	韋氏全盛時代南朝の忠臣多く死す		
自一二七四 至一二八六	自一二八七 至一二九七	自一二九八 至一三〇〇	自一三〇一 至一三〇七	自一三〇八 至一三一七	自一三一八 至一三三八	自一三三九 至一三六七	自一三六八 至一三七二	自一三七三 至一三九二

紀元	年數	天皇	陶磁重要事項	社會の狀態	西曆
自二〇五三 至二〇七一	元中九 明德四 應永元—六	後小松	備前に忌部燒起る（應永年間）	南北朝合一す	自一三九三 至一四一一
自二〇七二 至二〇八七	應永九—三四	稱光		南蠻の使者來る	自一四一二 至一四二七
自二〇八八 至二一二三	正長元 永享元—三 嘉吉元—三 文安元—五 寶德元—三 享德元—三 康正元—二 長祿元—三 寬正元—四	後花園	京都小松谷清閑寺の音羽九郎右衞門深草に製陶す（寶德年間）	足利義政明と交る 僧雪舟明より還る	自一四二八 至一四六三
自二一二四 至二一五九	寬正五—六 文正元 應仁元—二 文明元—八 長享元—二 延德元—三 明應元—八	後土門	志野宗信志野窯を創む（文明中） 唐津燒高麗此の時代より始まる	天下漸く騷擾す 應仁の亂後騷擾益甚し	自一四六四 至一四九九
自二一六〇 至二一八五	明應九 文龜元—三 永正元—七 大永元—五	後柏原	支那歸化人阿米夜樂燒を發明す（永正中） 長門萩燒起る（永正中） 遠江志戸呂燒起る（永正中）	足利氏漸く衰ふ	自一五〇〇 至一五二五
自二一八六 至二二一六	大永六—七 享祿元—四 天文元—二三 弘治元—二	後奈良		英雄各地に割據す	自一五二六 至一五五六

弘治三 永祿元—三 元龜元—三	織田信長瀨戶に巡遊し瀨戶六作に特典を授く		
天正元—三	古田織部織部窯を創む（天正年間） 織田信長安土城を城くに方り明人一覽の作る瓦を用ふ。本邦瓦之より明樣となる	各地戰亂絕えず 織田信長覇を稱し尋で豐臣秀吉の世となる	自一五五七 至一五八五
自二二一七 至二二四五	正親町 常滑燒起る（天正中） 京都陶器起る 加藤與三兵衛美濃燒を始む（天正二年） 丹波燒起る（天正中）		
天正一四—一九 文祿元—四	樂燒元祖宗慶（阿米夜）歿（天正二年） 八田玄齋和泉堺に玄齋燒を作る（天正中） 古田織部正瀨戶十作を選ぶ（天正十三年）	豐臣秀吉朝鮮を征す 關ヶ原の役あり 世は德川の世となる	自一五八六 至一六一〇
慶長元—一五	後陽成 豐臣秀吉長祐に樂の金印を與ふ（天正十六年） 樂燒第一代長祐逝く（文祿元年） 朝鮮の役彼の地陶工多く我が國に伴ひ歸られ陶器亦多く齎らし還らる是に於て我が陶業新生面を開く 朝廷美濃多治見村の工人に命じて土器を製せしむ 肥前有田窯創始す（慶長三年） 高麗左衛門長門萩に歸化す（慶長三年） 茶碗屋久兵衛京都五條坂に淸水燒を始む（慶長中） 豐前上野燒起る（慶長五年） 肥前三河內窯創始す（同年） 筑後柳川燒起る（同年） 薩摩燒起る（同年） 對馬燒起る（同年） 島津侯大隅帖佐に陶工を移す（慶長中）		

紀元	年數	天皇	陶磁重要事項	社會の狀態	西暦
自二二七一 至二二八八	慶長二六—一九	後水尾	京都粟田燒始まる（元和元年） 鵜飼幸右衛門伏見に土人形を創む（元和元年） 酒井田柿右衛門肥前南河原に白手燒を起す（元和七年）	德川二代將軍秀忠時代	自一六一一 至一六二八
	元和元—九				
	寛永元—五		野々村仁清京燒を創む（寛永年間） 御深井燒起る 近江膳所燒起る 筑前高取燒起る 加賀九谷燒起る（寛永年間） 讃岐高松燒起る 肥後八代燒起る		
自二二八九 至二三〇二	寛永六—一九	明正	本阿彌光悦光悦樂燒を作る（寛永中） 藤堂高虎丸柱窯に茶器を作らしむ（寛永十二年） 樂燒第二代常慶逝く（寛永十二年） 瀨戸近代の名工藤兵衛逝く（寛永十七年）	三代將軍家光時代 肥前島原の亂あり（寛永十四年） 江戸城成る（寛永十七年）	至一六二九 自一六四二
自二三〇三 至二三一三	寛永二〇 正保元—四	後光明	小堀遠州宇治の工人に朝日燒を創めしむ 尾張藩主祖母懷燒を燒く（正保年間） 大和赤膚燒起る 岩代會津燒起る（正保二年） 東島德左衛門酒井田柿右衛門伊萬里燒彩色の法を試む（正保四） 鑓屋德右衛門（錦光山の祖）錦樣を始む（正保二年） 出雲燒起る（慶安年間） 磐城相馬燒起る（慶安年間） 肥前伊萬里の志田窯小田志窯吉田窯起る	三代將軍より四代家綱に至る 由井正雪の亂（慶安四年）	自一六四三 至一六五三
	慶安元—四				
	承應元—二				

自一三一四 至一三二二	後西院	承應三 明曆元—三 萬治元—三 寬文元—二	樂燒第三世道入歿（明曆三年） 壺屋久兵衛仁清と共に名畫染付の京燒を作る（明曆中） 肥前平戶侯平戶燒を作らしむ（明曆中） 陳元贇歸化元贇燒を創む（萬治二年） 九谷の後藤才次郎有田に磁器を學ぶ（萬治年間） 尾戶燒起る（萬治年間） 寶山文藏粟田口に窯を開く（萬治三年）
自一三二三 至一三四六	靈元	寬文三—三 延寶元—八 天和元—三 貞享元—三	初代帶山與兵衛京都粟田に窯を開く（延寶中） 大阪高津に雞波燒起る 中野燒起る 加賀大樋燒起る（天和年間） 白井半七點茶用土風爐を江戶今戶に作る（貞享年間） 第二世柿右衛門の南河原窯鍋島侯の御用窯となる（貞享二年）
自一三四七 至一三六八	東山	貞享四 元祿元—六 寬永元—五	攝津三田燒起る 肥前伊萬里松ヶ谷窯を創む 尾形乾山樂燒の一新機軸を開く（元祿中） 樂第四代一入逝く（元祿九年） 江戶尾州屋敷に外山燒を起す（元祿年間） 美作勝山燒起る（元祿年間）

	四代將軍家綱時代	自一六五四 至一六六二
四代家綱より五代綱吉將軍の時代 德川光圀封內の寺を毀つ		自一六六三 至一六八六
六代家宣　七代家繼　八代吉宗將軍時代		自一六八七 至一七〇八

紀元	年數	天皇	陶磁重要事項	社會の狀態	西曆
自二三六九 至二三九四	寬永六—七 正德元—五 享保元—九	中御門	尾形乾山江戸に來り乾山燒を燒く（享保年間） 樂第五代宗入逝く（享保元年） 二世白井半七江戸に今戸燒を作る（享保二年） 瀨戸新製起る（享保二年） 穎川の門人龜祐三田に至て靑磁の製造に力む（享保元年） 鍋島侯大河內窯を開く（享保年間） 加藤民吉肥前に磁器の製法を探る（享保四年）	八代吉宗將軍時代 大岡忠相町奉行たり 天一坊を磔す	自一七〇九 至一七三四
自二三九五 至二四〇六	享保二〇 元文元—五 寬保元—三 延享元—三	櫻町	伊勢萬古燒起る（元文元年） 樂第六代左入逝く（元文四年） 尾形乾山歿す（寬保三年）	八代吉宗將軍時代 西南四道大飢饉（享保一八年）	自一七三五 至一七四六
自二四〇七 至二四二一	延享四 寬延元—三 寶曆元—二	桃園	初代道八京都粟田に陶窯を開く（寶曆中）	九代家重將軍時代 東海北陸大水あり	自一七四七 至一七六一
自二四二二 至二四二九	寶曆三—一三 明和元—六	後櫻町	讃岐志度燒起る（寶曆年間） 出雲婦志奈燒起る（明和年間） 越前坂井燒始まる（明和年間） 初代六兵衛京都五條に陶窯を開く（明和中） 樂第七代長入逝く（明和七年）	十代家治將軍時代 山縣大貳等を斬る	自一七六二 至一七六九
自二四三〇 至二四三八	明和七—八 安永元—七	後桃園	樂第八代得入逝く（安永三年） 伊豫大洲藩主加藤侯砥部燒を起す（安永四年）	十代家治將軍時代	自一七七〇 至一七七八

安永八―九 天明元―八			沼波五左衛門江戸髙古を焼く（天明六年） 近江膳所に梅林焼起る（天明年間） 本村庄八備前伊部に方形の酒壜を作り大に行はる（天明中）
寛政元―三			奥田頴川京焼に一新機軸を出す（寛政中） 五十嵐信平古曾部焼を再興す（寛政三年） 肥後網田焼起る（寛政三年） 初代六兵衛逝く（寛政十一年） 黒田忠之八藏父子を小堀遠州の許に遣し指教を受けしむ（寛政中）
自二四三九 至二四七六			備前虫明焼起る（文化年間） 美濃焼磁器始まる（文化元年） 攝津吉向焼起る（文化元年） 尾張藩主祖母懐焼を再興す（文化年間） 二代道八京都五條坂に窯を移す（文化八年） 二代六兵衛起業す（文化八年） 民吉肥前より磁器の製法を得て瀬戸に歸る（文化六年） 名古屋に豐助焼起る（文化年間） 尾張五郎焼起る（文化年間）
享和元―三 文化元―三	光格		
文化　一四 文政元―三			向井和平砥部焼を改良す（文政元年） 木米粟田に陶窯を開く（文政五年） 二代道八仁和寺宮より法橋及び仁阿の字を賜はり仁阿彌と號す（文政九年） 三代和氣龜亭京都に青華磁器を作る（文政中） 樂家五代の孫吉左衛門堺に御室焼を造る（同） 紀州男山焼起る（文政十年） 淡路焼起る（文政十三年） 木米京都粟田に窯を開く（文政中）
自二四三九 至二五〇五			尾張犬山焼起る（文政中） 大和鹿背山焼起る（天保中） 三浦乾也江戸に乾也焼を作る（天保中） 二代帶山與兵衛粟田焼彩畫を始む（天保中） 飛騨濾草焼起る（天保年間） 森有節萬古焼を中興す（天保二年） 尾州瀬戸深井焼を焼く（天保年間） 樂家九代了入逝く（天保五年） 二代道八桃山焼を製す（天保十三年） 禁中御所より相馬燒獻上の命下る（同年） 播磨東山焼起る（天保年間） 清風與平京都五條橋に青磁を作る（天保年間） 初代藏六京都五條に青磁を作る（弘化元年）
天保元―一四	仁孝		
弘化元―二			

		十代家治より十一代將軍家齊時代 田沼父子暴政を行ふ 家齊奢侈を禁す 魯使長崎に來る（文化元年） 英船琉球に寇て互市を請ふ（文化十三年）
		自一七七九 至一八一六
		十一代家齊より十二代家慶將軍時代 大鹽平八郎の亂あり
		自一七七九 至一八五四

紀元	年數	天皇	陶磁重要事項	社會の狀態	西暦
自二五〇六 至二五二六	弘化三—四 嘉永元—六	孝明	江戸の近郊矢口の里に玉川燒あり（嘉永中） 萩山金吾萩山燒を起す（嘉永年間） 美濃溫古燒起る（嘉永年間） 名古屋に有我燒起る（嘉永年間） 下野益子燒起る（嘉永六年） 三代六兵衛土燒大燈籠を製して世人を驚かす（嘉永六年）	十二代家慶　十三代家定 十四代家茂　十五代慶喜 公時代	自一八四六 至一八六六
自二五二七 至二五七二	安政元—六 萬延元 文久元—三 元治元 慶應元—二 慶應三 明治元—四五	明治	樂第十代旦入逝く（安政元年） 加賀山代に九谷燒の新窯を築く（安政五年） 九谷今日の盛況之より始まる 泉州堺に菱古燒起る（安政三年） 永樂保全歿す（安政十一年） 江戸向島に吉向燒を起す（安政二年） 幹山傳七京都清水に青華磁器を製す（文久元年） 因幡湯坂燒起る（文久元年） 三河に岡崎永樂起る（慶應より明治の初年に亘りて） 三代道八鍋島藩の召に應じて肥前有田に京燒を教ふ（明治二年） 横濱に太田燒起る（四年） 墺太利維也納府萬國大博覽會に本邦陶磁を出陳す（六年） 釉料コバルトの輸入あり（三年）西洋繪具を用ふること始まる 京都勸業場内に舍密局を設く（三年） 錦光山宗兵衛外人との間に京燒取引を開始す（五年） 瀨戸二十七代惣四郎逝く茲に瀨戸陶師の家絕ゆ（十年） 東京小石川に江戸川製陶所を設く（十年）		自一八六七 至一八六七

五十嵐信平支那辰砂燒に模擬せる古官部燒を出す（十四五年）
九谷陶器會社成る（十二年）
京都陶器會社起る（十八年）
農商務卿柿右衛門の功を追賞す（十八年）
肥前小田志に含珠燒起る（二十年）
陶器試驗所を京都五條坂に設く（二十九年）
樂第十一代慶入逝く（三十五年）
金澤市に日本硬質陶器株式會社起る（四十一年）

千峯翠色
秘色窯
雨過天青
（本文第十頁參看）

鑑定備考 日本陶器全書附錄

日本の窯工と支那及泰西の窯工との比較及其の大觀

一 窯工發達の徑路は東西正反對を爲す

廣義に於ける窯工業の發達に就て、東西兩洋の歷史に顧みれば、全く正反對の方向を以て進み來れるの迹あるを見る。即ち東洋の窯工業は、曾て互に分立したるものが、後に和合したるに反し、西洋のそれは、曾て和合し來りて、後に分立したるを見るべし。請ふ事實に依て之を論證せんか。

日本、支那、朝鮮等の東洋人は、夙に穩健若くは溫雅なる玉質器物に對する好尙あり、之を陶器及び硝子細工の上に應用して、所謂本窯仕上の工技に意を注ぎたりき。支那にては專ら青華を尙び、唐の越州窯の千峯翠色、吳越窯の秘色、後周柴窯の雨過天青などの名品は、千三百年前の昔、既に世に現はれ出て、當時は固より、今日に至るまで、苟くも陶磁に趣味を有するもの丶、稱讚

染付

バビロニヤ
アッシリア

埃及

フェニシア
希臘

措かざるもの、日本にては、之を染付と稱し、之が模倣に是れ努めて怠らず、支那のそれに比すれば、優劣固より同日の論にあらずと雖、兎に角他の酸化金屬を應用せる錦手釉（伊萬里、薩摩、九谷燒など）に比すれば、遙かに先じて發達したりしなり。勿論、此の間に於て、硝子あり七寶あり、又時に銅綠の如き鑛物性の軟釉を應用したることありしも、此等は寧ろ浮華に流れ、東洋に固有せる溫雅の趣味と相容れざりし爲に、本窯仕立の陶磁業に比して、錦手、硝子、七寶の窯業は、發達頗る鈍かりしなり。

之に反して、西洋諸國にては、本窯仕上の夢にだも見られざりし時代に於て七寶類似の琺瑯質裝飾、若くは硝子細工は、發達したりしなり。バビロニヤ、アッシリアの古國に於て、色彩を具へたる陶釉、琺瑯質裝飾、及び硝子細工あり、埃及に於ては、陶畫、陶釉夙に開け、酸化鐵乃至酸化銅を着色料とし、鹽類を含める玻璃質の釉藥と並び用ひられ、硝子も亦能く進歩して、色澤自在を極めたりき。フェニシアには、上古既に硝子器の大製造所ありしが、個は琺瑯裝飾術と共に、アッシリアより傳來せしものにて、更に之を希臘に傳へ、希臘人は赤色粘土に、滿俺、酸化鐵、青色酸化銅、綠色炭酸銅及び黃赭色其の他の土類を混和して、各種の色となし、之を製陶用に供し、就中其の瓦器は、遙に

ビチュメント石漆

羅馬の硝子細工

フランク王チルドベルト

白硝子製造所

埃及の壘を摩し、頗る巧妙の域に進み、日常の陶釉には、石漆即ち燃土類を假用せしものも多く、又玻璃質の釉藥をも用ひたりといふ、また其の硝子細工に至ても、埃及のそれに比して一段の進歩ありしといふ。

佛人ペイエー氏の美術史に據れば、我が武烈天皇より推古天皇に至るの間、支那の梁、隋の間、即ち今より約千三百五十年前には、羅馬の硝子細工は著しく發達し、之を薄板に展開する方法も、既に此の時代に行はれ、殊に東羅馬人は有線七寶を製して、今日往々其の遺品を見るといふ。降て、千三四百年代、我が鎌倉足利時代に於ては、伊太利にありて瓦器質に錫釉を應用せる精巧品を出し、琺瑯藥を寺院の瓦に施すに至れり。此の寺院の建造物若くは裝飾用品に對する思構の發達は、常に他より先ぜられしものと見え、紀元六世紀、我が繼體天皇の五年に、フランク王チルデベルトは、始めて某寺に硝子窓を採用し、同時代にコンスタンチノープルのソフキア寺にも、色硝子窓を採用したるより硝子窓は盛に寺院に用ひられ、硝子製造所、硝子彩畫所は、至る所に勃興し、千三百三十年、我が後醍醐天皇元徳二年には、佛王フイリップによりて、白硝子製造所の建設を見、續いてボヘミヤにも、白硝子の製出を見たり、之より十六世紀に掛けて、歐洲各地に大硝子工場の建設を見るに至れり。

泰西諸國の硝子及び琺瑯質裝飾、若くは七寶類の夙に著しき發達を遂げたりしこと、前段記する如きに拘らず、窯工の本領たる陶磁業の發達、遲々として見るべきもの尠かりしは奇とすべし、偶ま磁器製出の晩年に起るに及んでも、之を裝飾するに、本窯仕立に據らず、專ら錦手の法を取りて、我が染付即ち支那人の所謂青華の如きは、獨りファイアンスに採用するに止まりしが故に、明治六年の維納博覽會に於ては、日本の出陳に係る染付磁器は、彼等の一顧だに買はれざりし。然るに、同九年の米國ヒラデルフィヤ博覽會に至て、我が瀨戸磁器の聲價を認め、英國製に係れる支那青華磁器の模造品すら、共に注目を惹くに至れりといふ。尤も、青磁器の製出は、西洋諸國にありても、其の起原は古く、英國博物館案内書に記する所に據れば、其の第四埃及室中に、幾多の磁器及び土器を列擧し、且つ埃及磁器の標本に關して、詳說する所あり、曰く、青綠白褐等の諸色釉を施せる埃及磁器、即ちスチータイトなるものありて、其の青釉なるものは、同國古代十八、九兩朝の際に精良となり、綠釉なるものは第二十六朝頃に美麗に赴きたりしが、此等は何れも紀元前千六百年より古きものにあらず云々、とあり。此のスチータイト（Steatite）は滑石の義にして俗に石鹼石と稱せらるゝものなり、而して、第十八朝は紀元前千七百年より千四百年

ファイアンス

琺瑯

英國博物館案内書
埃及磁器

スチータイト

古代埃及磁器に對する疑問

マジョリカ燒

までの間、第十九朝は紀元前千四百年より千二百年までの間、第二十六朝は紀元前六百六十六年より五百二十七年までの間に當りて、前兩朝は支那夏殷時代後朝は周代に相當せり。然るに、此の埃及磁器なるものも、果して埃及人の創意によりて製出せられたるものなりや、或は東洋より輸入せられたるものにあらずやとの疑問すらある程なり、英人ジョン、イーツ氏の商業工藝史(一八七一年刊行)には『近ごろ發見したる埃及古代磁器の破片を以て察すれば、此頃支那と西洋諸國との間に、貿易既に開けたり』と記するあり、佛國リモージュ府磁器製造所に留學したりし佐藤友太郎氏は、『獨逸サキソンに於て、磁器の製法を發明せしは、曾て埃及地方の古墳より往々石燒に似たるものを掘出せしに因る。然れども當時其の物質の魚介なるや、將た何物たるやを詳にせざりしが、其の物體上に、支那文字の如きものありしを以て、始めて其の東洋より輸入せしものなることを知るに至れり』と曰へり。

古代埃及の磁器は兎に角、紀元千五百年代即ち我が足利氏時代に於て、伊太利特有のファイアンス即ちマジョリカ燒なるもの表はれ、乳白色の釉下に、青綠黃等の彩色を施せるもの、大に歐洲人の好評を博し、當時同國第一流の畫伯ラファエルチシャン、ミケランジ等盛に之に筆を染め、一時製出も盛なりしが

其の法佛國に傳はりて、千七百年代、我が元祿寬政の頃、その名亦大に著はれたり。

パリツシー

佛國にありては、彼の有名なるパリツシーは、十六世紀の始めより末葉にかけて、ファイアンス用色釉の研究を遂げ、兼ねて生物の寫實に妙を得、佛國の陶名をして高からしめたりしが、本邦製磁の祖と仰がるゝ祥瑞(ションズイ)(五郎太夫)が、明國より歸りて、肥前有田に染付の陶法を開きしと、時を同じうせしは、偶然の一奇とすべし。

祥瑞

然れども、近世の所謂佛蘭西磁器なるものは、玻璃質磁器即ち軟磁器に屬し、色澤の自在を主とする低熱物なるを以て、其の端緒は、之を千六百九十五年巴里に近きサン・クルーに於て、黃色の粗陶を出せしに歸せざるを得ず。

佛蘭西磁器

此の工場は、後ヴァンサンに移り、千七百四十五年より更に軟磁器を製して、好評を得、千七百五十六年セーヴルに移り、後リモージュの近傍なるサンチユリーに磁土を得るに及んで、硬質の本磁器を製出するに至り、十八世紀の終より十九世紀にかけて、主として硬質本磁器を產するに至れり。

硬質本磁器

獨逸

獨逸にありては、千七百十年、サキソン侯歐洲最初の官立磁器製造所を、マイセンのアルデレッブルヒ城中に創設し、ボエチヒヤーを所長に任じて、無釉無色磁器を產出し、一時世の好評を得たり。

官立磁器製造所

此の白色磁器の產出は千七百十九

年、即ち我が元和三年にして、肥前南河原窯の白手燒を出せし時に當る。降て千八百七十八年には、伯林官立磁器製造所の創設あり、其の附屬試驗所長たりし、ゼーゲルは長砂釉、罌釉、青磁釉等を研究し、同國窯業界に多大の貢献ありし人なるが、こゝに色地堆描畫のパチユパー磁器を出せり。

英國にありては、千六百九十年、我が元祿三年頃より、エレール兄第がパルスレムに來つて、日本陶器を模造したりしが、伊太利のファイアンスを改良して、華美ファイアンスの一派を開きし彼のアストボリーは、狂愚者を裝ひて、エレール工場の秘法を探知したりき。而して、其の華美ファイアンスに大改良を施せしウェヂウードは、千七百三十年エーール工場の地に生れ出づ、亦奇なりといふべし。

英國
華美ファイアンス
ウエヂウード

之を要するに、東洋陶磁業の本窯仕上の先きに發達したるに反し、西洋諸國の窯工は、先づ硝子、琺瑯、七寶に始まり、陶磁は後れて發達し、同じ陶磁にありても、軟釉の陶器より、硬質の本磁器に進み、釉上錦彩の假裝飾より、本窯仕上に進み、漸次高熱の細工に向ふの順序を取りしこと、歷々見るべきなり。

二　磁器は支那を以て先進國とし陶器は日本を以て先輩國とす

佛人ゴンス氏が、日本美術 L'art Japonais と題する書を著はして、『日本の長所は陶器に在りて、磁器にあらず、其の陶器は第一流といふを得べし。之に反して磁器に至ては、一見人をして其の精絶に驚かしむるも、退いて熟察すれば、一として支那製の模擬たらざるはなし。蓋し、支那は無二の製磁家にして、日本は絶對の造陶者なり』と說破したるは、能く其の眞を穿てるものといふべく、洒落にして意匠を施すに自在なる陶器及び石器が、依然として日本に繁榮し、嚴正にして變化に乏しき磁器が、夙に支那に發達し、且つ永く獨り支那にのみ全盛を極むるは、蓋し兩國人民の品質の然らしむる所といふべきか。

(イ)　支那磁器の起原及び發達

然り、支那に於ては、磁器は宋代即ち我が藤原氏時代に發達し、今日東西の美術家が嘆賞措かざる定、汝、官、哥四名窯の裝飾磁器は、早く此の時代に整頓せしのみならず、支那窯工の中心たる饒州窯も、宋代景德年中に創立せられて、組織ある發達を遂げ、今日に至るまで、連綿として歷代の官窯たる基礎を

定汝官哥四名窯
饒州窯

越州窯

九秋風露云々　秋の涼しき時に越窯を開くそして多くの山の青い色に象つて陶器の色となすのであるから美しい夜の中葉（沆瀣は夜の清らかなる氣）に清らかな空氣に逢はゞ彼の酒好きの稽中散の飲み殘した盃とこちらの越窯から得た器に茶を入れて比べて見たいと思ふ程だ、稽は稽康のこと中散は位の名

犀濟　犀角から絞り出したやうな美しい汁で茶の香氣を發すとなり。

確定したりしなり。而して、此の發達は宋代に於て、突如として見たるものにあらず、其の淵源する所、唐代の昔にあり、或は說を爲して、瓷器は太古燧人氏時代、若くは唐虞三代の世にありと稱ふるものあれども、其の組織的の基礎は、唐の越州窯に之を歸せざるを得ず。越州窯は西曆六百年代、即ち第七世紀の初葉、我が推古、舒明の朝に於て、制定せられたる官窯にして、陸龜蒙をして、九秋風露越窯開、奪千峯翠色來、如向中宵承沆瀣、共稽中散鬪遺桮と叫ばしめたるもの是なり。此の越州窯より出でしものは、今日傳ふるものなしと雖當時茶人の間に愛用せられたることは、諸書に散見する所によりて徵すべく、また白瓷、青瓷の兩樣を存ぜしことも、考證し得らるゝなり。支那茶人の祖と稱せらるゝ陸鴻漸、『茶經』を著し、其の中に曰ふ、盌は越州は上にして、鼎州は次ぎ、婺州は次ぎ、壽州は次ぎ、洪州は次ぎなり、或は刑州を以て越州の上に處くは、殊に然らずとす、邢瓷は銀に類し、越瓷は玉に類す、邢の越に如かざること一なり、邢瓷は雪に類し、越瓷は氷に類す、邢の越に如かざること二なり、邢瓷は白くして茶の色丹し、越瓷は青くして茶の色綠なり、邢の越に如かざること三なり、と又唐の人韓偓の詩に曰ふ、越甌の宰液茶香を發す、と唐說に曰ふ、陶は唐に至て盛なり、瓶花譜にも亦云へり、古には瓷瓶なし、皆銅

秘色窯

柴窯

雨過天青器

定窯

を以て之を爲れり、唐に至り始めて窯器を倘ぶと。

越州窯の千峯翠色器に尋いて起れるものを、呉越の秘色窯とす。唐說に、呉越の秘色窯は錢氏が國呉越とを有てる時に越州より焼きて進めたり、と曰ひ、高齋漫錄に、越州より焼き進むるは、供奉の物と爲り、臣庶は用ふるを得ず、故に秘色といふ、と曰へり。蓋し、秘色は秘密の青色といふ意にして、人民は容易に用ふるを得ず、との意を寓せるものなり。

秘色窯に尋て、後周の柴窯より、雨過天青器出づ、柴窯は世宗の時に焼けるものなり。唐說に曰ふ、相傳ふ、當日瓷器の式を請ふ、世宗其の狀に批して曰く、雨過ぎ天青く、雲破る處の者般やうなる顏色ぐのに作し、持ち來れと、夷門廣牘に曰ふ、柴窯は北地より出づ、天青色にして滋潤あり、細媚にして細紋あり、足には麪黃土多しと。

柴窯は宋の定、汝、官、哥の四名窯と稱せらるゝものにして、たい年次の早晩あり、且つ遺品の稀に見るの差あるのみ。

（ロ）宋代の名窯

柴窯に次て出てたるものは、所謂宋の四名窯にして、各其の特徴を異にす、定窯は今の直隸眞定府なる定州より出てしものにして、土脈細かに、色白く、

汝窯
官窯
哥窯
百圾碎
龍泉窯

滋潤なるもの、最も貴く、質麁にして、色黃なるものは價低く、外に淚痕なだあるもの、是れ眞にして、劃花のもの最も佳なり、素なるもの亦好し、繘花のもの之に次ぐ、と格古要論に載す。

汝窯は定州の白瓷に芒あるより、汝州に命じて、青器窯を建てしめ、瑪瑙を粉にして油と爲さしめたるもの、と陶說に記す。又博物要覽に、汝窯は色卵白にして、汁水瑩厚藥のなること堆脂の如し、汁中の蠅眼隱ちたしかにして、蟹爪の若し、底に芝麻花細かなる花模樣細小の挿釘さしくぎあり、と曰へり。

官窯は宋の政和年中、京師に窯を置き、燒造せし所のものにして、色は白く薄きこと紙の如し、博物要覽には、官窯の品格は、大率哥窯と相同じ、色は粉青を取るを上とし、淡白は之に次ぎ、油灰色は色の下なり、紋は氷裂と鮮血なざのを取り上とす、梅花片と黑紋は之に次ぎ、細碎紋は紋の下なり、と曰へり。

哥窯は日本の俗に礎手と稱するものにして、處州の人章生一、弟生二の二人龍泉窯にて各其の一を主どり燒きしが、兄なるの故に、哥窯といひ、弟の生二の分に本稱を殘して、龍泉窯と稱するなり。土脈細かにして薄く、油水の純粹なるもの最も貴く、哥窯は斷紋多く、百圾碎と號す、と稗史類編に曰へり。弟の龍泉窯は、處器青器ともいひ、章窯とも稱し、邦俗天龍寺手と稱するものに

吉州窯
象窯
董窯
均州窯
磁州窯
建窯

て、土脈細かにして薄く、翠青色のもの貴く、粉青色のものあり、一等の盆底に雙魚あり、盆外に銅掇環てとりあり、體厚きものは佳からず、と格古要論に載す。

宋代には、此の外、邦俗唐物茶入と稱して珍重する吉州窯、象窯、董窯、辰砂手と稱せらるゝ均州窯、磁州窯、天目茶碗と稱せらるゝ建窯など、名窯甚だ多し。

此の如く、支那の磁器は、唐代より宋代に亘りて、就中宋代に於て、光輝燦然たる發達を遂げしものなるが、之を日本及び西洋諸國に於ける窯業狀態に對比する時は、果して如何、西洋諸國に於ては、陶磁の未だ見るべきものなく、本窯仕上の青磁などは、曾て夢にだも見る能はず、たゞ硝子工業僅に頭を擡げて、寺院の裝飾窓に之を用ひし位に止まれること、前章說けるが如し。次に我が日本に於ては、陶業中廢の時代に屬して、甚だ振はず、藤原氏時代に至て、其の大臣等が、吳越と數回交通を重ぬるに及んで、唐の越州窯に連續したる秘色窯の器を齎し歸り、所謂『ひそく』と稱して、珍愛措かざる程なりき。また我が陶磁業の祖、藤四郎の技を學ぶに至りしも、之より降て五百年の後、南宋の朝に在りしなり。されば、事實の上に於て、支那は世界陶磁業の先進國にして

支那の國民性

殊に、磁器に於て、今日尚ほ一等國の地歩を占むる、決して偶然ならざるなり。由來、支那は國家としては、常に統一を缺き、其の間常に紛爭絕えず、弱肉強食、元首の交迭一ならずと雖、國民としては、風流韻事を解し、文藝に長ずる所ありしを以て、三千年の昔、既に孔孟、揚墨の哲學あり、我が國の文教は、明治維新までは、一に彼に則りし程なれば、美術思想に根柢を有し、佛教、道學等の精神攝養に關係ありと、稱せられて、思想に生活する人の愛用する茶と直接の關係ある陶磁の發達する、亦大に謂ありといふべし。

(八)　宋以後の磁器

饒州窯

支那窯工の中心たる饒州窯は、今江西省に屬し、饒別府浮梁縣西興郡景德鎭にあり、宋の景德中の設定に係り、爾來今日に至るまで、連續して營業し、歷代の官窯亦こゝに設けられ、幾多の名品輩出せり。我が藤四郎の入宋して、染付の法を窺ひしも、亦こゝに於てせり。而して、此の饒州窯に於ては、東洋磁器の一大特色たる青華（日本にては染付といふ）を出せり。青華は明代の特產物と稱せらるゝものなるが、陶說には宋器として之を擧げ、饒州花青盌といひ、格古要論を引きて、色白花青云々と解說し、按ずるに此れ饒器の始めならん、と註せり。正に是れ青華白磁の事なるべし。然れども、青華磁の端は、宋代に之を發し、明

藤四郎染付を學び來る

青華は明代の特產物

元朝の陶磁業

代に至て大成せるもの、と見ると穩當とすべし。

宋の後を襲ぎし元朝は、前後九十年の間、多く外征を事とし、太平の夢圓かならざりしを以て、陶磁の亦見るべきもの少しと雖、饒州の官窯にて燒きし小足小糸印花の中に、樞府の字號あるもの、最も佳なりと稱せられ、又彭金寶なるもの、定器に倣ひて作れる腰折型の器、整齊珍重すべきものあり、時に之を彭窯といひ、新定と稱す。

新定

明朝の陶磁業

明代に至ては、光彩陸離、大に支那陶磁史を飾るべきものあり、先づ其の式樣を擧ぐれば、邦俗錦手と稱する五采を始めとし、青花あり、硃砂盌あり、漏空花紋塡五彩等の坐墩あり、式樣の多き、前代未曾有と稱せらる。曾に式樣の多趣に止らず、椎器の新機軸を出して、世の好評を博し、同じ饒州の官窯にありても、洪武、永樂、宣德、成化、正德、嘉靖、隆慶、萬歷の各時代に於て、各特異の光彩を發揮せり。南村隨筆に曰ふ、永樂は厚きを尙び、成化は薄きを尙び、宣德は青淡きを尙び、嘉靖は青濃きを尙び、成化の青は宣德の青に若かず、宣德の彩は成化の彩に若かず、と陶說著者の按に曰ふ、古窯は青器を重んず、明に至て秘色絕え、皆純白、或は青花を描き、或は五彩を加ふ、而して、青花を論ずれば、宣德窯を最とすべく、五彩を論ずれば、成化窯を最とすべく

硃砂窯
銅赤色にして辰砂燒と同義なり

永樂窯
成化窯
嘉靖窯
宣德窯

清時代の陶磁業

規禹廉挫
規は圓、禹は角
廉はカド、挫は
カドなきもの

日本陶業の四大區別
創成期
停滯期
中興期
發達期

之を要するに、明器中宣德成化二窯に過ぐるものなし、と

若し夫れ、清初の饒州窯に至ては、其の範を定、汝、官、哥、宣德、成化、嘉靖等の好樣に取り、之を一窯に萃めたるもの、隨て彩色には霽紅、礬紅あり霽青、粉青、冬青あり、紫綠、金銀あり、漆黑、雜彩あり、器品には規あり、萬あり、廉あり、挫あり、或は嵩く、或は卑く、或は侈に、或は弇り、或は彩にし、或は素にし、畫染には山水、人物、花鳥、寫意あり、餙金、鏤銀、琢石、髹漆、螺甸、竹木、匏蠡の諸作、皆陶を以て之を作り、倣傚肖せざるなきを努ひ。

（二）日本は陶器の先輩國なり

日本の陶業史は、之を四大期に區別することを得べし、即ち天平時代（西曆第八世紀の中葉、支那唐の玄宗皇帝時代）までを創成期とし、それより平氏時代（西曆第十二世紀の末葉、支那南宋孝宗帝時代）までを停滯期、寧ろ衰退期とし、鎌倉時代（西曆第十三世紀の初葉、支那南宋理宗帝時代）を中興期とし藤四郎唐より歸り來て、製陶上に新機軸を出し、他の同業者に刺撃劑を與へ、斯業勃興の動機を作る、秀吉の征韓役時代（西曆第十六世紀の末葉、支那明神宗帝時代）以後を發達期と稱すべし。顧ふに、支那に在りては、周秦漢時代の

銅器隆盛の後を承け、唐宋以降、銅の需用激増し來りたるにも拘らず、其の產出力の之に伴はざるよりして、銅器に代位すべきものを覓むるの必要に迫られたると、一方には喫茶の流行に促されて、陶磁の進歩興隆を見たるが如く、日本の窯工業にも、銅器、漆器の發達と、喫茶の流行とによりて、其の盛衰、消長を來せし迹あるを見る。

奈良朝時代は、銅器と同時に漆器の發達を來し、殊に優麗なる漆器の繁榮は延いて平安の朝に及びしが爲に、一時進歩發展の緒に就かんとしたる我が陶器は、寧ろ衰退の徴を來し、加ふるに、朝廷の威信漸く行はれず、平將門の亂以後、武門の勢力強く、官府亦從來の如く、製陶奬勵の道を取る能はず、毎歳貢納する陶器の、他物代用若くは中絶するに至れるも、亦強て詮議立てするにも至らざる有樣にて、自然陶工業の衰運を招けり。然るに、鎌倉時代北條氏が執權職を以て、天下に臨める間には、佛教に歸依すること強く、一方には支那との交通も漸く繁くなりて、喫茶の風習漸く擴まり、所謂禪味と茶味との普及を俟ちて、始めて陶業發展の機運に向ひ、尋て藤四郎唐より歸朝後の作品は、技巧に一段の進歩を加へたるのみならず、大に喫茶家の趣味に投じ、大に珍愛せらるゝことゝなり、所在陶窯の勃興を見たるなり。

二　磁器は支那を以て先進國とし陶器は日本を以て先進國とす

若し夫れ豊太閤の征韓役が、本邦陶業上に如何なる變化を來せしかに想到せんか、截然として、一新紀元を作成し、急速の發達を促せしことは、由來秀吉は陶器に趣味を有し、或は陶工を奬勵し、或は珍品を愛用したるのみならず、自ら進んで、愛陶の趣味を鼓吹せんが爲に、軍役の論功行賞に陶器を以てしたる程なる其の上に、朝鮮の地、素と我よりも一段の進歩を告げたる陶業國なりしを以て、出征の侯伯爭ふて其の工人を拉し來り、己が領内に窯場を建設したる一事に在らずんばあらず。毛利侯の萩燒の如き、島津侯の薩摩燒の如き、加藤侯の八代燒の如き、何れも捕虜陶工の開きし窯工場なり。

平安朝時代に、一時盛に唐風を受けて、天台眞言の兩宗と共に、喫茶の新風を輸入し來るや、内地茶樹の蕃殖を圖りたるも其の後漸く唐風模擬の衰頽に伴ひ、喫茶の風習も、亦何時となく中絶したりしなり。故に本文鎌倉時代に、禪宗の兩派（臨濟、曹洞）と共に、宋代の茶を再傳し來りて、茶味と禪味との普及を見、之が爲に陶業中興の機運を促進したり、といふ記事とは、全く別派に屬することを記せざる可らず。

支那宋、明兩時代に於て、磁器の發達、隆昌を來したるに比して、日本は著しく後れて、足利、豊臣、徳川氏の世、即ち明の末葉に方て、漸く陶器の發達を見、而かも磁器は微々として振はず。偶これあるも、多くは支那のそれに模

傚したるものにて、獨特の長技を發揮し得ざりしに顧みれば、窯工の進歩上、彼此正に一段の先後あるは、斯業の先進、後進の關係あるが爲めなり、とはいへ、之を西洋諸國に對比する時は、著しく先輩の榮譽を荷ふを覺ゆ。見よ、獨逸サキソン侯の官立磁器製造所に於て、ボエチヒヤーが白色磁器を製出したるは、西曆一七〇七年にして、一六一七年（元和三年）我が南河原の白手燒を出し、一六二九年（寛永六年頃）有田磁器を創製せしに比すれば、八十年前後の差あるにあらずや、又ウエヂウードが華美ファイアンスの改良を加へたる一七五〇年代は、伊萬里錦手が、長崎在留の蘭人によりて、西洋諸國に輸出し始めたる正保年代に比して、百年內外の後に當れるにあらずや、京都の野々村仁清が、肥前錦手の密傳を得たる明曆年代も、亦ウエーヂウードの生前八十年に當れるにあらずや。

南河原の白手燒

伊萬里燒とウエヂウード

仁清とウエヂウード

日本陶器の特色

然り、日本の陶器は、支那に比すれば、後進たるを免れずと雖、西洋諸國に比すれば、先進たるは蔽ふ可らざる事實なると共に、陶器の洒落にして、意匠奇拔、且つ變化に富めることは、先進國の支那を凌駕せるを見る。蓋し、日本國民の長所は、由來模倣力の偉大なると、模倣の末、遂に之を同化し、日本化して、一步原物に優るに至る點に存す。彼の佛敎を印度、支那より輸入して、

日本國民の同化力

日本の國俗に合せしめ、今は世界中日本にのみ佛教の精髓を存するに至れるも國民同化力の致す所と見るべく、儒教を支那より致して、其の本國たる支那は儒生の爲に國を誤られ、社會を紊されて、儒教の勢力なかりしに拘らず、日本二千年の國民は、思想の左右、武士道の維持、社會の秩序、皆儒教を根基として立ちしなり、是れ亦國民同化力の致す所と見ざる可らず、陶工の業も亦然り日本に輸入し來りて後、日本人の趣好に投じ、日常の必要に合する爲に、形式の上にも、意匠の上にも、幾多の思考を凝し、各種の變化を試みて、之を大成するの氣運は、何時の間にか、不知不識の間に、工人の頭に醸成せられて、終に日本獨特のものとなれるなり。

鑑定備考 日本陶器全書索引

あ ノ 部

あかうらやき……赤浦山……三ノ四二
あかし……明石燒……三ノ四〇
あかづ……赤津……二ノ一二
あかの……上野燒……三ノ九三
あがの……上野喜藏……三ノ九三 四ノ三〇
あがの……上野忠兵衛……三ノ九三
あかはぜ……赤膚燒……一ノ一〇七
あかまつ……赤松光信……三ノ七五
あかみ……赤井新兵衛……二ノ七〇
あかみ……赤膚の勇次郎……三ノ一三
あきし……秋二燒……二ノ六六
あさぎり……朝霧燒……三ノ四二
あさの……淺野燒……三ノ一六
あさひ……朝日燒……一ノ一〇七
あさひ……朝日春慶……二ノ四七
あさる……淺井幸八……三ノ一二
あしざは……芦澤與兵衛……三ノ二九
あしひきつき……脚短坏……一ノ九
あすかがは……飛鳥川……二ノ三一
あさがき……後窯……二ノ三九
あなん……安南燒……三ノ四二
あねて……姉手……二ノ四四
あはた……粟田燒……一ノ八一 一ノ九〇
あはぢ……淡路燒……三ノ七二
あひかは……相川燒……三ノ二二
あひづ……會津燒……二ノ一一三
あぶらつき……油壺……一ノ一〇
あへつき……盞坏……一ノ一〇
あまごとき……尼五器……四ノ六四
あまやき……尼燒……一ノ五〇
あみだ……網田燒……四ノ三三
あめや……阿米夜……一ノ四九 一ノ五〇
あやすぎ……文杉……四ノ五九
あやめ……菖蒲……一ノ五八
あややき……綾燒……三ノ三六
あらしやま……嵐山燒……一ノ一〇一
ありた……有田窯……四ノ一〇
あをゐど……青井戸……四ノ六八
あをえて……青江手……二ノ三三
あをおりべ……青織部……二ノ五四
あをき……青木木米……一ノ九二
あをき……青木宗兵衛……四ノ三八
あをき……青木樂五郎……三ノ一六
あをやま……青山幸右衛門……一ノ八四
あんかう……鮟鱇……二ノ二二
あんどり……安東燒……二ノ六
あんろ……暗鑞……一ノ四六

い ノ 部

いうぎよくえん……友玉園……二ノ八五

いうげき……遊撃判事……四ノ六一
いうせつ……有節……二ノ八
いが……伊賀焼……二ノ一
いからし……五十嵐信平……一ノ一一四
いからし……五十嵐次右衛門……三ノ八六
いけのか……池由加……一ノ九
いしおか……石岡林兵衛……二ノ一一六
いせて……伊勢手……二ノ四五
いせて……伊勢手春慶……二ノ四九
いそじらう……磯次郎……三ノ四二
いそのかみ……磯上……三ノ五六
いちかわもん……市右衛門……二ノ六七
いちげん……一元……一ノ七三
いちでう……一條九兵衛……一ノ七四
いちにふ……一入……一ノ五一／一ノ六四
いちのせ……一瀬窯……四ノ一九
いちばう……一房……三ノ二七
いちばて……市場手……二ノ三六
いちはら……市原定直……三ノ八三
いちもじ……一文字……一ノ五八
いちもじや……一文字屋佐兵衛……一ノ九〇
いづし……出石焼……三ノ二八
いつぱうどう……一方堂……一ノ一〇一
いづべ……伊豆閉……一ノ二
いづみやま……和泉山……四ノ三
いづも……出雲焼……三ノ三一
いづも……出雲若山……三ノ三四
いど……井戸……四ノ六八
いとう……伊藤允讓……三ノ七九
いとう……伊藤甚平……三ノ二二
いとう……伊藤富太郎……三ノ二二
いときり……糸切……一ノ三一
いとそこ……絲底……一ノ三一
いとめとうしらう糸目藤四郎……二ノ二七
いどわき……井戸脇……四ノ六九
いないらほ……伊奈伊羅保……四ノ五七
いなづま……稻妻……一ノ六三
いなみしま……伊奈三島……四ノ六〇
いぬやま……犬山焼……二ノ六八
いのうへ……井上眞助……二ノ七九
いはき……磐城焼……二ノ一一二
いはくら……岩倉山吉兵衛……一ノ九五
いはひべ……伊波比閉……一ノ二
いはや……岩屋……四ノ三
いひたや……飯田屋八郎右衛門……三ノ一二
いへなが……家長長三郎……三ノ九〇
いまど……今戸焼……二ノ七八
いまり……伊萬里焼……四ノ二／四ノ九
いまり……伊萬里金襴手……四ノ一三
いらほ……伊羅保……四ノ五六
いろなべしま……色鍋島……四ノ二二
いろみあな……色見穴……一ノ三四
いんげん……隱元……三ノ六三
いんべ……伊部……三ノ四六

いんべ……息部……三ノ四六
いんべ……伊部陶器株式會社……三ノ五八

う ノ 部

うえき……植木清兵衛……三ノ二八
うがやき……有我燒……二ノ六四
うきつ……右橘……三ノ七六
うじゐん……雲林院文藏……一ノ九六
うす……臼……一ノ一〇
うちがま……内窯……一ノ四七
うちきりまはし……内切廻し……四ノ五七
うちむら……内村……一ノ五
うぢや……宇治屋三郎右衛門……二ノ六四
うづらやき……鶉燒……一ノ一〇〇
うにのさと……有爾鄉……二ノ五
うばがもち……姥餅燒……二ノ九八
うへだ……上田吉左衛門……一ノ一〇九
うらがま……裏窯……一ノ四三
うり……瓜茶入……二ノ二三
うれしの……嬉野燒……四ノ二三
うをすみ……魚住燒……三ノ四一
うんくわく……雲鶴……四ノ六六
うんざん……雲山燒……三ノ二二
うんしゅうりう……雲州流……三ノ三二
うんしやう……雲松……三ノ六三
うんせん……雲善……三ノ三四
うんてい……雲貞……三ノ五六

え ノ 部

えいしんしや……盈進社……三ノ二八
えいせん……瀛川……一ノ九一
えいらく……永樂燒……一ノ九七
えいらく……永樂金禱手……一ノ九八
えいらく……永樂善五郎……一ノ九八　三ノ七一
えいらく……永樂保全……一ノ九八
えいらく……永樂和全……一ノ九八
えかうらい……繪高麗……四ノ七二
えがらつ……繪唐津……四ノ六
えごき……繪五器……四ノ六五
えだがき……枝柿……一ノ五八
えつちゅう……越中瀨戸……三ノ一八
えどがは……江戸川製陶所……二ノ八四
えどころ……繪所……二ノ八五
えどばんと……江戸萬古……二ノ七　二ノ八三
えのきはだ……榎肌……三ノ四八
えびせい……海老清……一ノ九一　一ノ九九
えふご……餌籠……二ノ二三
えんしう……遠州伊賀……二ノ二
えんしう……遠州信樂……二ノ九三
えんしう……遠州高取……二ノ八六
えんしう……遠州丹波……三ノ二五

お ノ 部

おりばう……鷹尻窯……四ノ一九

おかざき……岡崎永樂……二ノ七三
おがた……尾形深省……一ノ七二
おがた……尾形光琳……一ノ七二
おがた……尾形周平……三ノ七二
おかつやま……御勝山燒……二ノ一〇六
おがは……小川宗朔……三ノ三七
おがは……尾河古四郎……三ノ三七
おかはらけし……御土器師……二ノ七九
おかまや……御窯屋……二ノ五五
おかもと……岡本定八……二ノ三
おかもと……岡本定五郎……二ノ三
おくかうらい……奥高麗……四ノ五
おくだ……奥田穎川……一ノ九一
おくらかたて……御藏堅手……四ノ七一
おけさら……麻笥盤……一ノ一〇
おさき……尾崎治郎右衞門……三ノ二九
おさへのつち……押への土……一ノ四〇
おさみやものや……長宮物屋……二ノ五
おそふね……遲船……一ノ六四
おだし……小田志……四ノ二三
おだはら……小田原伊兵衞……二ノ九六
おちぼ……落穗……二ノ四五
おてがま……御手窯……四ノ四二
おとこやま……男山燒……三ノ七一
おとは……音羽九郎右衞門……一ノ四九
おとはや……音羽屋九郎兵衞……一ノ八四
おどやき……尾戸燒……三ノ八一
おにとものかへ……鬼熊川……四ノ七〇
おにはぎ……鬼萩……三ノ六九
おにはやき……御庭燒……一ノ一八
おのぎしん……小野義臣……二ノ八五
おひがめ……貢瓶……一ノ一〇
おふかる……御深井燒……二ノ三九
おほゐど……大井戸……四ノ六九
おほかりち……大河内窯……四ノ二二
おほがま……大窯……三ノ四七
おほかみ……大神甚五郎……四ノ二七
おほき……大木新一郎……二ノ一一〇 三ノ五 三ノ八 三ノ九
おほくら……大藏清七……二ノ一一三
おほしま……大島燒……二ノ七一
おほせと……大瀨戸……二ノ一三
おほた……太田燒……二ノ八六
おほた……太田作十郎……三ノ一八
おほたる……大樽……四ノ三
おほつか……大塚啓三郎……二ノ一一〇
おほば……大葉吉藏……三ノ五一
おほば……大葉是介……三ノ五二
おほば……大葉永介……三ノ五三
おほば……大葉定右衞門……三ノ五一
おほば……大葉千吉……三ノ五三
おほば……大葉與右衞門……三ノ五三
おほば……大葉直治……三ノ五一
おほば……大葉平……三ノ五一
おほば……大葉平十郎……三ノ四八

おほば……大饗紋三郎……三ノ五一
おほば……大饗龍次郎……三ノ五三
おほばやし……大林實藏……三ノ四四
おほひ……大樋燒……三ノ一四
おむろ……御室燒……一ノ七九
おむろ……御室燒……一ノ一〇九
おもかげ……面影……一ノ五八
およそて……凡手……二ノ三六
おりべ……織部燒……二ノ四五　二ノ五二
おんこ……温古燒……二ノ一〇六

かノ部

か……何氏……四ノ四〇
かいらぎどころ……カイラギ所……四ノ五九
かいらくえん……偕樂園燒……三ノ七〇
がいろめ……蛙目……一ノ二四　二ノ一〇五
かりえもん……幸右衛門……一ノ一〇三
かりき……高貴……一ノ五
かりざん……香山……二ノ八四
かりしつたりき……硬質陶器……三ノ一六
かりち……交趾燒……三ノ四〇
かりの……河野忠次……二ノ一〇六
かりの……河野通介……三ノ七七
かりばん……高盤……一ノ一〇
かりらい……高麗左衛門……三ノ六六
かりらい……高麗五器……四ノ六五
かりらんしや……香蘭社……四ノ一五
かがみのはさま……鏡谷……一ノ二
かがみや……鏡屋庄七……二ノ六四
かきえもん……柿右衛門……四ノ一九
かぎや……鍵屋……一ノ九二
がくおり……岳翁……二ノ五四
かげのぶ……景延……二ノ一〇三　二ノ一〇四
かけもの……掛物……一ノ四一
かさま……笠間燒……二ノ九〇
かざをれ……風折……一ノ五七
かしふ……加集珉平……三ノ七二
かしふ……加集三平……三ノ七三
かせやま……鹿背山燒……一ノ一〇八
かた……加田半六……三ノ三二
かたざら……片盤……一ノ一〇
かたつき……肩衝……二ノ一七
かたてごき……堅手五器……四ノ六五
かたもの……琢器……一ノ三三
かちゆう……嘉仲……二ノ五五
かつやま……勝山燒……三ノ四四
かつらぎ……葛城安左衛門……四ノ三二
かとり……加藤吾作……二ノ五九
かとり……加藤三郎兵衛……三ノ七八
かとり……加藤四郎左衛門……一ノ一一　二ノ一一
かとり……加藤太兵衛……二ノ六〇
かとり……加藤民吉……二ノ五八
かとり……加藤長壽……三ノ一五
かとり……加藤唐三郎……二ノ六一

かさう……加藤友太郎……二ノ八五
かさう……加藤仁兵衛……二ノ六〇
かなかは……金川計七……三ノ六二
かなけしゐんけい金鼠春慶……二ノ四八
かなや……金谷焼……二ノ六五
かねしげ……金重羽介……三ノ五三
かねしげ……金重利吉……三ノ五二
かねしげ……金重彦左衛門……三ノ五三
かねしげ……金重栂太郎……三ノ五二
かはた……川田平佐……四ノ四三
かははら……川原源助……四ノ三七
かははら……川原十左衛門……四ノ三八
かははら……川原林太郎……四ノ三八
かはむら……河村又助……二ノ八
かはもと……川本午助……二ノ五九
かはもと……川本作助……二ノ五九
かはもと……川本樹吉……二ノ五九
かひんしりう……河濱支流……一ノ九八 三ノ七一
かへいじ……嘉平治……四ノ一四
かまど……竈……一ノ一〇
かまもとほんけ……窯元本家……三ノ五〇
かまや……釜屋窯……三ノ二七
かみたちくい……上立杭窯……三ノ二六
かめすけ……亀祐……一ノ九三 一ノ一一六
かめやま……亀山焼……四ノ二七
かもあし……鴨脚……三ノ四〇
かもあし……鴨脚膚……三ノ四〇
かやはら……榧原山……三ノ四六 三ノ四七
からつ……唐津焼……一ノ七 四ノ三
からみね……韓峰……三ノ六六
からめつち……瑚土……一ノ二二 一ノ四〇
からもの……唐物……二ノ一二
かんりん……閑雲……四ノ五三
かんかりひら……上幸平……四ノ三
かんきやらたう……成鏡道……四ノ七〇
かんきよ……閑居……一ノ五六
かんざん……幹山傳七……一ノ八七
かんしち……勘七……三ノ六七
かんじゆ……含珠焼……四ノ二八
かんろく……勘六……三ノ五四

きノ部

きいらぼ……黄伊羅保……四ノ五七
きりかん……休閑……二ノ一一二
きりきりりん……九々鱗……一ノ九二
きりさい……休齋……二ノ一〇〇
きりせつ……休雪……三ノ六七
きりべえ……久兵衛……一ノ七四
きえもん……喜右衛門……四ノ一四
きざん……奇山……二ノ五五
きしう……紀州焼……三ノ七〇
きしでんざう……岸傳藏……二ノ一一三
きせと……黄瀬戸……二ノ二五
きた……紀太岩之亟……三ノ七七

きた……紀太作兵衛……三ノ七七
きた……紀太理兵衛……三ノ七七
きたがま……北窯……三ノ四六
きたこうぢ……北小路又左衛門……四ノ三二
きちえもん……吉右衛門……二ノ六七
きちざり……吉三……三ノ六七
きちざえもん……吉左衛門……一ノ五一　一ノ六八　一ノ一〇九
きちざえもん……吉左衛門……二ノ五七
きちべえ……吉兵衛……一ノ七八
きちろく……吉六燒……二ノ二〇
きつかり……吉向燒……一ノ一一六　二ノ八二
きてい……龜亭……一ノ八六
きいびやう……急病……四ノ四八
きへいじ……喜平次……四ノ八　四ノ一四
きむら……木村嘉右衛門……三ノ五五
きむら……木村龜吉……三ノ五三
きむら……木村勘七……三ノ五五
きむら……木村儀三郎……三ノ五二　三ノ五六
きむら……木村作十郎……三ノ五六
きむら……木村庄八……二ノ四七
きむら……木村新七郎……三ノ五二
きむら……木村勘七……三ノ五五
きむら……木村清右衛門……三ノ五二
きむら……木村長左衛門……三ノ五〇
きむら……木村長十郎……三ノ五二
きむら……木村長次郎……三ノ五二
きむら……木村忠兵衛……三ノ五三
きむら……木村重右衛門……三ノ五一
きむら……木村鐵次郎……三ノ五二
きむら……木村虎次郎……三ノ五三
きむら……木村彦兵衛……三ノ五二
きむら……木村平八……三ノ五六
きむら……木村平八郎……三ノ五二
きむら……木村彌兵衛……三ノ五一
きむら……木村與助……三ノ五一
きむら……木村杢助……三ノ五〇
きむら……木村森治……三ノ五一
きむら……木村茂六……三ノ五二
きもり……木守……一ノ五四
きやう……姜氏……四ノ四〇
きやう……姜早丹……四ノ四五
ぎやうき……行基燒……一ノ七
きやうげんばかま狂言袴……一ノ六四　四ノ六六
ぎやうさん……堯山燒……一ノ一〇八
きやうじやう……經正……一ノ四八
きやうやき……京燒……一ノ七八
きやさへえ……木屋佐兵衛……一ノ九二
ぎよくほう……玉峯……四ノ四五
きよくわん……巨關……四ノ二六
きよみづ……清水燒……一ノ八一　一ノ八二
きよみづ……清水六兵衛……一ノ八八
きりいと……切糸……一ノ三〇
きりごき……錐五器……四ノ六四
きん……金氏……四ノ四〇

きんかい……金海……四ノ七〇
きんかま……キンカマ……一ノ四六
きんくらう……金九郎……二ノ六七
きんくわりざん…錦光山……一ノ九一
きんくわりざん…錦光山宗兵衛……一ノ九六
きんくわざん……金華山……二ノ三〇
二ノ一〇七
きんぎぶらう……金三郎……一ノ一〇八
きんしこう……金子恒……二ノ六九
ぎんじらう……吟次郎……三ノ二六
きんたらう……金太郎焼……三ノ二二

く　ノ　部

くうちゆう……空中……一ノ七一
くうちゆう……空中信楽……二ノ九三
くき……九鬼侯……一ノ一一六
くぎがたいら焼…釘形伊羅保……四ノ五七
ぐさい……愚齋……一ノ八八
くさざ……來狹々村……一ノ五
くさつ……草津焼……二ノ一〇〇
くしで……櫛手焼……四ノ二二
くすみ……久隅守景……三ノ四
くたに……九谷焼……三ノ三
くたに……九谷陶器會社……三ノ九
くたに……九谷庄三……三ノ一三
くちはげて……口兀手……二ノ一三
くにやき……國焼……二ノ四九
くぬぎた……櫛田幸吉……三ノ七三
くぬぎた……櫛田善次郎……三ノ七三
くまもと……隈元金六……四ノ四九
くらうえもん…九郎右衛門……二ノ五四
くらりやき……九郎焼……二ノ六二
くらざき……倉崎音四郎……三ノ六九
くらざき……倉崎積兵衛……三ノ六九
くらもと……蔵元……二ノ一〇二
くろおりべ……黒機部……二ノ五三
くろさは……黒澤金太郎……三ノ二二
くろだ……黒田長政……三ノ八五
くろだ……黒田忠之……三ノ八六
くろむだ……黒牟田……四ノ一九
くろみしま……黒三島……四ノ六〇
くわいすゐえん…魁翠園焼……二ノ一〇七
くわりえつ……光悦（本阿彌）……一ノ七〇
くわりえつ……光悦樂焼……一ノ七一
くわりえつ……光悦臨窯……一ノ七一
くわりそん……光春……一ノ七七
くわりりん……光琳……一ノ七二
くわんにゆう…貫乳……二ノ三
くわんゐんちり…歡因知利……一ノ五

け　ノ　部

けいだ……慶田政太郎……四ノ四九
けいだ……慶田茂平……四ノ四九
けいにふ……慶入……一ノ五二
一ノ六八
けづりだい……削臺……一ノ三二

げん……源……四ノ五三
げんえつ……玄悦……四ノ五一
げんえつ……玄悦御本手……四ノ七一
げんえもん……源右衛門……三ノ一六
けんぎやう……檢校……一ノ五五
げんご……源吾……三ノ七五
げんざい……玄齋燒……一ノ一一〇
けんざえもん……源左衛門……三ノ六七
けんざん……乾山……一ノ七一
二ノ八〇
げんじふらう……源十郎……一ノ七八
二ノ四四
げんじふらう……源十郎……三ノ二七
二ノ一〇八
けんじやういぶり献上伊萬里……四ノ一三
けんじやうからつ献上唐津……四ノ七
けんしん……見心燒……二ノ六四
げんしん……元心……三ノ五五
げんぢ……玄治……二ノ六四
げんない……源内……三ノ七四
げんぴん……玄賓燒……二ノ六
げんべえ……源兵衛……三ノ二七
けんや……乾也燒……二ノ七九

こ ノ部

こいが……古伊賀……二ノ三
こいど……小井戸……四ノ六九
こいらほ……古伊羅保……四ノ五六
こうえふ……紅葉五器……四ノ六三
こうえふ……紅葉判事……四ノ六二
こうさく……後作……一ノ六七
こうらくえん……後樂園燒……二ノ七七
二ノ九〇
こうんくわく……古雲鶴……四ノ六六
こからつ……古唐津……四ノ四
ごき……五器……四ノ六三
こきくわん……古器觀……一ノ九二
こきち……小吉……二ノ五五
こぎつね……小狐……一ノ五八
こくたに……古九谷……三ノ四
こごろ……小黒……一ノ五八
こけい……五溪……一ノ八七
こけて……後家手……二ノ四四
こざえもん……五左衛門……二ノ七
こさつま……古薩摩……四ノ三九
こしがらき……古信樂……二ノ九三
こしき……甑……一ノ一〇
こしつち……漉土……一ノ二四
こしゆんだう……沽春堂……四ノ五四
こしよまる……御所丸……四ノ七一
こす……臭須……一ノ三六
こすぎ……小杉燒……三ノ一八
こすけ……吾助……二ノ一〇五
こせと……古瀬戸……二ノ一二
二ノ一三
こせと……小瀬戸……二ノ一三
こせんちやう……古戰場燒……二ノ七二
こそうせん……五艘船深鉢……四ノ一八
こそべ……古曾部燒……一ノ一一四

こだりさん……小道三……四ノ五一
こだりじ……小道二……四ノ五一
こたかとり……古高取……三ノ八五
こたち……古舘忠兵衛……二ノ一一五
こたんば……古丹波……三ノ二四
こて……鏝……一ノ三〇
ことう……湖東焼……二ノ九九
ことう……後藤才次郎……三ノ四
ことなひき……粉引……四ノ六八
ことなん……湖南焼……二ノ九八
こにし……小西金兵衛……一ノ一一六
こはぎ……古萩……三ノ六六
こはけめ……古刷毛目……四ノ六七
こばやし……小林梅五郎……三ノ二九
こばやし……小林熊三郎……三ノ二九
こばると……コバルト……一ノ三六
こばんこ……古萬古……二ノ七
ごはんて……御判手……四ノ四〇
ごばんや……五番屋伊助……三ノ七五
こびせん……古備前……三ノ四六 三ノ五五
こへいち……小平治……二ノ五五
こぼり……小堀遠州……一ノ一八 三ノ二五
こぼり……小堀政一……一ノ一八
ごほんて……御手本……四ノ七一
ごほんて……御本手判事……四ノ六二
こみしま……古三島……四ノ五八
ごめりがえい……御冥加永……二ノ一〇四
こもがへ……熊川……四ノ七〇
こやま……小山文三郎……二ノ一一五
こよみて……暦手……四ノ五八
ごらくやき……五郎焼……二ノ七一
ごろしち……五郎七……四ノ一九
ころもがは……衣川……四ノ五四
こんじやう……紺青……一ノ三七
こんどう……近藤陶吉郎……二ノ一一二
こんどう……近藤陶助……二ノ一一二
ごんべえ……權兵衛焼……三ノ三一

さ　ノ　部

さい……崔氏……四ノ四〇
さいせきざん……采石山焼……一ノ九九
さいべえ……才兵衛……四ノ三二
ざいめいひん……在名品……三ノ六八
さうしやう……双松……二ノ一一四
さうせんてい……相鮮亭一斎……三ノ一二
さうは……走波……四ノ二五
さうま……相馬焼……二ノ一一一
さうま……相馬義胤……二ノ一一一
さうま……相馬瓜形……二ノ一一一
さうろく……蔵六……一ノ八九
さか……坂助八忠季……三ノ六
さか……坂新兵衛忠順……三ノ六六
さか……坂新兵衛忠方……三ノ六六
さが……坂助八忠喜……三ノ六六

さか……坂新兵衛忠清……三ノ六六
さか……坂助八忠之……三ノ六六
さか……坂新兵衛忠陶……三ノ六六
さか……坂道介……三ノ六六
さかくら……坂倉嘉助……三ノ六九
さかくら……坂倉多吉……三ノ六九
さかたる……酒垂……一ノ一〇
さかづ……酒津焼……三ノ六一
さかつぼ……酒壺……一ノ一〇
さがやき……嵯峨焼……一ノ一〇一
さかろ……坂井焼……三ノ一
さかろ……堺春慶……二ノ四八
さかろだ……酒井田柿右衛門……四ノ一九
さくね……作根辨次郎……二ノ七九
さくまたいみ……昔麻帝彌……一ノ六
ささき……佐々木二六……三ノ八〇
ささじま……笹島焼……二ノ七一
ささけ……佐介……二ノ六七
さつまやき……薩摩焼……四ノ三九
さとう……佐藤伊兵衛……二ノ一八
さどやき……佐渡焼……三ノ二二
さにふ……左入……一ノ五二／一ノ六五
さのけんざん……佐野乾山……一ノ七三
さへえ……佐兵衛……一ノ六四
さへき……佐伯孫九郎……二ノ一一八
さま……左馬……二ノ一一二
さめはだ……鮫肌焼……四ノ三七
さめやき……鮫焼……二ノ六九
さや……鞘……一ノ二七
さらけ……皿……一ノ九
さらさ……サラサ……一ノ三七
さらぬは……沙羅樹……二ノ三四
さらめきるど……サラメキ井戸……四ノ五六／四ノ六八
さんいう……藍釉……一ノ三八
さんくわり……三光……二ノ七〇
さんさい……三齋公……三ノ九六
さんじつこくふね三十石船……一ノ二五
さんじやくいた……三尺板……一ノ三一
さんだ……三田焼……一ノ一一五
さんだいとうしらう三代藤四郎……二ノ三〇
さんねいざか……産寧坂……一ノ八三
さんぺい……三平……三ノ七二
さんぼうじ……三保磁……四ノ一四
さんもじや……三文字屋九左衛門……一ノ九〇

し　ノ　部

しが……志賀焼……四ノ五一
しがらき……信樂焼……二ノ九二
しげはる……繁春……三ノ六
しし……獅子……一ノ六二
しするけんざん……紫翠乾山……一ノ七二
しぜんさい……自然齋……二ノ九九
しだ……志田窯……四ノ二三
しづたに……閑谷焼……三ノ五九

しづはた……殿機焼……二ノ七五
しでばら……志手原焼……一ノ一一六
しど……志度焼……三ノ七四
じとくさい……自得齋……三ノ九五
しどろ……志戸呂焼……二ノ七四
しのはら……篠原能孝……二ノ八四
しのやき……志野焼……一ノ五一
しばた……新發田焼……三ノ二〇
しはんこ……シハンコ……一ノ三九
しぶかみて……渋紙手……二ノ三四／二ノ三六
しぶくさ……渋草焼……二ノ一〇八
しぶのすけ……渋之助……四ノ二〇
じふわり……十五……一ノ五八
しほけ……鹽筍……一ノ五八
しほづき……鹽月来治……四ノ三五
しまだ……島田愛造……三ノ六二
しまづ……島津義弘……四ノ三九／四ノ四一
しまづ……島津齊宣……四ノ四二
しまや……島屋平助……二ノ九九
しみづ……清水寛造……一ノ一一五
しみづ……清水平七……二ノ一〇六
しみづ……清水長右衛門……三ノ二六
しみづ……清水鶴吉……三ノ二六
しもたちくい……下立杭窯……三ノ二六
じもじも……ジモジモ……四ノ六二
しや……車氏……四ノ四〇
しやうあん……松庵……三ノ六九
しやうい……正意……二ノ四三／一ノ七七
しやうりん……祥雲……一ノ八八
じやうけい……常慶……一ノ五一／一ノ五九
しやうこうさい……湘江齊……三ノ七六
しやうこさい……尚古齋……一ノ一〇〇
しやうざう……莊三……三ノ六
しやうざう……正三焼……二ノ六四
しやうざん……松山……三ノ七五
しやうしん……松眞……三ノ七六
しやうのすけ……庄之助……三ノ三二
じやくさう……寂窓……一ノ一〇一
しやうふうてい……松風亭空中……一ノ八五
しやうりん……祥麟……一ノ八九
じやかつ……蛇褐……二ノ一六／四ノ四四
じやうはな……城端焼……三ノ一八
しやぢく……車軸……二ノ二四
しやなべ……沙鍋……一ノ一〇九
じやのめ……蛇の目……一ノ二八
しゆ……朱氏……四ノ四〇
じゆかん……壽閑……三ノ一五
じゆくがき……熟柿……一ノ六七
しゆでい……朱泥焼……三ノ四二
じゆもんだう……壽門堂保平……二ノ七〇
じゆらくだい……聚樂第……一ノ六〇
しゆんぎやう……春曉……二ノ五三
しゆんけい……春慶……二ノ一六／二ノ四六
しゆんざん……春山……二ノ五三

しゆんせん……春仙……二ノ五三
しゆんたい……春岱……二ノ五三
しゆんぱく……俊伯……二ノ六六
しよんずゐ……祥瑞……一ノ一三 四ノ一〇
しらいし……白石窯……四ノ二五
しらかは……白河……四ノ三
しらゐ……白井半七……二ノ七八 二ノ七九
しらゐ……白井作右衛門……二ノ七九
しりふくら……尻膨……二ノ一九
しろぐすりで……白薬様……二ノ一〇三
しろさゞもん……四郎左衛門景延……二ノ一〇三
しろさつま……白薩摩……四ノ四三
じろざいふ……次郎太夫……二ノ一
しろでやき……白手焼……四ノ二〇
じろばり……次郎坊……一ノ五八
じろべえ……次郎兵衛……三ノ四二
しろやきあひづ……白焼会津……二ノ一一三
しん……仲氏……四ノ四〇
じんあみ……仁阿彌……一ノ八五
しんえもん……新右衛門（景重）……二ノ四一
しんえもん……新右衛門（重徳）……二ノ五四
しんぐみ……新組七種……一ノ五六
しんくらら……新九郎……三ノ八五
しんげつけん……新月軒……二ノ一一四
しんげんつぼ……信玄壺……二ノ九四
しんごろ……ジンゴロ……一ノ二八
しんじらら……新次郎……二ノ三
じんたらら……甚太郎……三ノ一八
しんはんす……眞判事……四ノ六二
しんべえ……新兵衛……一ノ七六
しんべえ……新兵衛……二ノ六七
しんべえ……新兵衛信樂……二ノ九三

す　ノ　部

すえのりちんど……陶内人……二ノ五
すえのむら……陶邑……一ノ二
すえもの……陶器……一ノ二
すがめ……酢瓶……一ノ一〇
すぎなり……杉形判事……四ノ六二
すぎなり……杉形五器……四ノ六四
すぎもと……杉本丈助……三ノ七八
すぎやま……杉山三右衛門……二ノ六四
すずき……鈴木保兵衛……二ノ八六
すずはく……煤箔……一ノ四四
すずまる……鈴丸焼……三ノ七
すずまる……鈴丸十次郎……三ノ七〇
すずめがたに……雀ヶ谷……二ノ九七
すぢはけめ……筋刷毛目……四ノ六七
すま……須磨焼……三ノ四〇 三ノ四三
すみえもん……住右衛門……三ノ三二
すやき……素焼……一ノ三三
すゑがめ……吸瓶……一ノ二四
すゑさか……吸坂……三ノ四
ずゐし……瑞芝焼……三ノ七〇

すゐてき……水滴……二ノ二一
すゐひ……水飛……一ノ二五
すんころく……寸古祿……四ノ四一

せ　ノ　部

せいさい……靜齋……一ノ八八
せいざえもん……清左衛門……三ノ四三
せいざぶらう……清三郎……三ノ五四
せいざん……清山……一ノ八七
せいじゅ……清壽……四ノ五四
せいじらう……清次郎……三ノ五四
せいふう……清風與平……一ノ八六
せいべえ……清兵衛……一ノ九九
せいわりだう……清王堂……三ノ三四
せりおり……組鳴信樂……二ノ九三
せりだい……小代燒……四ノ三二
せりのつき……小杯……一ノ一〇
せかい……青磁……四ノ六五
せきしりふり……石州風……三ノ三六
せきせん……石仙……二ノ一〇六
せぜやき……膳所燒……二ノ九五
せたやき……瀨田燒……二ノ九七
せとからつ……瀨戸唐津……四ノ五
せとじつさく……瀨戸十作……二ノ六六
せとしゅんけい……瀨戸春慶……二ノ四九
せとしんせい……瀨戸新製……二ノ五六
せとやき……瀨戸燒……一ノ一一／二ノ一〇
せところくさく……瀨戸六作……二ノ六六
せんきち……千吉……三ノ七六
せんくらう……善九郎……二ノ五四
ぜんさく……前作……一ノ六七
ぜんしらう……善四郎……三ノ三二／三ノ三三
せんのりきう……千利休……一ノ一五
せんべて……煎餅手……二ノ一六
ぜんろく……善六……三ノ三四

そ　ノ　部

そうきち……宗吉……一ノ六六
そうけい……宗慶……一ノ五〇／一ノ五九
そうげん……宗玄燒……二ノ六三
そうざぶらう……宗三郎……一ノ一〇三
そうしち……宗七燒……三ノ八八
そうしらう……惣四郎……二ノ五五
そうしらう……宗四郎……三ノ五五
そうたい……宗岱……一ノ六六
そうたん……宗旦信樂……二ノ九三
そうにふ……宗入……一ノ五一／一ノ六五
そうはく……宗伯……一ノ七七／二ノ四二
そうはく……宗伯……三ノ五四
そうべえ……宗兵衛……二ノ六七
そうみ……宗味……一ノ七四
そえもん……曾右衛門……二ノ五五
そせんだう……染仙堂……二ノ七一

そたにはくあん……曾谷伯庵……二ノ二五
そとがま……外窯……一ノ四七
そばぢど……蕎麥井戸……四ノ六九
そばかす……蕎麥糟……四ノ六九
そほくわい……祖母懐……二ノ三七
そめつけ……染付燒……二ノ五九
そんかい……尊楷……四ノ三〇

た　ノ　部

たいが……大雅……二ノ一〇六
たいかい……大海……二ノ一九
たいこ……太鼓……二ノ二三
たいこく……大黒……一ノ五三
たいざん……帶山與兵衛……一ノ九四
たいしだう……太子堂燒……三ノ一九
たいしゆう……對州燒……四ノ五一
たいす……臺子……二ノ一九
たいとくじ……大德寺五器……四ノ六三
たいのさら……大盤……一ノ一〇
たいのつばき……大椿……一ノ一〇
たいのやまつばき大山椿……一ノ一〇
たいめりもの……大名物……二ノ一六
たうげん……道元禪師……二ノ一一
たうじのせいはふ陶磁の製法……一ノ二二
とうせつ……陶說……一ノ九二
たうにふ……道入……一ノ五一／一ノ五九
たうはち……道八……一ノ八五
たうみ……道味……一ノ七八
たうらく……道樂……一ノ七三
たおも……田面……二ノ四五
たかう……田香燒……三ノ九五
たかおか……高岡燒……三ノ一八
たかがみね……鷹ヶ峰……一ノ四八
たかつ……高津燒……一ノ一一三
たかとり……高取燒……三ノ八五
たかはし……高橋道八……一ノ八四
たかはし……高橋八郎太夫……一ノ八五
たかはし……高橋春齋……二ノ九三
たかはら……高原燒……一ノ一一三
たかまつ……高松燒……三ノ七四
たく……多久長門守……四ノ一一
たくしら……手抉……一ノ二
たけうち……竹內吟秋……三ノ一二
たけがは……竹川竹齋……二ノ八
たけかべ……竹加部燒……三ノ四四
たけだや……竹田屋伊八……三ノ二九
たけもと……竹本隼太……二ノ八四
たざえもん……太左衛門……三ノ五五
たしらか……多志羅加……一ノ一〇
たしろ……田代五郎左衛門……二ノ一一
たしろ……田代法橋……二ノ一一
たしろ……田代半次郎……四ノ一四
たた……多田三郎……三ノ三七
たたなべ……叩鉦……一ノ一〇

たち……駄知……二ノ一〇五
たちみ……多治見村……二ノ一〇五
たづち……田土……三ノ五六
たつのいち……辰之市……二ノ一七
たつのはら……龍の原焼……四ノ三二
たつもんじ……龍門司焼……四ノ三六
たての……竪野窯……四ノ四二
たないた……棚板……一ノ二八
たなか……田中利右衛門……一ノ一一六
たなか……田中友三郎……二ノ九〇
たにる……谷井直方……二ノ九三
たはら……田原焼……一ノ一〇六
たはら……田原謙治……三ノ六九
たへい……太平……四ノ五一
たへえ……太兵衛……一ノ七四
たまがしは……玉柏……二ノ三二
たまはり……玉椀……一ノ二
たみさち……民吉……二ノ五八
たむら……田村窯……三ノ七
たむら……田村權左衛門……三ノ四 三ノ七
たむら……田村甚三郎……三ノ三〇
たもらえもん……太郎右衛門……四ノ八
たろすけ……太郎助焼……三ノ九六
たろだいふ……太郎太夫……二ノ一
たろうぼう……太郎坊……一ノ五八
たんざん……丹山陸郎……一ノ九七
たんにふ……旦入……一ノ五二 一ノ六八
たんば……丹波焼……三ノ二四
たんれい……探嶺……二ノ五六

ち　ノ　部

ちくごのあさひ……筑後の朝日焼……二ノ一〇四
ちくぜん……筑前焼……三ノ八七
ちくらいし……千倉石……一ノ二六
ちさぶらう……治三郎……三ノ二九
ちどり……千鳥……一ノ六二
ちへえ……治兵衛……一ノ一〇七 一ノ一一七
ちへえ……治兵衛……二ノ六七
ちやうえもん……長右衛門……三ノ二六
ちやうざえもん……長左衛門……三ノ一四
ちやうしち……丈七焼……三ノ七三
ちやうじふ……長十……二ノ六六
ちやうじらう……長次郎……一ノ五一
ちやうじらう……長次郎七種……一ノ五三
ちやうすけ……長祐……一ノ五〇 一ノ五一 一ノ五二
ちやうすや……茶臼屋焼……一ノ七八 二ノ四三
ちやうにふ……長入……一ノ五一 一ノ六六
ちやうはち……丈八……二ノ六七
ちやうわん……知也字和无……一ノ八
ちやぶかや……茶深屋……一ノ七八
ちやわん……知也和无……一ノ八
ちやわんざか……茶碗坂……一ノ四八 一ノ八二
ちやわんや……茶碗屋久兵衛……一ノ八二 一ノ八四
ちゆうざえもん……忠左衛門……一ノ七三

ちゆうさく……中作……一ノ六七
ちゆうでう……中條市太郎……二ノ七九
ちゆうべゑ……重兵衛……二ノ五四
ちゆうべえ……忠兵衛……三ノ六七
ちゆうべゑ……忠兵衛……四ノ三一
ちよえん……如猿……四ノ二六
ちん……陳氏……四ノ四〇
ちんげんぴん……陳元贇……二ノ六〇
ちんじゆくわん……沈壽官……四ノ四六
ちんどり……陳取禁止の札……三ノ四九

つ ノ 部

つおね……津金文左衛門……二ノ五七
つかほりいらほ……塚堀伊羅保……四ノ五八
つかもと……塚本源左衛門……二ノ一〇六
つく……ツク……一ノ二八
つくりぬけ……作り抜け……一ノ二九
つぢ……辻勝藏……四ノ一五
つぢ……辻喜右衛門……四ノ一四
つちたひら……槌……一ノ一〇
つちや……土屋善四郎……三ノ三三
つねのごき……常の五器……四ノ六五
つねのてうせん……常の朝鮮判事……四ノ六二
つのくら……角倉爲四郎……一ノ一〇一
つのみしま……角三島……四ノ六〇
つんぼよね……聾米……一ノ九二

て ノ 部

てい……鄭氏……四ノ四〇
でいすけ……泥介……三ノ六七
てうせん……朝鮮燒……三ノ四二
てうせんいらほ……朝鮮伊羅保……四ノ五七
てうせんからつ……朝鮮唐津……四ノ六
てうせんせいばつ……朝鮮征伐……一ノ一六
てしろき……手代木幸右衛門……二ノ一一三
てづか……手塚勉之助……四ノ一五
てつくね……テックネ……一ノ三
てふさ……帖佐燒……四ノ三六
てゆのはとき……手湯盞……一ノ一〇
てらをか……寺岡儀次郎……三ノ四二
てらをか……寺岡源次郎……三ノ四二
てらみ……寺見嘉右衛門……三ノ五一
てらみ……寺見松三郎……三ノ五三
でんたらう……傳太郎……三ノ三四
てんさこしゆいん……傳馬御朱印……二ノ七四

と ノ 部

とうきのしやう……陶器症……一ノ一一〇
どうきき……胴木間……一ノ三四
とうきやうえつけ……東京繪付……二ノ八五
とうくらう……藤九郎……三ノ四二
とうごう……東鄉壽勝……四ノ四九
とうごべんぎう……藤五辨蔵……一ノ六〇
とうざう……藤造……三ノ七五

とうさい……董齋……二ノ六九
とうざん……東山燒……三ノ三八
とうしらう……藤四郎……一ノ一一二／二ノ一〇／二ノ二四／二ノ三〇
とうしらう……藤四郎……二ノ三四
とうしらう……藤四郎春慶……二ノ二六
とうぜん……陶然……二ノ六九／二ノ七〇
とうだかて……胴高手……二ノ二一
とうだいが……藤堂伊賀……二ノ二
どうばんやき……銅版燒……二ノ七一
とうべえ……藤兵衛……二ノ五四
とうやうぼう……東陽坊……一ノ五三
とくがは……徳川齋順……三ノ七〇
とくぎん……德山燒……二ノ八一
とくにふ……得入……一ノ五二／一ノ六六
とくぼん……德本……四ノ五一
ととなべ……常滑燒……二ノ六九
とこやま……床山燒……二ノ九九
としらう……兎四郎……二ノ三一
とだ……戸田柳造……二ノ一〇八
ととき……十時孫左衛門……三ノ九三
ととや……トヽヤ……四ノ六
とはん……吐盤……一ノ一〇
とべ……砥部燒……三ノ七八
とほやまて……遠山手……二ノ四三
とみたらう……富太郎赤水……三ノ二三
とみたきんざん……富田金山……三ノ七五
ともざり……友三……三ノ六
ともじふ……友十……二ノ六七
とやねいし……鳥屋根石……二ノ一〇五
とやまやき……外山燒……二ノ六〇
とよすけ……豐助燒……二ノ六八
とよた……豐田藤之進……二ノ一〇八
とよのすけ……豐之助……三ノ七二
ところすき……等呂須岐……一ノ一〇
とんぐり……頓宮三郎兵衛……三ノ五一
とんぐり……頓宮眞吉……三ノ五一
とんぐり……頓宮治右衛門……三ノ五三
どんたらう……鈍太郎……一ノ六四

な ノ部

ないかい……內海茶入……二ノ二〇
なかお……中尾直七郎……三ノ四四
なかおか……長岡住右衛門……三ノ三二
ながさき……長崎幸齋……二ノ九九
なかたる……中樽……四ノ三
なかの……中野燒……三ノ八八
なかのはら……中野原……四ノ三
ながはら……長原……四ノ三
ながみ……永見房藏……三ノ三六
なす……茄子……二ノ一八
なつやま……夏山……二ノ二八
なべしま……鍋島磁器……四ノ二二
なほさく……直作……三ノ二七

なめりあすあかは滑飛鳥川……二ノ三二
なりは……成羽焼……二ノ六二
なるせ……成瀬誠志……二ノ八四
なるみて……鳴海手……二ノ四四
なるみやき……鳴海焼……二ノ五三
なんかい……南海……四ノ五四
なんぶう……南郷嘉平……四ノ一四
なんがはら……南河原窯……四ノ一九
なんきん……南京焼……四ノ二四
なんざん……南山焼……一ノ七二
なんば……難波焼……一ノ一一三

に　ノ　部

にざえもん……仁左衛門……二ノ五五
にしかはや……西川屋茂平……二ノ一〇五
にしきで……錦樣……四ノ四二
にしじんまち……西新町……三ノ八八
にしむら……西村宗印……一ノ九七
にしむら……西村圓治……二ノ一〇五
にしむら……西村音助……三ノ四一
にないとうしらう二代藤四郎……二ノ二四
にちあん……日庵……二ノ六三
にちぎ……日義……二ノ六五
にちゆりひひ……二重鶯……四ノ四〇
にふたりざん……入唐山……三ノ六六
にふのへ……乳戸……一ノ一一
にへえ……仁兵衛……二ノ五五
にへのはしべ……賀土師部……一ノ五
にほんまつ……二本松焼……二ノ一一四
にろく……二六焼……三ノ八〇
にんぎやうや……人形屋幸右衛門……一ノ一〇三
にんせい……仁清……一ノ四九、一ノ七八
にんせい……仁清……一ノ七九、一ノ八三
にんせい……仁清……一ノ九一
にんせい……仁清信樂……二ノ九三
にんどさい……任土齋……一ノ七四

ぬ　ノ　部

ぬえ……鵺……一ノ六三
ぬまなみ……沼波五左衛門……二ノ七、二ノ七七
ぬまなみ……沼波五左衛門……二ノ八三
ぬめともがへ……滑熊川……四ノ七〇
ぬめりいらほ……ヌメリ伊羅保……四ノ五八
ぬりつち……塗土……一ノ三七

ね　ノ　部

ねぎし……根岸仙三郎……二ノ八九
ねぢぬき……捻貫……二ノ三五
ねぬけ……根抜……二ノ一五
ねぬけ……根抜……四ノ四
ねんしん……念心……三ノ五五

の　ノ　部

のしろこ……苗代川……四ノ四〇、四ノ四一

のだ……野田又七……四ノ三二
のだ……野田庄太郎……三ノ三六
のだ……野田元藏……三ノ三六
のだて……野田手……二ノ二八
のちとものがへ……後熊川……三ノ七
ののむら……野々村仁清……一ノ四九／一ノ七八
のびおか……延岡燒……四ノ三五
のみ……能美平左衛門……三ノ六九
のみのすくね……野見宿禰……一ノ四／三ノ四五
のんとう……ノンコウ……一ノ五一／一ノ五九
のんとう……ノンコウ……一ノ六一
のんとう……ノンコウ七種……一ノ六二

は ノ部

はい……灰……一ノ二五
はいけい……梅溪……一ノ八七
はいひん……梅賓……一ノ八六
はいりん……梅林燒……二ノ九六
はうくわり……芳光……四ノ四五
はうこくしや……芳國社……二ノ一〇八
はうじゆ……芳壽……四ノ四五
はうずて……坊主手……二ノ四二
はうちゆう……芳仲……四ノ三七
はうへい……芳平……四ノ四五
はぎ……萩燒……三ノ六五
はぎやま……萩山燒……二ノ六一
はく……白氏……四ノ四〇
はくあん……伯庵……二ノ二五
はくじゆ……白壽院……二ノ六三
はくち……ハクチ……一ノ四七
はけめ……刷毛目……三ノ三八／四ノ六七
はこすえるのゝつかさ窯陶司……一ノ六
はこつぼ……筥坏……一ノ一〇
はざまあな……挾間穴……一ノ三四
はじ……土師……二ノ五
はじ……土師長左衛門……三ノ一四
はじかはらけ……土師御器……二ノ六
はじしよく……土師職……一ノ四／三ノ四五
はじのあけ……土師阿筍……一ノ五
はじのさと……土師鄉……一ノ四／三ノ四五
はじのひれ……土師鰭……一ノ六四
はしば……羽柴筑前守……三ノ四九
はしひめて……橋姫手……二ノ二八
はしもと……橋本忠平……二ノ九
はせ……長谷六右衛門……三ノ二八
はせ……長谷要藏……三ノ二八
はせがは……長谷川半七……二ノ一〇六
はた……畠源十郎……三ノ二七
はた……畠源兵衛……三ノ二七
はち……鉢……一ノ一〇
はちざう……八藏……三ノ八五／三ノ八六
はちのこ……鉢の子……一ノ五八
はちひらき……鉢開……一ノ五三
はちべえ……八兵衛……二ノ六九

はちらうえもん……八郎右衛門……三ノ八六
はちらうじ……八郎二……二ノ六七
はちらうゑ……八郎絵金襴手……三ノ七
はつた……八田玄齋……一ノ二〇
はつとり……服部十左衛門……二ノ七
はつとり……服部平四郎……三ノ五六
はつとり……服部昇平……三ノ五六
はづみて……却舎手……二ノ四八
はなとうしらう……花藤四郎……二ノ二七
はなみしま……花三島……四ノ五九
はに……埴……一ノ二
はにふ……埴生焼……三ノ一八
はにやす……埴安……一ノ二
はにわ……埴輪……一ノ四
はひつき……間杯……一ノ一〇
はふがま……破風窯……二ノ三四
はふで……破風手……二ノ三七
はまさか……濱坂焼……三ノ二九
はやし……林半六……三ノ六八
はやふね……早船……一ノ五四
はら……原隆治……三ノ一九
はり……針……一ノ二八
はりつ……破笠……二ノ八〇
はんがや……半谷順之助……二ノ一一二
はんこ……範古……四ノ五三
はんこ……萬古焼……二ノ七
はんしち……半七……二ノ六七
ばんしやうごき……番匠五器……四ノ六五
ばんす……判事……四ノ六〇
はんす……判事三島……四ノ六
はんす……判事五器……四ノ六五
はんや……八田焙烙……一ノ一一一
はんどう……飯銅……二ノ二三
はんろく……半六……三ノ三二

ひノ部

ひえこば……稗古場……四ノ三
ひがき……ヒガキ井……四ノ一八
ひがき……檜垣……四ノ七〇
ひがきみしま……檜垣三島……四ノ六〇
ひがしがま……東窯……三ノ四六
ひがしじま……東島徳左衛門……四ノ一三 四ノ二〇
ひがしやま……東山焼……一ノ九九
ひきぎのさや……挽木の鞘……一ノ六四
ひぐち……樋口親治……四ノ二四 四ノ二八
ひこえもん……彦右衛門……三ノ一八
ひこくらう……彦九郎……二ノ五五
ひこさつま……肥後薩摩……四ノ三一
ひこさぶらう……彦三郎……三ノ五四
ひさとみ……久富與次兵衛……四ノ一四
ひさの……久野正伯……三ノ八二
ひじり……聖……一ノ五八
びぜん……備前焼……三ノ四六 三ノ四七
びぜん……備前六姓……三ノ四九

ひぜん……備前陶器株式會社　三ノ五八
ひだずき……火襷……二ノ六九　三ノ四七
ひたちおび……常陸帶……二ノ二〇
ひのつき……斐坏……一ノ一一
ひま……火間……二ノ一
ひめぢ……姫路燒……三ノ三八
ひめつき……短女坏……二ノ六三
ひら……比良燒……二ノ九六
ひらお……平尾燒……二ノ六三
ひらか……毘良迦……一ノ二
ひらが……平賀源内……三ノ七四
ひらさ……平佐燒……四ノ四三
ひらさは……平澤清九郎……二ノ六二
ひらど……平戸燒……四ノ二六
ひらまつ……平松嘉市……三ノ六三
ひらゐがめ……平瓶……一ノ一〇
ひらゐなべ……平鍋……一ノ一〇
ひるがんど……晝眼盜……一ノ六四
ひろさはて……廣澤手……二ノ三三
ひろせ……廣瀬窯……四ノ一九
ひろだい……廣臺の耳付……三ノ二五
ひんそう……貧僧……一ノ五八

ふノ部

ふ……膚氏……四ノ四〇
ふりぞり……風造燒……二ノ六三
ふかがは……深川榮左衛門……四ノ一五
ふかがは……深川燒……三ノ六九
ふかくさ……深草……一ノ四八
ふかみ……深海乙吉……四ノ一四
ふかみ……深海新太郎……四ノ一二
ふかみ……深海墨之助……四ノ一五
ふくしま……福島政兵衛……二ノ七七
ふくやま……福山燒……三ノ九七
ふしな……婦志奈燒……三ノ三三
ふしみ……伏見燒……一ノ一〇三
ふしみ……伏見人形……一ノ一〇三
ふしみ……俯見……一ノ五
ふさざり……房造……三ノ三七
ふじみ……不二見燒……二ノ七二
ふたぎ……双木佐七……二ノ八八
ふたぎ……双木清十……二ノ八八
ふだば……札場燒……三ノ一
ふだば……札場嘉兵衛……三ノ一
ふち……淵孫左衛門……四ノ二四
ふぢえ……藤江永孝……三ノ五八
ふぢかけ……藤掛八十城……三ノ八
ふぢかた……藤形村……一ノ五
ふぢゐ……藤井清左衛門……三ノ四三
ふなき……船木與次兵衛……三ノ三三
ふなき……船木新藏……三ノ三三
ふなき……船木覺三郎……三ノ三三
ふなき……船木健右衛門……三ノ三三
ふまい……不味……三ノ三二　三ノ三三

ふらうざん……不老山……三ノ四六 三ノ四七
ふるた……古田織部正……二ノ五二
ふるゐづち……篩土……一ノ二三
ぶんきち……文吉……二ノ七一
ぶんざん……文山燒……一ノ一〇〇
ぶんな……文茄……二ノ一九
ぶんのすけ……文之助……三ノ二七
ぶんりん……文林……二ノ一八

へノ部

へ……瓮……一ノ二
へいじがま……瓶子窯……二ノ一二
へいしらう……平四郎……三ノ五〇 三ノ五五
へうくらう……兵九郎……二ノ五五
へりたん……瓢簞……二ノ二二
へりちえん……瓢池園……二ノ八六
へきざん……碧山……三ノ六
べにつぼ……臙脂壺……三ノ二六
べべらぐち……ベベラ口……四ノ五七
べん……卞氏……四ノ四〇

ほノ部

ほうざん……寶山文藏……一ノ九六
ほうらく……豐樂燒……二ノ六八
ほうりん……鳳林……一ノ六三
ほかを……外尾窯……四ノ一八
ぼく……朴氏……四ノ四〇
ぼくとうよう……朴與用……四ノ四一
ぼくさい……朴齋……二ノ七一
ぼくそのほとぎ……爐瓮……一ノ九
ほしな……保科謙吉……三ノ二〇
ほしの……星野燒……三ノ九二
ほじふ……甫十……四ノ四四
ほしやま……星山加入……四ノ四二
ほせう……甫紹……三ノ九五
ほそえ……細江三郎右衛門……二ノ一〇八
ほそかは……細川忠興……三ノ九三
ほねみしま……骨三島……四ノ六〇
ほのぼの……ホノボノ燒……三ノ三八
ほり……堀友直……二ノ八
ほりこみざいく……掘込細工……三ノ八〇
ほりだしからつ……掘出唐津……四ノ七
ほりだして……掘出手……二ノ一四
ほりみしま……彫三島……四ノ五九
ほんあみ……本阿彌光悅……一ノ七〇
ほんいらぼ……本伊羅保……四ノ五六

まノ部

まきやま……槇山窯……二ノ二
まくいん……幕印……一ノ七九
まくづ……眞葛燒……二ノ八七
まくづ……眞葛香山……二ノ八七
まござえもん……孫左衛門……三ノ九五
まとも……眞薦……一ノ五八

まさき……正木焼……二ノ六一
まさき……正木伊織……二ノ六二
まさき……正木宗三郎……二ノ六一
まさもと……正元米蔵……三ノ二六
ましみづ……眞清水藤太郎……一ノ八九
ます……升……一ノ六二
ますこ……益子焼……二ノ二〇
ますだ……益田三郎右衛門……二ノ六四
まちゆりと……眞中古……二ノ二五
まつうら……松浦助六……三ノ三〇
まつかげ……松陰新田……三ノ四二
まつかぜ……松風焼……四ノ三三
まつがたに……松ヶ谷窯……四ノ二五
まつした……松下市太郎……三ノ一三
まつだ……松田與八郎……三ノ一〇
まつだ……松田治三郎……三ノ二九
まつだ……松田和平……三ノ三〇
まつだひら……松平治郷……三ノ三二
まつもとはき……松本萩……三ノ六七
まつりのつぼ……祭壺……一ノ一〇
まなふぬ……麻奈父奴……一ノ六
まひこ……舞子焼……三ノ四〇
まへだ……前田利治……三ノ四
まやき……眞焼……二ノ六九
まるばしら……丸柱窯……二ノ一
まるやま……丸山焼……二ノ六八
まるやま……丸山焼……二ノ一〇〇
まるやま……丸山焼……三ノ一八
まるやま……圓山六郎……三ノ四二
まんえもん……萬右衛門……一ノ七八
まんえもん……萬右衛門……二　四〇
まんえもん……萬右衛門燒……二ノ四五

み　ノ　部

みうら……三浦竹泉……一ノ九〇
みうら……三浦乾也……二ノ七九
みうら……三浦哲翁……三ノ四四
みうら……三浦小平次……三ノ二三
みか……瓶……一ノ九
みかづき……三日月六兵衛……三ノ四七
みかはち……三河内窯……四ノ二五
みくに……三國茂三郎……三ノ四〇
みしま……三島手……三ノ三九　四ノ五八
みしま……三島屏……四ノ五八
みぞろ……御菩薩焼……一ノ七九
みたに……三谷林臾……三ノ七六
みたに……三谷林造……三ノ七六
みちたらう……道太郎……二ノ八一
みづがめ……水瓶……一ノ一〇
みづこし……水越與三兵衛……一ノ八四
みづしあげ……水仕上……三ノ五二
みづの……水野焼……二ノ八一
みづの……水野源左衛門……二ノ一一三
みつのまた……三つの股……四ノ三

みづほさき……水穂……一ノ一〇
みづまり……水椀……一ノ一〇〇
みなくち……水口焼……二ノ一〇〇
みなと……湊焼……一ノ一〇九
みなみかま……南窯……三ノ四六
みのやき……美濃焼……二ノ一〇三
みふち……三藤文次郎……三ノ八
みやうえ……明嘉上人……二ノ一四
みやかは……宮川香山……二ノ八七
みやじま……宮島焼……三ノ六三
みやうじやう……明星……二ノ五
みやた……宮田諒次郎……二ノ一一五
みやもと……宮本窯……三ノ八
みやもとや……宮本屋宇右衛門……三ノ八
みわ……三輪休雪……三ノ六七
みわ……三輪勘七……三ノ六七
みわ……三輪源次郎……二ノ一〇九
みわ……三輪源左衛門……三ノ六七
みわ……三輪忠兵衛……三ノ六七
みわ……三輪泥介……三ノ六七
みわ……三輪爾蔵……三ノ六七
みんぺい……琅平……三ノ七二

む　ノ　部

むかひ……向太郎助……三ノ九六
むかふ……向井保兵衛……三ノ七九
むしあけ……虫明焼……三ノ五九
むしくひ……虫喰藤四郎……二ノ三〇
むみやうい……無名異焼……三ノ二二
むらかみ……村上八兵衛……二ノ七〇
むらさきの……紫野焼……一ノ一〇〇
むらさめ……村雨……一ノ五七
むらた……村田英晤……四ノ三三

め　ノ　部

め……芽……一ノ二八
めいふう……鳴鳳……二ノ九九
めいろ……明鐘……一ノ四六
めずな……目砂……一ノ三九
めんさらず……面不取手……二ノ二九
めんさりて……面取手……二ノ二九

も　ノ　部

もえもん……茂右衛門……一ノ七七 二ノ六六
もくべい……木米……一ノ九二
もざう……筏三……四ノ五一
もざう……茂三……四ノ六二
もさく……茂作……三ノ二七
もさぶらう……茂三郎……三ノ四〇
もたひ……缶……一ノ九
もちこ……餅子……四ノ六五
もさざう……元蔵……二ノ六七
もとのて……元の手……四ノ五六
ものいみ……物忌……二ノ五
ももやま……桃山焼……一ノ一〇三

もり……森永吉……三ノ五六
もり……森嘉太郎……三ノ五一
もり……森喜四郎……三ノ五一
もり……森源左衛門……三ノ五二
もり……森五兵衛……三ノ五二　三ノ五六
もり……森甚次郎……三ノ五二　三ノ五六
もり……森武三郎……三ノ五二
もり……森武次郎……三ノ五六
もり……森武平治……三ノ五三
もり……森與十郎……三ノ五一
もりかじ……守景下畫……三ノ四
もりた……森田新兵衛……三ノ八二
もりよどえもん……森與五右衛門有節　二ノ八

や　ノ　部

やうき……陽貴……四ノ五三
やうきもん……陽貴文……一ノ六
やきつけがま……焼付窯……一ノ四七
やきつけそとがま焼付外窯……一ノ三三
やきものどしゆいん焼物御朱印……二ノ七四
やざえもん……彌左衛門……三ノ五五
やじべえ……彌次兵衛……四ノ八
やしま……八島焼……三ノ七六
やしま……屋島焼……三ノ七六
やすむら……安村淺次郎……一ノ一二
やすむら……安村善十郎……一ノ一二
やそはち……八十八……一ノ九二
やつしろ……八代焼……四ノ三〇
やつはし……八ツ橋……二ノ四四
やながは……柳川焼……三ノ九〇
やなぎさは……柳澤堯山……一ノ一〇七
やなぎはら……柳原焼……三ノ九一
やへいだ……彌平太……四ノ五一
やへえ……彌兵衛……三ノ六七
やまうち……山内伊三郎……三ノ二
やまぐち……山口勘兵衛……二ノ九〇
やまぐち……山口勘重……二ノ九〇
やまぐち……山口余延……二ノ七一
やまさき……山崎平内……三ノ八二
やまちやう……山長……三ノ二六
やまなか……山中忠右衛門……二ノ八
やまね……山根勇……三ノ六二
やまふち……山藤龜三郎……三ノ六二
やまみち……山道……二ノ四三
やまむら……山村松庵……三ノ六九
やまもと……山本音吉……三ノ四一
やまか……入鹿村……三ノ二八

ゆ　ノ　部

ゆうすけ……勇助……二ノ一〇六
ゆか……由加……一ノ九
ゆきのした……雪下春慶……二ノ四七
ゆとり……湯桶……二ノ一一
ゆふひやま……夕日山……四ノ六四

よ ノ 部

よくらう……與九郎……一ノ一〇三
一ノ一〇七
よこぐも……横雲……一ノ五八
よこた……横田彦兵衛……二ノ八九
よこはぎ……横萩徳松……三ノ二
よさぶ……夜寒焼……二ノ七二
よさべえ……與三兵衛景光……二ノ一〇三
よしだ……吉田窯……三ノ八
よしだ……吉田窯……四ノ二三
よしだ……吉田喜藤次……三ノ九三
よしだ……吉田又市……四ノ五一
よしだや……吉田屋儀右衛門……三ノ五
よじべえ……與次兵衛……三ノ三三
よだいとうしらう四代藤四郎……二ノ三四
よねはかり……米量……四ノ四
よびひ……呼火……一ノ四三
よへい……與平……一ノ八六
よへえ……與兵衛(帶山)……一ノ九四

ら ノ 部

らくさん……楽山焼……三ノ三一
らくやき……楽焼……一ノ五〇
らくやき……楽焼の印影……一ノ六九
らくらくえん……楽々園……二ノ一〇〇
らくらくけん……楽々軒……二ノ六三
らふそくて……蠟燭手……二ノ二八

り ノ 部

り……李氏……四ノ四〇
りうし……柳枝……三ノ四〇
りきう……利休焼……一ノ一五
二ノ四四
りきう……利休……一ノ五七
りきう……利休時代……一ノ七五
りきう……利休信樂……二ノ九三
りきた……力太……三ノ七二
りくはうざん……陸方山……一ノ九一
りけい……李敬……三ノ六五
りさんぺい……李参平……四ノ一一
りへい……理平……三ノ七七
りへえ……利兵衛……三ノ七一
りへえ……理兵衛焼……三ノ七六
りやういん……良印……三ノ五六
りやうこざん……菱古山……一ノ一一一
りやうざう……開蔵……三ノ六七
りやうめい……良明……三ノ五六
りようきもん……陵貴文……二ノ六
りん……林氏……四ノ四〇
四ノ四五
りんざい……臨齋……一ノ五五
一ノ六四
りんさう……林叟……三ノ七六

る ノ 部

るさ……碾茶……二ノ二四

れノ部

れうしん……了心……三ノ五五
れうにふ……了入……一ノ五二／一ノ六六
れんや……蓮也燒……二ノ六五

ろノ部

ろくえもん……六右衛門……三ノ二八
ろくぎり……六蔵……三ノ八五
ろくざん……緑山……二ノ八一
ろくべえ……六兵衛……一ノ八八
ろくべえ……六兵衛……二ノ六七
ろくろ……轆轤……一ノ三〇
ろざん……蘆山燒……二ノ六五
ろせん……魯仙……三ノ七六
ろてい……蘆跡……二ノ二〇

わノ部

わかまつ……若松燒……二ノ一一三
わかまつ……若松彌作……三ノ一〇
わかやま……若山……一ノ六三
わき……和氣龜亭……一ノ八六
わきがま……脇窯……一ノ七〇
わきがま……脇窯樂燒……一ノ七〇
わくる……清井彌瓶……二ノ一一七
わでぬる……ワグネル……二ノ八五
わたり……渡久右衛門……三ノ九
わたりいらば……渡伊羅保……四ノ五七
わりからたい……割高麥……三ノ六六／四ノ七三
わんきふ……碗久……一ノ八四

明治四十五年七月一日初版印刷
明治四十五年七月十日初版發行
大正七年十二月二十日十二版印刷發行

不許複製

訂正大增補

編纂者　大西林五郎

發行者　東京市神田區錦町一丁目十番地　藤井利八

印刷者　東京市京橋區弓町二十五番地　高橋郁

印刷所　東京市京橋區弓町二十五番地　三協印刷株式會社

日本陶器全書奥附

正價金三圓五拾錢

大販賣所

東京　神田區表神保町　東京堂書店
同　日本橋區數寄屋町　林平次郎
京都　上京區寺町通御池下ル　春和堂書店
同　上京區寺町夷川北　文華堂書店
大阪　心齋橋筋壹丁目　松村文海堂
名古屋　西區玉屋町　星野書店

發行元

東京市神田區錦町一丁目
松山堂書店
電話神田二二九九番
振替東京二〇四一二番

松山堂出版書目

書名	冊數	正價
古今名物類聚	全十六冊	桐箱入絹表紙 頗美本百部限リ絶版ス
同名物切之部	全二冊	金貳拾五圓
萬寶全書	全十三冊	金參圓
近世名家書畫談	全八冊	金貳圓貳拾錢
書法正傳	全六冊	金壹圓八拾錢
山中人饒舌	全二冊	金四拾錢
書畫名家全傳	全二冊	金壹圓
捃印補正書畫便覽	全三冊	金壹圓貳拾錢
聚鳥畫譜	全三冊	金參圓六拾錢
鶯村畫譜	全一冊	金貳圓
狂齋畫譜	全一冊	金壹圓
近世名家手簡	全二冊	金壹圓八拾錢

特約販賣書肆

東京　目黑書店
全　北隆館
全　東海堂
全　文林堂
全　至誠堂
全　榊原文盛堂
全　二松堂
全　三松堂
横濱　有隣堂書店
西京　川勝寶鴻堂
全　細川開益堂
全　山田聖華房
全　山本文華堂
大阪　森本開文館
名古屋　梶田文光堂
全　三輪書店
全　永東書店
長岡　目黑巢枝堂
新潟　萬松堂支店
甲府　大塚柳正堂
長野　西澤松葉軒
久留米　菊竹金文堂
金澤　池觀文堂
廣嶋　花井積善館
熊本　長崎樂善堂

書名	冊數	正價
革究圖考	全一冊	金參圓五拾錢
名家書譜	全二冊	金參圓
可庵書譜	全一冊	金壹圓
玄對書譜	全六冊	本紙紙帙入金拾圓
骨董集	全四冊	金壹圓八拾錢
近世奇跡考	全四冊	金參圓
用捨箱	全三冊	金壹圓參拾錢
春章畫百人一首	全一冊	金八圓
武清畫勳功草	全五冊	金五圓五拾錢
狂齋畫鷹鏡	全五冊	金貳圓五拾錢
花鳥畫譜 六種	各全一冊	各金八拾錢
金生樹譜	全三冊	金貳圓

書名	冊數	正價
掌中古刀銘鑑	全一冊	金九拾錢
古今鍛冶早見出	全一冊	金七拾錢
目利早手引	全一冊	金四拾錢
刀劒正眞便覽	全一冊	金五拾錢
新古刀相模取組	全一冊	金貳拾五錢
古今刀劒銘鑑	全三冊	金七拾錢
池の坊百瓶	全三冊	金七拾五錢
池の坊百花	全二冊	金七拾五錢
池の坊百圖	全二冊	金七拾五錢
古流百瓶	全二冊	金七拾五錢
陶器鑑定便覽	全三冊	金九拾錢
陶器考	全二冊	金壹圓

書名	冊數	正價
五行易指南	全五冊	金貳圓
易學發蒙	全一冊	金五拾錢
易學階梯	全一冊	金四拾錢
周易本筮指南	全一冊	金四拾錢
風俗女裝考	全四冊	金壹圓五拾錢
假名類纂	全一冊	金六拾錢
千蔭新百人一首	全一冊	金壹圓五拾錢
千蔭朗詠集	全四冊	金九圓
千蔭新採百首	全一冊	金五拾錢
千蔭往かひぶり	全二冊	金貳圓
千蔭吳竹帖	全一冊	金五拾錢
千蔭いろは帖	全一冊	金五拾錢

書名	冊數	正價
千蔭湘雲帖	全一冊	金五拾錢
千蔭眞砂帖	全一冊	金五拾錢
千蔭古今集序	全一冊	金五拾錢
千蔭新三十六歌仙	全一冊	金五拾錢
假字考	全二冊	金九拾錢
黑場必携	全二冊	金壹圓貳拾錢
茶席袖珍寶	全一冊	金六拾錢
魚漁手引	全三冊	金八拾錢
傍訓題畫必携	全一冊	金壹圓
菜根譯 正續	一一冊	金四拾錢 金四拾錢
新編詩作活法	全三冊	金壹圓
新編詩學活法	全三冊	金壹圓五拾錢

玄對畫譜

渡邊玄對先生筆

並製

最良美濃紙摺美本
帙入美濃判全八冊
定價金拾圓
遞送料金拾八錢

玄對先生は谷文晁に師事せられし人にして實に一代の大家なり本書は先生が絶筆になれる物にして山水を主として猶人物あり四君子あり鳥獣あり樓閣あり其筆致水墨、濃淡、設色、勁秾、密描、從横、自在、變化、窮りなく眞に手腕の卓越、開度、心神、默契する處怒く云可からざる妙味あり故に漢畫愛好家は勿論漢畫を學ばんとするの士は必須缺くべからざる好參考書たり

聚鳥畫譜

沼田荷舟先生筆

（極彩色刷）

最良柾摺美麗本
美濃判全三冊
定價各冊金壹圓貳拾錢
遞送料各冊金六錢

本書は荷舟先生が多年の丹精により四時の花鳥を實寫したる物にて其花鳥の活躍し其姿勢の生動し輕々淡々の裡に愈々新の氣に打たれ眞に活物の觀あらしめ加ふる彫刻は名匠を以てし印刷は巧手を藉り巧に彩色を施したれば繪畫愛好家は觀賞に供す可く畫學の士は好材料たり又工藝美術家は應用書として裨益する所少なからざるべし、速に一本を座右に備え玉はん事を

茶器骨董愛翫家の大寶典

陶隱尙古老人（松平不昧）公著

古今名物類聚

○絹表紙○最上桐箱入
○全拾八冊○上質柾及美濃紙
○精巧木版摺○古代模樣彩色
○高雅美麗本
◉定價金貳拾五圓
送料金五拾四錢

本書の內容

第壹編（中興茶人部）唐物、古瀨戶、藤四郎、藤四郎春慶、金華山、破風（大名物茶入部）大名物、古瀨戶

第貳編（後窯國燒部）後窯國燒（天目茶碗部）茶碗樂燒（雜記の部）茶物茶入、茶筴、壺、水指、釜硯

第參編（拾遺部）藤四部、金華山、破風、唐物、香爐、古瀨戶、春慶、掛物、歌の物、小倉色紙、臺、盆、香

第四編（名物ぎれ之部）緞子○金襴間道○雜載

著者陶隱尙古老人とは維新前の人にて茶客に此人ありと知られたる**松平不昧公**の別號なりとかや公は世人の知る如く武家にして能く茶道の奧儀を極め武家の茶人たる片桐石州小堀遠州公又茶道の宗匠千利休及宗旦等を凌ぐの大茶人たるを以て自ら任じたる程の名人にして本書は其時代**茶道**の最も**隆盛を極め**たる頃公が愛玩し且蒐集せられし物と德川御三家其の他御大名方又は斯道大家の**秘藏**せし茶道の**珍器名物**を圖寫し寸法をも示し加ふるに由緒等を詳述したる書にて本書凡例中に曰く『慈照相公茶玩器をすかせ給ひ東山の別邸に茶家を設け古今の名畫妙墨珍器寶壺の類を聚め給ひ當時の數奇者能阿彌相阿彌に仰せありて彼之を求めさせられ其の器の名と價とを定めしめ給ふ次で信長秀吉の二公も亦此道を好み給ひ利休宗及等に仰せて名を命じ價をも定めしめらる後世之等の器を稱して名物と云ふ直其の後を中興名物次を大名物と稱す云々』と見えたり故に本書は茶道に志すの士は勿論骨董愛玩家、美術賞鑑家、好古家陶磁工藝家の唯一絕好侶伴書として一日も缺く可らざる珍書なり◉本書元寬政年間に板成りし物にて其の後ち僅少の頒布ありたるのみ永歲絕版の有樣となり今日數拾金を投ずと云へ其此の書を得る事容易ならず古書拂低の昨今全く影を沒す斯の如きは斯道の大恨事なり、故に數奇者の**渴望**を滿たさん爲め今回弊堂主の苦心に依り漸く再摺出來○挿入圖及切れ之部等精巧なる木版摺にして眞に實物の觀あらしめ又裝禎倭綴高雅美本にて善美を盡したれば床飾りとして好適▲頒布僅少▲御申込要迅速

挿入畫　四百餘個